神癒の福音

A・B・シンプソン
藤遥　制作

序文

この小品の前半は、神癒の福音についての一連のトラクトとして、版を重ねて発行されてきたものです。神の祝福を豊かにいただいたという証を多方面から頂戴し、一冊にまとめてほしいとの要望も多くあったため、著者はいくつか新しい章を付加して再出版することにしました。この簡素な本が、神癒という重要なテーマについての聖書の教えを簡潔かつ有益に伝える一助となれば幸いです。本書で述べる見解は、神のことばの秤で慎重に吟味され、多くの注意深い経験と観察によって確かめられたものです。

このテーマは重要です。しかも神の聖霊は、神の民がこれに目を向けるよう強く迫っておられます。だからこそ、このテーマは最も慎重に、徹底して聖書に基づいて学ばなければなりません。力ある信仰は、全き確信を通してのみ与えられます。多くの人は、冷ややかで保守的な、時には嘲るような不信仰を示しています。それにもかかわらず、この教理は全教会にとって品性と霊的生活の試金石となりつつあります。深い静かな神の運動によって、何千人ものクリスチャンの生活全体に革命をもたらし始めています。

神癒の教理は霊的生活に深く関わっています。誰であれ真にこれを受けるなら、ますます聖なる者とされ、クリスチャンとしてさらに役立つ者となるに違いありません。次なる宣教運動においてこれが最も大きな力のひとつとなると私たちは信じております。やがて教会に訪れる最も偉大な霊的覚醒において、これが重要な位置を占めたとしても、驚くにはあたりません。また、これが私たちの主の再臨の望みと、その時が近いことに密接に結びついているのは疑いようがありません。

最も大切なことは、神癒を福音の他の部分との関係において、常に正しく位置付けておくことです。神癒は福音全体ではありません。福音の主要部分でもありません。しかし、その一部です。そして全体にふさわしく従属しているかぎり、神癒は、福音それ自体と同じように、すべて信じる者にとって神の力となるでしょう。

第一章　聖書的土台

人間は二重の性質からなっています。人間は物質的な存在であり、また霊的な存在でもあります。両性質は堕落によって等しく影響を受けました。肉体は病におかされ、魂は罪で腐敗しました。それゆえ、贖いの完全な理念は両性質を含む、つまり贖いは霊的ないのちの刷新だけでなく、肉体的ないのちの回復も与えるものであると期待してよいでしょう。もちろんその期待は失望に終わりません。

贖い主が人々の間に現れ、私たちの悲惨と必要とに両腕を伸ばしてくださいました。片腕には救いを、もう片腕には癒しを持っています。主はご自分を完全なる救い主として差し出しておられます。私たちのうちに住まわれる主の御霊は私たちの霊のいのちとして、主の復活のからだは私たちの死ぬべき肉体のいのちとして。主はご自分の地上での働きを、癒しを必要とするすべての者を癒すことから始めました。その働きの終わりは、十字架上で私たちの罪を完全に贖うことでした。それから、空になった墓を通って天に昇り、「全世界」に向けて、「世の終りまで、いつも」（マタイ二八・二〇）有効な、二つの宣教令を残されました――「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、……病人に手をおけば、いやされる」（マルコ一六・一五～一八）。これが「聖徒たちによって、ひとたび伝えられた信仰」（ユダ一・三）です。その信仰はどうなってしまったのでしょうか。どうしてこれが今も世界中で教えられず、実現されていないのでしょうか。神癒は使徒の時代に終わったのでしょうか。ペテロ、パウロ、ヨハネが世を去ったときに神癒も取り去られたのでしょうか。そうではありません。

神癒は何世紀も教会に存在していましたが、最初の数世紀に世俗、腐敗、形式主義、不信仰が入り込んでいくうちに徐々に失われました。信仰復興が起こり、霊的生活が深まって、聖霊と生けるキリストに対する聖書的な認識がいっそう明確になり、主ご自身の再臨が近づくにつれて、肉体的な贖いというこの幸いな福音は、かつての地位を取り戻し始めています。教会は、決して失うべきではなかったものを取り戻すことを、徐々に学びつつあります。けれども同時に、因習的な不信仰と、冷たく伝統に固執する神学的合理主義の精神も現れているため、私たちは「聖徒たちによって、ひとたび伝えられた信仰のために戦う」（ユダ一・三）必要に迫られています。

何よりもまず、私たちは聖書的土台を確信していなければなりません。信仰はつねに神のことばに根ざしていなければなりません。「信仰による祈」において最も大切なことは、神を信じる単純な信仰で病気が癒されることが、疑いようもなく福音の一部であり聖書の教理であると、十分に、また堅く確信することです。

【一】　一番初めに出てくる癒しの約束は、出エジプト記一五・二五～二六です。

> その所で主は彼らのために定めとおきてとを授け、その所で彼らを試みて、言われた、「あなたが、もしあなたの神、主の声に良く聞き従い、その目に正しいと見られることを行い、その戒めに耳を傾け、すべての定めを守るならば、わたしは、かつてエジプトびとに下した病を一つもあなたに下さないであろう。わたしは主であって、あなたをいやすものである」。

この約束が置かれている位置は、きわめて意味深いものです。それはイスラエルの民の旅路のまさに始めにあります。ちょうどキリストがその働きを病気の癒しから始められたのと同じです。彼らが紅海を通った直後のことです。この出来事ははっきりと私たちの贖いの型であり、彼らの旅路は私たちの信仰の旅路の型であることを、私たちは知っています。「これらの事が彼らに起ったのは、他に

対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである」（第一コリント一〇・一一）。ですから、この約束は贖われた神の民である私たちのものとなります。私たちの旅路のまさに出発点において、神は癒しの契約をもって臨んでくださいます。神は、私たちがきよさと愛の従順をもって歩むなら病気から守られる、と宣言しておられます。病気は、私たちが永遠に後にしてきた、古い奴隷の生活に属するものなのです。病気はエジプト人のものです。神の民のものではありません。私たちが霊的にエジプトに戻るのでない限り、エジプトの熱病や危険に戻ることはありません。いえ、これは単なる約束ではありません。「定めとおきて」です。それゆえ、主イエスも、御名による癒しという明確なおきてを私たちに残してくださいました。それは福音の他のどのおきてにも劣らず神聖で、守るべきものです。

【二】 詩篇一〇五・三七

「そして金銀を携えてイスラエルを出て行かせられた。その部族のうちに、ひとりの倒れる者もなかった。」

この箇所は先の約束の成就を示しています。イスラエルの民は、契約にある自らの義務を果たせてはいませんでしたが、神はご自分のみことばを守られました。ですから、私たちの信仰と従順はしばしば不完全でありますが、もしキリストが私たちの保証であり、もし私たちの信仰が主の功績と主の御名を求めるなら、私たちもまた約束の成就を見るようになります。

【三】 ヨブ一～二章

ヨブの物語は、最古の歴史資料のひとつです。この物語は病気がどこから来るのかを誤解の余地のなく教えてくれます――サタンから来るのです。また、神癒に至る道は恵みの御座にへりくだり、自分自身の罪を裁くことであると教えてくれます。病室の内側がこれほどあらわにされた例があるとすれば、それはウヅの地のヨブの病室です。ところが、そこには医者もなく、人間的な治療もなく、ただ彼の復讐者である神を見上げることだけが描かれています。ヨブが自己義認と自己弁護を手放し、神が導き入れたいところ――自己放棄と謙遜――に入ったとき、病気は癒されました。

【四】 詩篇一〇三・二～三

わがたましいよ、主をほめよ。
そのすべてのめぐみを心にとめよ。
主はあなたのすべての不義をゆるし、
あなたのすべての病をいやし、

ダビデの詩篇は、絶え間ない苦難の記録です。けれども、救い出してくださるのはいつも神であり、神だけです。そこに人の手は見えません。ダビデは罪の赦しを求めるときと同じように、まっすぐ天を仰いで癒しを求めます。そして同じひと息に叫びます。「主はあなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいやし」。しかも、完全な癒しです。罪の赦しが全面的で永続的であるのと同じ意味で、**すべての**病の癒しです。それがいかに栄光に富む全面的なものであったかは、十分に明らかです。「東が西から遠いように、主はわれらのとがをわれらから遠ざけられる」（詩篇一〇三・一二）。ヨブのときと同様にここでも、病気と罪に密接なつながりがあります。その両方が共に癒されなければなりません。

【五】 第二歴代一六・一二～一三

アサはその治世の三十九年に足を病み、その病は激しくなったが、その病の時にも、主を求めないで医者を求めた。アサは先祖たちと共に眠り、……

この王は治世の始めには、人間の力がまったく頼りにならなかったとき、単純に疑わず神に信頼しました。その信頼によって（第二歴代一四・九～一二）、彼は最も栄光ある勝利のひとつを歴史に打ち立てました。けれども、成功が彼を腐敗させました。彼は肉の力にあまりにも価値を置くようになりました。そのため次の大きな危機が訪れたとき（第二歴代一六・七～八）、彼はシリアと同盟を結び、神の助けを失いました。彼は預言者の警告を聞き入れず、地上のものに頼る道をその極みまで突き進みました。彼は、病気になりました。エチオピヤびとよりも強い敵を前にして、またしても人間に向かいました。「その病の時にも、主を求めないで医者を求めた」。その結末を描くことばとして、これ以上悲しく皮肉なものはないでしょう。「アサは先祖たちと共に眠った」。

【六】　イザヤ五三・四～五

まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。……その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。

この素晴らしい福音的なまぼろし、旧約聖書の福音は、来たるべき贖い主を正確に映しています。そしてその先頭に、力強い「アーメン」を冠して、癒しの約束が置かれています。この章でただ一度だけ用いられる「まことに」です。彼のいのちと死によって痛みと病から完全に贖われることが、ありうる限りの力強さで述べられています。後の福音書記者は、聖霊の導きに従ってまさにこの箇所を引用しました。マタイ八・一七で、キリストがいたるところでなされた癒しの働きの説明として引用されています。

私たちの英語訳は、原文の力強さをきわめて不十分にしか伝えていません。マタイ八・一七の訳のほうがずっと正確です。「彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた」。直訳すると、「まことに彼は私たちの病を負い去り、私たちの痛みをになって運び去った」となります。広く読まれているアルバート・バーンズによるイザヤ書注解など、ヘブル語の権威ある学者の書いた注解を読めば、ここで使われている二つの単語がそれぞれ病気と痛みを意味すること、また「負う」と「になう」は、単に共感を意味するのではなく、実際に身代わりとなり、背負ったものを完全に取り去ることを意味するとわかるでしょう。ですから、イエス・キリストは、私たちの罪を負われたのと同じ完全な意味で、私たちの病気を**確かに負い去り、になって運び去って**くださったのです。そうです、私たちの**痛み**さえもです。ですから、キリストのうちにとどまるなら、私たちは病気からも痛みからも完全に解放されることができます。こうして、「その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」。なんと栄光ある幸いな福音でしょうか！なんと栄光ある幸いな「重荷を負ってくださる方」でしょうか。このように昔の預言者はまぼろしの中で、贖い主がまずもって偉大な医者として来られるのを見、それから偉大ないけにえとして十字架にかかられるのを見たのです。福音書記者たちもまた、主をそのように描いています。主は三年間、偉大な癒し主として働かれ、それから恥と苦痛の六時間、死にゆく小羊となられました。

【七】　マタイ八・一七

（イエスは）病人をことごとくおいやしになった。これは、預言者イザヤによって「彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた」と言われた言葉が成就するためである。

この引用は、主が病気の人々をみな癒された理由を説明するためでした。敵にご自分の神性を証明するためではありません。昔の預言でご自分について書かれたことを実現するためでした。もしそれをなさらなかったら、ご自分の人格に真実とはいえません。そして今もそうなさらないなら、主は「きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない」（ヘブル一三・八）イエス・キリストではないことになります。これらの癒しは、その時だけのものではなく、継続的なものでした。例外的な事例ではなく、普遍的でした。主はひとりも追い返されませんでした。「病人をことごとくおいやしになった」。「（イエスに）さわった者は皆いやされた」。主は今も同じです。

さて、これは主の地上での働きでした。私たちはこれまで、贖い主のすべての働きを、生涯の終わりの一つの行いに安易に集約させてきました。主の血の価値を熱心に重んじるあまり、地上のご生涯の尊さを忘れていました。しかし神は、主が十字架にかかって死なれる前に、三年以上にわたって御力と愛のわざを行われたことを、私たちが忘れるのを望まれません。私たちには十字架のキリストが必要であるのとちょうど同じように、生けるキリストが必要です。レビ記の型には、罪祭と同様に素祭も含まれていました。苦しんでいる人の心は、カルバリの小羊によって養われなければならないのとちょうど同じように、ガリラヤとベタニヤの偉大な愛の心によっても養われることが必要です。

主の癒しの御力と恵みの記録は膨大な量にわたるため、すべてを詳細に書くには紙面が足りません。らい病人、足のなえた者、目の見えない者、中風の者、体の動かない者、熱病の者、「治療を要する人たち」みなを癒しました。主はしばしば罪と病気を結びつけ、癒しのみことばを語る前に罪を赦しました。主は、癒

しを自分のものとして受け取る信仰によって、人々が自分自身で触れることを求められました。また、起き上がって床を取り上げることで癒しを受け取るようお命じになりました。主の癒しはすぐ近くにいなくても起きました。百人隊長のしもべや役人の息子に届き、彼らは救われました。主は、助けようとされるみこころを少しでも疑う者をきびしくとがめ、人の苦しみの責任をその人自身の不信仰に帰されました。主のご生涯の全ページにわたって、これらばかりでなくもっと多くの教えが満ちています。今も主の癒しの御力を手にする秘密が私たちに啓示されています。もしも誰かがこれらの奇跡を、ただ霊的な癒しと祝福の型として説明し、主がご自分を信頼するすべての者に今も行おうとしている実例としないなら、それは福音書を神話とみなす説と同じくらい理解しがたいことです。ナザレのイエスとは、このような方でした。にもかかわらず、イエスの死と共にこの祝福の御力も死んでしまったのでしょうか。

【八】ヨハネ一四・一二

> よくよくあなたがたに言っておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである。

ここに再び「まことに」が出てきます。いえ、「まことに、まことに」です。それなら、これは強調すべきこと、人が必ず疑うようなことであるはずです。この意味は、ペンテコステ以後の教会がより大きな霊的力を持つこと、聖霊によってイエスご自身がなされたよりも偉大な霊的働きを教会が行うことなのだ、なぜならたましいの救いはからだの癒しよりも偉大なのだから、と言ったからとて、私たちには無益です。というのも、イエスが言われたのは「わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう」、それに加えて「もっと大きいわざ」をするということだからです。つまり、信じる者はキリストと同じわざも、さらに大きなわざも、両方とも行います。ですから、教会がキリストと同じわざをも行ったことがわかります。主のご生涯においてさえ、主は十二人の使徒を遣わし、七十人を後に続くクリスチャンの長老たち全体の先駆けとして（七十人はモーセの七十人の長老に対応しており、クリスチャン時代の最初の長老で す）遣わして、彼らに癒しの力を余すところなく託しました。また、イエスが世を去ろうとするときに、この二つの宣教令を、誤解の余地のない言葉で記録にお残しになりました。

【九】マルコ一六・一五～一八

> 「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる」

ここに、弟子たちに与えられた大宣教令、すなわち二重の福音があり、主のご臨在と変わらない御力が保証されています。いったいどんな権利があって、私たちは福音の一方が欠けたまま他方を宣べ伝えることができるのでしょうか。どんな権利があって、滅んでいく世界に対して福音の一部を隠せるのでしょうか。どんな権利があって、不信仰の世界に出て行き、これらのしるしが伴うことなく福音のメッセージを受け入れなさいと呼びかけられるのでしょうか。どんな権利があって、それらのしるしが宣教の働きに伴わない理由を、しるしを神のことばから取り除いたり、過去の遺物として捨て去ろうとすることで説明できるのでしょうか。いいえ。キリストは確かにしるしを与えられました。そしてクリスチャンが「信じ」、しるしを期待し続けた限り、しるしは実際に伴ったのです。そして、こうした「しるしと不思議との力」によって教会はエルサレムに、サマリヤに、そして地のはてにまで建てられたのです。世の不信仰は今日でも使徒の時代と同じようにしるしを必要としています。使徒の時代には、癒しの力が現されるしるしは決して使徒だけに制限されたのではありませんでした。ピリポとステファノは、ペテロやヨハネのように栄光ある務めに用いられました。第一コリント一二・九～三〇で「いやしの賜物」が教会に賜った力のひとつとして、広く普及し普遍的なものと理解されていたことが語られています。しかし今、使徒の時代は終わろうとしています。神癒はこの後も続くのでしょうか。続くとすれば、誰によってでしょうか。どんな制限によって、神癒は狂信や思い上がりから守ら

れるのでしょうか。どんな権限によって、神癒は世の終わりまで受け継がれ、苦悩の中にあるすべての神の聖徒たちの手の届くところに置かれるのでしょうか。私たちはこれらの問題に対し、最も深い関心をもってヤコブ書の教えを見たいと思います。

【十】ヤコブ五・一四～一五

あなたがたの中に、病んでいる者があるか。その人は、教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリブ油を注いで祈ってもらうがよい。信仰による祈は、病んでいる人を救い、そして、主はその人を立ちあがらせて下さる。かつ、その人が罪を犯していたなら、それもゆるされる。

まずはじめに、このいましめを誰が書いたかに注目しましょう。使徒会議の長であったヤコブです。彼はエルサレムの母教会を指導していました。エルサレムの会議で決定を取りまとめるために「わたしの意見では」と言う権威のある人物でした（使徒一五・一九）。パウロが「教会の柱」として最初に名前を挙げる人物でした（ガラテヤ二・九）。そのヤコブが、使徒たちの後を継いでキリストの群れを監督する、普通の常任の働き人たちに、使徒的な賜物を正当に引き渡しているのです。次に、この力が誰に対して与えられたのかをよく見ましょう。使徒ではありません。使徒たちは今や世を去りつつあります。特別な賜物を持った、めったに会えない人たちにでもありません。そうではなく、長老たち、つまり各教会にいるごく普通の働き人に与えられたのです。苦しみに会っている者が近しく面会できる人々、世の終わりまで続く人々です。さらに、このいましめが与えられた時点がいつなのかに注意しましょう。使徒時代のはじめではなく、終わりです。使徒の世代ではなく、次の来るべきすべての世代のために書かれました。というのも、実際、これら新約聖書の書簡は、書かれた当時に広く読まれたのではなく、「世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のため」（第一コリント一〇・一一）におもに書かれました。また、このいましめで課された命令の性質に注目しましょう。信仰による祈りと、主の御名によって油を塗ることです。ここで、油を塗ることは明らかに医療行為ではありません。医者ではなく長老たちに命じているのですから。また自然な解釈として、これはマルコ六・一三等の塗油と同じで間違いありません。使徒たち自身が行った病気の癒しのための塗油と結びついています。他の解釈は、私たちの主と使徒たちが行っていたこの習慣の明らかな意味に反する、無理なものとなるでしょう。ここにそれと異なるという説明がない以上、私たちとしてはそれが同じもの――油をその特有のしるしとする聖霊の御力を表す、象徴的な宗教儀式――であると信じないわけにはいきません。ギリシャ教会は今もこのいましめを守っています。カトリック教会の背反が、これを悲しみをたたえた死への備えに変えてしまったのです。これは本来、神のいのちの御霊が人のからだに宿り、生かす御力を息吹くことの美しい象徴です。まだあります。これが命令であることに注目しましょう。ただの特権ではありません。病気に対する神の処方です。従順なクリスチャンなら、これを省いて済ませてよいものではありません。病気に関して、他のいろいろなやり方は神の権威から来てはいません。これが神のご計画です。これによって信仰はシンプルに、簡単になります。私たちはただ、子供のように信頼して従えばよいのです。神が成し遂げてくださいます。最後にもうひとつ、見過ごしてはならないことがあります。病気と罪が結びついていること、試練は神の懲らしめであって、自分を裁くことと悔い改めと赦しが必要であると示されていること、そして赦しと癒しを共に主の御名によって求めることができるという幸いな保証です。

【十一】第三ヨハネ一・二

愛する者よ。あなたのたましいがいつも恵まれていると同じく、あなたがすべてのことに恵まれ、またすこやかであるようにと、わたしは祈っている。

ヤコブの証の他にさらに必要なら、最後の使徒、主のお心を最もよく知る者が、この優しい祈りを残しました。これによって私たちの御父が私たちのたましいだけでなく、からだの健康をも優しく気遣ってくださることがわかります。神がこのような祈りを私たちのために吹き込んでくださるのですから、私たちは恐れずにそれを自分のものとして求めてよいのです。ただし、そう求めるときに、私たちの健康は私たちのたましいが恵まれているのと同じ程度になることを忘れてはなりません。

【十二】 エペソ五・三〇

わたしたちは、キリストのからだの肢体なのである。

このことばは、私たちのからだと主イエス・キリストの復活のからだとの間の結合を認識しています。この結合ゆえに、私たちの朽ちる器に対して主の完全ないのちの生ける御力が注がれることを要求する権利が、私たちにはあるのです。主のみからだは私たちのものです。主のいのちは私たちのものです。それで十分です。

【十三】 ローマ八・一一

もし、イエスを死人の中からよみがえらせたかたの御霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリスト・イエスを死人の中からよみがえらせたかたは、あなたがたの内に宿っている御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも、生かしてくださるであろう。

この箇所が将来の復活に言及しているとは考えられません。復活は、聖霊によってではなく「神の子の声」によって起こるからです。これは現在、御霊が内に住んで生かしてくださるということです。生かされるのは「死ぬべきからだ」であって、たましいではありません。これが肉体の回復でないとしたら何がありえるでしょうか。それは聖霊の直接の働きであり、神の御霊の内住を知る人だけが受けることのできるものです。イエス・キリストが地上で行われたすべての奇跡は、神の御霊がなさったことでした（マタイ一二・二八）。そして、私たちが内側に同じ御霊の内住をいただくなら、同じわざを体験するでしょう。

【十四】 第二コリント四・一〇～一一

いつもイエスの死をこの身に負うている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである。わたしたち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されているのである。それはイエスのいのちが、わたしたちの死ぬべき肉体に現れるためである。

これはパウロの肉体的な経験です。おそらく迫害により、時には暴力を受けて、常に危険、弱さ、肉体的苦しみにさらされていました。それは、イエスの癒し、回復させ、支える御力といのちが、彼のからだそのものにいっそう絶えず現れて、苦しんでいる聖徒を励ますためでした。「あなたがたの益」（一五節）とある通りです。パウロの生涯は奇跡の連続でした――彼に与えられた約束が、後に苦しむすべての人のためのものでもあることを、すべての人に保証する証と記念碑になるためです。「わたしの恵みはあなたに対して十分である」（一二・九）。パウロは言います。このいのちは「日ごとに新しくされていく」（四・一六）。キリストの癒しの御力は、私たちがキリストに留まり続けるかどうかにかかっています。他のあらゆる賜物と同じように、それは日ごとに新しくされていきます。

【十五】 最後に、千八百年にわたって語り続けてきた声を、甘美なことばを聞きましょう。ヘブル一三・八

イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない。

これは、一世代前に語られたあの別れのことばの反復です。「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（マタイ二八・二〇）。主は「いるであろう」とは言われませんでした。それでは途切れることがあるかのように聞こえてしまいます。そうではなく、「いる」と言われたのです。不変の現在、失われることのない臨在、愛、近さ、世の終わりまで永遠に継続し惜しみなく与えられる癒しと救いの御力です。**「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない」。**

以上のように、私たちは出エジプト記からパトモス島まで聖書の教えをたどってきました。神の民の旅路のまさにはじめから、神が癒しのおきてを与えてこられたのを見てきました。旧約の時代にも、ヨブの苦しみ、ダビデの詩、アサの嘆かわしい死の中に、それが示されているのを目撃しました。イザヤの預言的なまぼろしに来たるべき癒し主がおられるのを目にしました。人の子が文字通りそのまぼろしを実現するために来られたのを確かめました。悲しむ弟子たちにキリストが変わらずに共におられると告げたのを聞きました。キリストが癒しの御力を弟子たちの手に渡したのを見ました。そして、弟子たちがそれを私たちに、世の

終わりまで続く神の教会の常任の働き人たちに手渡したのを見ました。今や、これ以上のどんな証拠を求められるでしょうか。病める衰弱した世界に対してこの偉大な救いを信じ、喜び、受け取り、宣言することのほか、私たちは何ができるというのでしょうか。

第二章　実践的指導

神への信仰に基づく神癒の教理の聖書的土台については、すでに考察しました。次に来るのは実践的な疑問です。どのようにして、この教理を十分に信じた人が、神癒の祝福を受け取り、癒しを自分のものにできるのでしょうか。

【一】　この件に関する**神のことば**を十分に確信してください。

これだけが、合理的で聖書的な信仰の確かな基礎です。あなたの信仰は聖書の偉大な原理と約束とに根ざしていなければなりません。そうでなければ、必ず来る反対と試練に倒れずに立つことはできません。これが福音の一部分であり、キリストの贖いに含まれていることを確信していなければなりません。最も優れた人々がどんなに教え、論じても揺るがないほどにです。神癒に関して信仰が実践に至らずくじけてしまうほとんどの理由は、神の言葉に対する確信が不完全で、疑念が残っていることに由来します。お許しいただければ、筆者はある女性の話をしましょう。この真理にかたく立って、キリストを癒し主として受け入れた女性の話です。

彼女はただちに霊もからだも大いに強められ、喜びのあまりに良き知らせを友人たちにふれ回りました。その中の一人、牧師に自分の信仰と祝福を話しました。驚いたことに、牧師はすぐさま神癒の信仰を否定して、この新しい熱狂に警告を発し、彼女が信じている約束は私たちのためのものではないのだと説得しました。使徒たちと使徒の時代にだけあったのだ、と。彼女は聞き、尋ね、説き伏せられ、確信を捨ててしまいました。一ヶ月もしないうちに、筆者が彼女と再会すると、彼女は聖書を信じているのか信じていないのか自分でもわからないほどにすっかり落ち込んでいました。彼女はこう言いました。「もしあの約束が使徒のためだけのものなら、聖書にある他の約束もすべて使徒のためだけのものではないでしょうか」と。彼女は招かれて、しばらくの間、神のことばの教えを調べることになりました。出エジプト記からヤコブの手紙まで、神癒の約束の数々を慎重に見比べ、いろいろな疑問を精査するうちに、真理があまりに明白になり、その証拠もあまりに圧倒的になりました。彼女はこう言うほかありませんでした。「ここに書いてあるとわかりました。真実だとわかりました。たとえ世界中が否定しようとも」。それから、彼女はひざまずいて、自分の弱さと不信仰について主の赦しを願い求め、信仰と献身の厳粛な告白を新たに行い、神癒の約束と聖霊のバプテスマを新たに求めました。その日から彼女は回復し、あらゆる霊的な祝福をもって祝福されるようになりました。それを見て、つまずきをもたらした牧師も、これが神の指であることを認めざるを得ませんでした。けれども、彼女の全祝福のスタート地点は、神のことばを十分に受け入れ信頼したその瞬間だったのです。

【二】　**あなたを癒すことが神のみこころである**と十分に確信してください。

ほとんどの人は、キリストが神癒の御力を持っておられることを喜んで認めています。悪魔でさえも認めています。本物の信仰は、神がこの信仰の祈りに応えることがみこころであるということにも、同等の信頼を寄せます。この点に疑いがあれば、はっきりと癒しを求める祈りは必ず麻痺してしまいます。もしここに疑問があるなら、確かな期待を持つことはかなわないでしょう。私たちの祈りがひょっとしたら受け入れていただけるかもしれないといった曖昧な信頼では、病気と死の勢力と格闘する上で十分な力を得られません。「もしみこころでしたら」と神癒を祈り求めても、サタンがつかんでいるものを離せと要求するところまでいきません。これは、願う前に神のみこころを知っておくべき事柄です。そのうえで、それが神のみこころであるからこそ、私たちもそれを望み、要求するのです。

神は私たちに神のみこころを知りうる方法を与えてくださったでしょうか。確かに与えてくださいました。もし主イエスが贖いの中で私たちのために買い戻してくださったものがあれば、それを得ることこそが私たちに対する神のみこころであるに違いありません。なぜなら、キリストの贖いのみわざは単純に御父のみ

こころを行うことだからです。もしイエスが私たちに何かを約束したのなら、それを受け取るのが神のみこころであるはずです。というのも、神のことばによる以外にどのようにして神のみこころを知りうるのでしょうか。いえ、それどころか、イエスが新約聖書（New Testament）の中でそれを私たちに遺してくださったのなら、新約聖書とはまさに**イエスの最後の遺言（will）**なのですから、それは私たちの兄弟の遺言による遺産のひとつにほかなりません。みこころ（will）に関するすべての疑問は、そこで終わるはずです。神のことばは未来永劫にわたって神のみこころの基準です。そして、神のことばが変わらずに宣言しているところによると、神の最大の願いと神の行為・みこころに関する不変の原理は、すべての人にその信じるところに応じて報いること、特に信仰によってキリストを受け入れる者すべてを救うこと、また同じような信仰によって癒しを受け入れる者すべてを癒すことです。誰であれ、罪の赦しを願い求めるときに「主のみこころであれば」とは考えません。肉体的な贖いの約束に関しても同様に、みこころであるかどうか疑うべきではありません。どちらも、それを受け入れようとする信頼の心を持つ者すべてに、惜しみなく差し出されています。

最近、筆者が見かけた非常に印象深い出来事があります。クリスチャンの働きでよく知られた一人の女性が、神癒の祈りと塗油をしてもらいました。数週間して戻ってきた彼女は、「少しも良くなりません」と言いました。十分に神癒を信じていますか、と尋ねられると「はい」と答えました。「もし主のみこころにかなうなら私は癒される、と信じております。みこころでなければ、病気のままでいることを受け入れるつもりです。」それで、こう答えました。「けれども、このことに関して神ご自身のことばからみこころを知り、祝福を十分に期待して願い求めることは、私たちに許されていないのでしょうか。そもそも、それが神のみこころであると信じる根拠もないのに、神に何かを願い求めてよいものでしょうか。神のことばは神のみこころを表現していないのでしょうか。ひとたび神がそれを完全に約束されたあとで、それが神のみこころであるかどうかを疑うのは、神を悩ませ、侮ることではないでしょうか。」彼女は帰り、その翌朝、神癒の約束を自分のものとして要求しました。神には病を取り去ることがおできになると信じるだけでなく、そうしようと願われているし、実際にしてくださると信じます、と彼女は主に祈りました。半時間もしないうちに、それは完全に、目に見えて消えてしまいました。体の外にできたかなり大きな腫れ物でしたから、思い込みや見間違いの余地はありません。

「みこころが行われますように」という祈りには、しばしば目立たない不信仰が多く潜んでいます。この幸いな願いは、神の愛と祝福の計り知れない高みを実際に言い表しています。神のみこころよりも優しいものはありません。それなのに、私たちはしばしばそれがあたかも冷酷な暴君の鉄の手であるかのように、あるいは変えようのない運命であるかのように考えて祈るのです。

【三】 あなた自身が**神の前に正しくある**ように気をつけてください。

もし何らかの罪が原因であなたが病気になったなら、全面的に悔い改め、罪を告白し、できるかぎり償いをしてください。もしそれがあなたを悪から分離するために計画された修練なら、すぐさま正直に自分を裁いて神の前に捧げ、神があなたをきよめてくださるように、また聖さのうちに保ってくださるよう恵みを求めてください。汚れた心は病気の尽きぬ源泉です。きよめられた霊はそれ自体聖くあるのと同様に、健康にも良いのです。同時に、サタンに信仰を麻痺させられてはなりません。サタンはあなたの目をあなた自身のふさわしくなさに向けさせ、神癒を求められるほどあなたは善くないと言ってくるのです。私たちはどんな意味でも神の恵みに値する者ではありません。唯一の申し立てはキリストの御名、功績、義です。それでも、私たちは自覚した罪を捨てて、神に喜んでいただくために歩むことができます。自分で自分を裁き、神が間違っていると示してくださるものをすべて捨て去ることができます。それを行うなら、その瞬間に私たちは赦されます。「自分をよくわきまえておくならば、わたしたちはさばかれることはないであろう」（第一コリント一一・三一）。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」（第一ヨハネ一・九）。赦された感覚や喜びを感じるまで待ってはいけません。そうではなく、あなたの意志を完全に神に向け、あなたが受け入れられていることをすぐさま信じてください。そして、「心はすすがれて良心のとがめを去り、からだは清い水で洗われ、まごころ

をもって信仰の確信に満たされつつ、みまえに近づこうではないか」（ヘブル一〇・二二）。

意図的に神に背いたままで、あるいは私たちが重んじて従うようにと神が意図された懲らしめをないがしろにしたままで、自分や他人のために信仰を使おうとしても、まったく徒労に終わります。ですが、神の矯正を受け入れ、謙遜と従順な心をもって神に向き直るとき、神は恵みをもって痛みの手を取り除き、癒しの御手を赦しの愛のしるしとしてくださいます。「信仰による祈は、病んでいる人を救い、そして、主はその人を立ちあがらせて下さる。かつ、その人が罪を犯していたなら、それもゆるされる。だから、互に罪を告白し合い、また、いやされるようにお互のために祈りなさい」（ヤコブ五・一五～一六）。私たちの病気はしばしば、私たちがサタンの領地に足を踏み入れたことによって感染した道徳的なマラリヤです。私たちが禁域から出て聖域に戻らない限り、癒されません。そのため、このように私たちの個人的な状態を確認することは、神癒の条件ではないものの、非常に大切な要素です。神が私たちを取り扱われるすべてのことの偉大な目的は、私たちの最高の幸福と霊的な健全さです。それゆえ、苦しんでいるクリスチャンに対して、次の古い訓戒以上に有益な助言はありません。「われわれは、自分の行いを調べ、かつ省みて、主に帰ろう。彼は心から人の子を苦しめ悩ますことをされない。主はおのれを待ち望む者と、おのれを尋ね求める者にむかって恵みふかい」（哀歌三・四〇、三三、二五）。

筆者はこの例として、もうひとつ実際の出来事をお話ししたいと思います。筆者の家族の一人が突然、重篤な病気にかかったことがあります。ごく幼い子供だったため、その子の過ちや罪が原因でそうなったのではないのは確実でした。激しいひきつけの中で、人間的な治療はすべてただちに取りやめ、祈りと塗油によってこの子を神に委ねました。ただちに解放が与えられましたが、問題が完全に去ったわけではありませんでした。その夜、恐ろしい症状が再発しました。信仰の祈りがひどい雲の妨害を受けているようでした。家族の誰かが何か深刻な間違いを犯している、という深い印象がすぐに筆者の心に来ました。よく調べると、ついに事実そうであることがわかりました。家族の一人が重大な罪を犯して、それを隠していました。それで深く洗いざらい告白し、過ちを厳粛に神の目に正し、神の赦しを求めました。すると、一切の重荷は取り去られました。罪のないその子は瞬間的に癒され、翌朝には見違えるほど健康に活発になって、それからというもの、深刻な病気にかかっていません。

【四】　神のことばと、神のみこころと、あなた自身が神に個人的に受け入れられていることとを十分に確信したら、単純な信仰により、イエスの御名によって、**今、あなたのからだを神に委ね、神癒の約束を要求してください**。

単にお願いするのではありません。謙虚にしかし断固として要求してください。神の契約の保証として、あなたの受け継ぐ分として、買い取られた贖いの権利として、福音の中ですでに完全な形で差し出され、あとはあなたが受け取って自分のものとするのを待つばかりのものとして、要求してください。お願いと要求、また欲すること（wanting）と取ること（taking）の間には大きな違いがあります。あなたはキリストを癒し主として取ら（take）なければなりません――試みにでもなく、そのうち実現する何かとしてでもなく、今ある現実として。キリストが今この時に癒してくださると信じなければなりません。ご自分の約束のとおりに、全能の御手であなたのいのちに触れ、御力によってあなたのいのちの泉をよみがえらせてくださる、と。神が将来そうしてくださると単に信じるのではなく、神が今この時にあなたに触れ、あなたのからだに癒しの御業を始めてくださることを要求し、信じなければなりません。そして、もうそれがなされたものと受け止め、神に感謝と賛美を捧げてください。このように自分を委ね、信仰によって自分のものとする厳粛な行為のために、備えをするのは良いことです。この行動は、よく考えた上で踏み出す後戻りできない一歩であるべきで、事の性質上、繰り返すことはできません。結婚式と同じように、これは重大な取り決めを公にし、それに印を押すものです。その価値は、印を押される結びつきが本物であるかどうかにかかっています。この一歩を踏み出す前に、あらゆる疑問点をはかりにかけて、それらを永久に決着したものとみなしてください。そのあとで、これは永遠のことだという深い確信をもって、神の約束という新しい大地の上に、厳粛に、はっきりと、取り消しのきかない一歩を踏み出すのです。この行動は心に大きな力と休息を与えます。千もの疑いと誘惑に対して扉を閉めます。その瞬間から、疑いによって煩わされることは絶対的にあってはなりませんし、

後退することや古い手段に頼ることは、考えることさえ許すべきではありません。もちろん、そのような人はただちにあらゆる医療や医薬をやめるでしょう。

神が医者となってくださったのです。また、神は他の者にご自分の栄光をお与えになりません。神がすでに癒してくださいました。治療しようとするあらゆる人間的な試みは、神癒の現実に対する疑念を暗黙に含んでいます。この信仰の行動が完全に委ねきったものであればあるほど、それだけ大きな力を持ちます。このための自分の信仰に不安があるなら、そのことを特別な備えと祈りの課題としてください。この行動をなしうる特別な信仰を与えてくださるように神に求めてください。すべての恵みは神より来なければなりません。信仰も他の恵みと同様です。私たちは自分自身で何かを持っているのではなく、信仰でさえも私たちの内におられるキリストご自身の恵みにほかなりません。私たちは信仰を行使することができます。行使までが私たちの責任です。けれども、神が信仰を賜るのですから、私たちは単純にそれを受け取り、神から来るものを着るだけなのです。このことのゆえに、強い信仰を働かせることは、ごく単純で幸いなこととして私たちに開かれています。イエスは「自分自身で大きな信仰を持ちなさい」と言われたのではありませんでした。そうではなく、こう言われました。「神の信仰を持ちなさい」（マルコ一一・二二）。このほうが良いです。神の信仰はそれだけで十分であり、私たちはそれをいただき、使うことができるのです。私たちは義のために、誘惑に対する勝利のために、聖化のためにキリストを取りました。同じように私たちの信仰のためにもキリストを取ることができます。私たちの信仰はキリストご自身の信仰なのですから、信仰が神の約束の要求を間違いなく満たすという保証の中で、私たちは休らいを得てよいのです。私たちは単純にキリストの御名によって来て、キリストを私たちの完全な供え物として、嘆願として、信仰として、弁護者として、義として、あらゆるものとして捧げます。それから、ひとえにキリストのゆえに、信仰そのものを、まさしく対価なき恵みの賜物として単純に受け取るのです。このように来て神の約束を自分のものとして求めます。そうしてのちに、神のことばのとおりに、すでにかなえられたと信じるのです。

【五】 信仰によって行動してください。

「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」（ヨハネ五・八）。信仰を見せびらかすためではなく、勇敢さを誇示するためでもなく、ただあなたの信仰のゆえに、癒された者としての行動を始めてください。キリストを信頼している者としてキリストに接してください。あなた自身の力では不可能なことを、キリストの御名と御力によって試みるのです。あなたがキリストを本当に信頼し、一貫して困難に屈せずに信仰による行動をし続けるならば、キリストはあなたを見捨てません。しかし、最も大切なことですが、これを他人の信仰やことばによって行なわないように注意深くあるべきです。誰かがあなたにそう言ったからという理由で、床を取って起き上がり、なえた足を伸ばして歩くようなことがあってはなりません。それは信仰ではなく、思い上がりです。主は必ずあなたにそうするように告げてくださいます。しかし、それは主ご自身から来たものでなければなりません。ペテロのように「主よ、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください」（マタイ一四・二八）と祈らなければなりません。主が癒すおつもりなら、きっとあなたにお命じになるでしょう。けれども、この偉大で厳粛な御業においては、私たちはみな自分自身で主を知り、見出さなければならないのです。それから、信仰によって実際に踏み出したときに気をつけなければいけないのは、結果を気にしたり症状を見たり、自分がしっかり立っているかどうかを見始めたりすることです。あらゆる症状を無視して、あなたを支え、あなたをつまずかないように守ってくださる全能のお方、あなたの前におられるキリストだけを見つめなければなりません。芽が育っているだろうかと種を掘り起こす人は、まもなく芽を根元からだめにしてしまいます。真実な農家は自然を信頼し、芽が静寂のうちに育っていくに任せます。私たちも神を信頼しましょう。答えがあの種のように埋められ、失望という暗い土の中で死んでいくのを見ることさえいといません。「もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」（ヨハネ一二・二四）と知っているからです。

【六】 信仰の試練に備えてください。

どんな時でも祈ればただちに症状が消え去ると思わないでください。病気の症状のことは考えないでください。症状は単に無視して、あらゆる症状の背後に、その下にある現実を要求し続けてください。あなたが自分のものとして要求した

健康は、あなた自身の自然の力ではなく、あなたの死ぬべき肉体に現れるイエスのいのちであることを覚えてください。それゆえ、古い自然のいのちは多くの弱さに取り囲まれているかもしれませんが、その背後で、その傍らで、それを凌駕して、あなたのからだを支えるキリストの完全ないのちが存在します。「あなたがたはすでに死んだものであって、あなたがたのいのちは、キリストと共に神のうちに隠されているのである」（コロサイ三・三）、「わたしたちのいのちなるキリスト」（コロサイ三・四）。あなたがいま肉にあって生きているのは、あなたを愛し、あなたのためにご自身をささげられた神の御子の信仰によって、生きているのです。ですから、自然の力がこれからもたびたびあなたを裏切るとしても、不思議に思わないでください。神癒は自然のものではありません。恵みです。キリストです。よみがえられた主のいのちが肉体に宿るのです。神の右にのぼられた御からだの生ける力です。それは決して衰えず、それに信頼する者を決して見捨てません。**キリストこそがあなたのいのちです。**キリストの霊があなたの霊のためにあったように、キリストの肉体もあなたの肉体のためでした。それゆえ、試練があっても不思議に思わないでください。試練が来るのはあなたにキリストが必要であることを示すため、キリストに立ち返らせるためです。このことを知り、私たちの弱さの中でキリストの強さにより頼み、瞬間瞬間をそれによって生きることが、完全な癒しです。さらにまた、試練はいつでも信仰を試し、信仰が本物である度合いに応じてそれを強めます。信仰は本物であることが示されなければなりません。それによって神は、全宇宙の前で、その信仰に報いることの正しさを示すことができるのです。こうして神は、ますます大きな要求を課し、ますます大きな恵みを所有し行使させることで、私たちの信仰を増し加えてくださいます。「わしがその巣のひなを呼び起し」（申命記三二・一一）、空中に突き放してその小さな翼を広げさせ、飛ぶ訓練をするように、神はしばしば私たち自身の支えや自信を取り払って、信仰の腕や翼を伸ばすように訓練なさいます。イサクの燔祭がなければ、アブラハムは復活の信仰を持つことはありえなかったでしょう。しかし、症状がどうであれ、あらゆる症状の背後で、神が偉大な回復の御業を行っておられることをかたく信じ続けなければなりません。「だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく」（第二コリント四・一六）。

【七】 あなたの新しい力と健康を神のために用いてください。

主なる方のみこころに従うように気をつけてください。このキリストから与えられた力は非常に神聖なものです。私たちの内におられるキリストの復活のいのちです。キリストご自身が用いられるのと同じように用いなければなりません。罪と利己のために浪費されてはなりません。「生きた供え物」（ローマ一二・一）として神に捧げてください。世に捧げるなら、その力は失われ、そのたびに罪が肉体の懲らしめをもたらします。通常は、私たちはたましいが恵まれているのと同じく、すべてのことに恵まれ、すこやかでいることを期待してもよいのです。健康を自分自身のために用いるのは十分ではありません。他の人々にその証をしなければなりません。世に向けて語らなければなりません。恐れることなく、十全な贖いの福音の忠実な証人にならなければなりません。証は、尊大にあざ笑う人々を前にしてという最も困難な状況で行わざるを得ないことがしばしばあります。しかし、神のみ旨が皆あますところなく伝えられるべきことを、主は命じられ、教会は必要としています。そして、世はこの神癒の福音を必要としています。異教徒の国々は、キリスト教の証拠としてこれを必要としています。不信仰は、その物質主義に対する答えとしてこれを必要としています。海外宣教の偉大な働きは、異教徒の間で福音を伝える糸口としてこれを必要としています。次の偉大な宣教運動はこの力強い真理を取り入れるでしょうし、取り入れなければなりません。この真理は福音を広める働きにとって、これまで医療宣教の働きが果たしてきたよりも、はかりしれないほど大きなものとなるでしょう。これは自分たちのためだけに持っていてよい信仰ではありません。神から託された、偉大で厳粛なものです。これを受け取った私たちは一つになって、神の栄光のため、真理の証しのため、福音を広めるために、これを用いなければなりません。キリスト教の初期にペンテコステの異言が用いられたのと同じようにです。私たちが目の当たりにしている神の御力のこの素晴らしい顕現は、終わりの日の重要なるしです。それは再臨の前ぶれです。キリストが地上におられた時に顕著に癒しが見られたように、再臨に際しても癒しが多く起こります。神癒のしるしは私たち

に、厳かな熱心さをもって再臨に備えよと命じています。私たちの目はもはや墓を見るのではなく開きつつある天を見上げ、心は復活のいのちの兆しをすでに感じ取っています。他の誰にもできないほどに目を覚まして待ち、働くことが、私たちに与えられた分です。時が良くても悪くても、思い煩って自分をいたわるのではなく、神の偉大な御力のうちに働き、次のみことばが真実であることを確認するのです。「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを保って永遠の命に至るであろう」（マルコ八・三五、ヨハネ一二・二五）。ですから、福音と神の恵みとの偉大なこの賜物を、自分のものとして求め、保ち、聖別しようではありませんか。今こそ、「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さるように。また、あなたがたの霊と心とからだとを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのない者にして下さるように。あなたがたを召されたかたは真実であられるから、このことをして下さるであろう」（第一テサロニケ五・二三～二四）。

第三章　よくある反論

さて、すべての不義をゆるしてくださった神が同じ真実と完全をもってすべての病をもいやしてくださるという喜ばしい知らせに対して、反論もあります。その中でとりわけ説得力のある反論に答えましょう。

【一】　奇跡の時代は過ぎ去った。

これは広く公理として仮定されていますし、あまつさえ聖書本文の引用のごとく扱われています。これに答えて、では私たちはどの時代にいるのか、と問いましょう。歴史は過去から未来までいくつかの時代と経綸（Dispensations）に分けられます。すなわち、エデンの園の時代、洪水前までの時代、家父長制の時代、モーセの律法の時代、クリスチャンの時代、千年王国時代、永遠の時代です。現在は家父長制の時代でもモーセの時代でもありませんし、千年王国の時代でもありませんから、クリスチャンの時代で間違いありません。ですが、クリスチャンの時代がさらに二つか三つに分けられるとお考えかもしれません。キリストと使徒の時代と、私たちの時代というふうに。けれどもパウロは、「この終りの時」に生きていると言いました。彼は当代の人々を「世の終りに臨んでいるわたしたち」（第一コリント一〇・一一）と言いました。また、ペテロはペンテコステの日の説教で、この時代をヨエルの預言した終わりの日であると力強く言いました。そのため現在が間違いなくキリストとキリスト教の時代なのですから、奇跡の時代でないとしたら、いったい何でしょうか。あるいはこの時代の始まりと終わりとでは大きな相違があるかもしれません。神の御力が特別に顕現するのは初期だけで、徐々に落ち着いて平凡な日常へと戻っていくかもしれません。そうだとすると、「終りの時」に聖霊がめざましく注がれるのはどうしてなのでしょうか。御霊の賜物がしもべにもはしためにも与えられ、天にも地にも超自然的なしるしと不思議が現れることが、とりわけ「主の大いなる恐るべき日が来る前に」、つまりクリスチャンの時代の終局に、再臨の前にある、とヨエルが預言したのはどうしてなのでしょうか。また、パウロが、キリストの教会は一つの身体であって二つではない、それぞれの部分の賜物は全体に属しているのだ、と強く主張したのはどうしてなのでしょうか（第一コリント一二章）。使徒の時代と後世の時代に本質的な違いがあるとすると、教会は一つの身体ではなく二つの身体になります。そうであるとすると、一方の身体に属する人々の賜物は他方の身体に属する私たちには流れません。そうであるとすると、あの章の栄光に富んだ描写と力強い論証は偽りであり、空想にすぎません。私たちが同じ身体であるなら、同じいのちと同じ力を持っています。使徒たちを平凡な人よりも力ある者としたものは何だったのでしょうか。イエスと行動を共にしたことではなく、聖霊の賜物でした。私たちも同じ賜物を受けているのではないでしょうか。使徒の力が例外的で一時的なものだと言うのは、人を高く上げて、その力を与え給うた御霊をおとしめることにならないでしょうか。確かに使徒には、キリストの復活の証人として、また地上の教会を組織する者として、固有で例外的な役割がありました。けれども、教会の奇跡的な賜物は使徒に限定されたものではありません。そのことを示すように、特に第一コリント十二章では奇跡的な賜物が使徒性からはっきり区別されています。奇跡的な賜物は、ステファノにも、ピリポにも、また他の使徒でない者たちにも際立って豊かに与えられました。またヤコブは、それを教会の通常の、恒久的な長老職に託しました。

親愛なる主には、使徒以後の時代に区別をもうけて、力を失った不能の時代にしようという計らいも意図もありませんでした。人の不信仰と罪がそうならせたのです。教会自身の腐敗がそれを招いたのです。主がそれを願われたり、そう備えられたりしたのではありません。主は、天地の真ん中に立って、最初の世紀に注がれたのと同じ優しい慈愛と、満ち満ちた力ある恵みをもって十九世紀を見下ろしながら、現在形で、決して私たちから離れることのない主に私たちがみな等しく近い者であるかのように、こう仰せられます。「わたしは、**天においても地においても**、いっさいの力を授けられた。見よ、わたしは**時代の終り**まで、**いつ**

もあなたがたと共に**ある**」（ギリシャ語からの訳）。二つの時代ではなく、ただ一つの時代です。主のいっさいの力が取り去られたことはありません。主は永遠に「ある」方であり、時代の終わりにあっても、時代の始めと同じように近しくあってくださいます。事実、私たちがなすべき働きは、主ご自身の働きを補うものにすぎず、それどころか主ご自身のみわざにほかなりません。ルカが「イエスが行い、また教えはじめ」たと書いたとおりです（使徒一・一）。それゆえ主はそのみわざを今も完成へと向かわせておられます。また、主ご自身が私たちの働きについて語られたのは、まさに次のことです。「わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう（すなわち、そのわざはキリストのみわざであると同時に私たちのわざでもある協働です）」（ヨハネ一四・一二）。主が見たところ不在であっても、そのわざが少しでも減ることはありません。「そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである」。また、実際、古代の教会が初代の信仰と聖さを、たとえ限られた程度であっても保っていた間は、同じわざが一様に見られました。二世紀から四世紀にかけて、エイレナイオスやテルトゥリアヌスのような著名な教父も、疑う余地のない多くの癒しの奇跡が広く起きていたことを証言し、イエスの御名によって死人がよみがえったことさえも証しています。五世紀に至っても、当時生きていた多くのよく知られた男女に起きた超自然的な出来事が、プロコピウスやユスティニアヌスほどの権威ある人々によって証言されています。その証拠は非常に強力であるため、モスハイムの教会史の実直な編者は、それを疑う者は歴史上のあらゆる事実を疑わざるをえないと断言しています。

奇跡の時代は過去の遺物ではありません。神のことばはそのようなことをほのめかしてさえいません。反対に、奇跡は終わりの日のしるしの一つであると述べています。敵そのものさえ奇跡を偽造し、ついには、しるしを行う悪霊の霊を全世界の王たちのところに送り込みます（黙示録一六・一四）。ですから、偽りの奇跡に対する唯一の対抗策は、本物の奇跡です。私たちが生きているのは、奇跡の時代、キリストの時代、キリストの二度の降臨の間にある時代、絶えざる神の臨在の時代、力の時代、他のどの時代にもまさって力強く生き生きとしているべき時代です。

【二】 スピリチュアリズム、動物磁気、透視などの実践によっても神癒の信仰と同じ結果が得られると言われている。

スピリチュアリズムの現象のいくつかは明らかな詐欺である一方で、科学で説明しようのない力によって生じた疑いなく超自然的な現象が多く存在することも否めません。ジョセフ・クックが言ったように、「スピリチュアリズム」は、イギリスとアメリカの近い将来を左右する大きな「もしも」となるかもしれません。この恐るべき怪物に、事実を性急に浅はかに否定したり、手品のたぐいだと説明したりして立ち向かおうとしても無駄です。スピリチュアリズムで起きる現象は、しばしば疑いようなく人間の力を超えた現実そのものです。それはハルマゲドンのために人々を集める「しるしを行う悪霊の霊」です。彼らはエジプトの魔術師やギリシャの神託、ローマの腸ト師、インドのまじない師の力の再来です。神から来たものではありませんし、全能でもないものの、人間を超えた力を持っています。私たちの主はそれについてはっきりと警告し、その力ではなく、その結ぶ実、聖さ、謙遜、イエスの御名と神のことばに従うかどうかによって判別しなさいと命じておられます。それらが存在するからこそ、私たちは霊的な世界だけでなく物理的な世界においても、聖なるキリスト教の生ける力をそれらに対抗して示せなければなりません。その必要はますます切実になっているのです――モーセの杖が魔術師の杖を飲み込み、彼らの卑小な力を黙らせたように。

【三】 キリストと使徒の奇跡はキリスト教の事実と教理を確立するために計画されたものであるため、継続して起こる必要はない。

それならどうして、福音書に書かれた事実の存在やその信頼性に疑問を投げかける批判が起こるのでしょうか。新しく宣教された国の人々は、どのようにしてこれらのみことばが神からのものであると知るのでしょうか。彼らが、いや世界中の大多数の人々が、学問の記録や聖書の写本に触れる手だてがあるでしょうか。いいえ、あらゆる世代の人々が生けるキリストを必要としており、あらゆる新しい共同体が、みことばを確かなものとする「伴うしるし」（マルコ一六・二〇）を必要としています。また、理性を振り回して引き下がらない不可知論者が、どんなに言葉を尽くして説得しても動じないのに、腰の低い読み書きもできないひとりの女性と出会い、私は長年寝たきりでしたがイエスのことばと御名だ

けによって起き上がりましたと飾り気なく正面から言われたときに、深く感動し、うろたえて黙り込むといったことを私たちはときどき経験してきました。主が再び来られるときまで、世界は主の御力と臨在に触れていただくことを必要としています。それが不要になることはありません。「さらに神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、また、御旨に従い聖霊を各自に賜うことによって、あかしをされたのである」（ヘブル二・四）。また、キリストが行われた数々の奇跡の目的について、その美しさと価値とを半減させるような誤解がはびこっています。奇跡は、キリストの御力と神性とを特別に証するためだけのものであると理解されています。しかし、もしそれがすべてであったなら、ほんの数回の顕著なしるしが起きれば十分であるはずです。キリストは日々押しかけてくる数千の群衆をお癒しにならなくてもよかったでしょう。けれども、私たちが伝えられているのは反対に、奇跡が起きたのは一回きりとか時たまとかではなく、非常に多く、ほとんどいつでもどこででも起きたということです。「キリストは治療を要する人たちをいやし、病人をことごとくおいやしになった」。それは御力を証明するためというよりも、そのとき人々に知ってほしいと願っておられたこと、すなわち限りない愛を示すためであり、昔の預言者が描いた恵み深いキリストの姿を成就するためでした。預言者イザヤによって「彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた」と言われた言葉が成就するためです。しかし、もし福音書の時代にキリストがその姿を成就する必要があったなら、今も同じように必要です。神が描き、キリストもご自身について描かれたその姿に、主が忠実であり続けることは、今も同じく必要なのです。もしこれが今の私たちにとって真実でないなら、「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない」のでは**ありません**。もしこれが今の私たちにとって真実でないなら、おそらく、聖書の他の約束も、私たちに真実ではありません。キリストは私たちの病と苦しみを背負わなかったのと同じく、私たちの罪も負ってくださらなかったことになります。いいえ、そうではありません。

「キリストの心は今も同じです。親族、友、兄。それが彼の永遠の名。あなたは私にとってすべてのすべてです。ベタニヤの生けるお方。」

【四】 マルコの福音書にあるキリストの最後の約束は、癒しのみならず他の事柄も含んでいる。一つを取り上げるなら、他のすべても取り上げなければならない。

もし病気の癒しを期待するなら、異言の賜物も毒を克服する力も期待しなくてはならないし、もし異言の賜物がやんでしまったのなら、病気を癒す力もやんだのだ、というわけです。私たちはこの厳格な論理を喜んで受け入れます。いくつもある約束の一つでも諦めることはできません。私たちは、ペンテコステの日の教会に与えられたあらゆる霊的賜物のうちに、癒し主が臨在しておられると信じています。キリストのへりくだったしもべが、主のみわざに従事しながら、単純な信仰をもってマラリアやその他の毒や危険に対抗する力を求めてはならないという道理はありません。異言の賜物が初期の教会から取り去られたのは、虚栄の誇示のために乱用されたから、あるいは福音が急速に世界に広がったことで実際上の必要がなくなったからにすぎない、と私たちは信じています。とはいえ教会が福音を全世界に広げるために必要であるとしてへりくだって求めるなら、異言の賜物もすぐさま再興するでしょう。実際、インドやアフリカでの宣教の働きにおいて、異言の賜物が回復したと思われる例が今もないわけではありません。

【五】 病気の中で神のみこころに従うことによって神の栄光が現され、聖なる苦しみを味わうことで結果的に幸福に至る。

これが最も有力な反論かもしれません。さて、もしこの実践を勧める人が、自分が病気になったときにそれを本当に受け入れ、病気をそのままにしておくならば、少なくとも一貫性はあります。しかし実際には、そういう人も医者を呼び、この素晴らしい神のみこころから抜け出そうと最善を尽くすのではないでしょうか。それが苦しみにおとなしく従うことでしょうか。その従順は普通、結果が避けられないとわかったときに生じるものではないでしょうか。痛ましい病気の中で、魂が罪の道から立ち返らされ、神と深く出会う体験へと導かれて、結果的に幸福になる場合があることを否定してはいません。また、癒しの点で神を信頼できない多くの病弱な人々は熱心な敬虔さが足りないとか、霊的な成長がないとか疑っているのでもありません。そうではなく、クリスチャンが受ける訓練（懲らしめ）の原理に関して、非常に多くの曖昧で非聖書的な誤解が確かにある、と申

し上げています。神はただ善を伸ばす目的のために従順な子供を懲らしめる、と私たちは信じていません。「あなたがたの中に、弱い者や病人が大ぜいおり、また眠った者も少なくないのは、そのためである。しかし、自分をさばくならば、わたしたちはさばかれることはないであろう」（第一コリント一一・三〇～三一）。ここに神がその愛する子供たちを取り扱う明確な不変の法則があります。私たちが自分を裁くなら、私たちは裁かれません。私たちが聞き従うなら、「わたしは、かつてエジプトびとに下した病を一つもあなたに下さないであろう」（出エジプト一五・二六）。神が忠実な子供たちのために定めた通常の状態は、からだ、魂、霊が健やかであることです（第一テサロニケ五・二三）。神ご自身が子供たちのために祈るのは、たましいが恵まれていると同じく、すべてのことに恵まれ、すこやかであるように、です。神が子供たちに願うのは、神のことばのとおりに生きることです。神のみこころはつねに「神の善による良き喜び」（第二テサロニケ一・一一、KJVより）であり、「善であって、神に喜ばれ、かつ全き」神の御旨です（ローマ一二・二）。「正しい者には悩みが多い」のは真実です。しかしまた「主はすべてその中から彼を助け出される。主は彼の骨をことごとく守られる。その一つだに折られることはない」（詩篇三四・一九～二〇）もまた真実です。そして「悩み・苦しみ」と病気の間には、明白な区別があることをよく覚えておかなければなりません。マラにて、イスラエルの子らが苦い水を飲まなければなりませんでしたが、水は除去されたのではなく甘くされたのでした。同じように、試練はきよめられ祝福へと変えられるものです。他方で、まさに同じ場所で、神は癒しのための定めとおきてを作りました。もし彼らが神に従うなら、病気にかからず、神が常に癒し主となってくださる、と。この事実は、マラでの苦い水は病気とは異なっていたことを示しています。また、これとちょうど対応するように、ヤコブは手紙の中で「あなたがたの中に、苦しんでいる者があるか。その人は、祈るがよい」（ヤコブ五・一三）、つまり恵みを受けて強くなりなさい、と命じていますが、他方で「あなたがたの中に、病んでいる者があるか。その人は、教会の長老たちを招くがよい」（ヤコブ五・一四）、癒されなさいと命じています。苦しみは、「キリストと苦難を共にする」ことです。キリストは病気ではありませんでした。「あなたがたは、この世ではなやみがある」（ヨハネ一六・三三）が、それゆえなおのこと、私たちにはなやみに耐え、打ち勝つために、健やかで強い心が必要です。

【六】 病気の癒しを絶対的に求めるのは傲慢である。

真の祈りの模範はキリストがゲッセマネの園で祈ったことばである、と。「もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」（マタイ二六・三九）。そのとおりです。しかし、反論者は見落としています。キリストはこの杯が過ぎ去ることは不可能だと知っていました。またこのときキリストが願われたものは、控えめに言って、約束も保証もない事柄でしたから、すぐにこう撤回したのです。「父よ、この時からわたしをお救い下さい。しかし、わたしはこのために、この時に至ったのです。父よ、み名があがめられますように」（ヨハネ一二・二七～二八）。確かに、ある状況のもとで、極度の困窮にあって、明確な保証も約束もなく、神のみこころがそれをよしとしているという示唆もない事柄を願い求めるときには、私たちはつねに、その事柄を、まだ知らされていないみこころの裁定にゆだねるべきです。けれども、ある祝福が神のみこころに合致していて、備えられ、買い取られ、約束されていることを神ご自身のことばから知っているとき、疑いながら神のもとに近づいて、不明瞭な言葉で願いを口にするのは、実のところ言い逃れであり、率直さを欠いた不誠実なふるまいであり、見せかけにすぎないのではないでしょうか。たとえば学寮にいる息子がいるとして、あなたが最初の手紙に詳細な指示を出したにもかかわらず、そこに書いてあることについて許可を求める手紙を息子が重ねて送ってきたとしたら、いかがでしょうか。それと同じではないでしょうか。キリストは、神のみこころに合致していることが既知であるような事柄を求めて祈ったでしょうか。キリストのひとつの祈りを見習うのが正しいのなら、別の祈りを見習うことも同様に正しいのではないでしょうか。ゲッセマネの祈りを見習うように、ベタニヤでの祈りを見習うことも。ベタニヤで主は何と言われたのでしょうか。「父よ、あなたがいつでもわたしの願いを聞きいれて下さることを、よく知っています」（ヨハネ一一・四一～四二）。「父よ、わたしは、あなたがわたしに賜わった人々が、わたしのいる所に一緒にいることを望みます」（ヨハネ一七・二四）。神のみこころ

が明白に知られている事柄に関しては、私たちもキリストの御名によって、キリストと同じように祈ってよいのではないでしょうか。「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも**望むもの**を求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」（ヨハネ一五・七）。赦しを願い求めるときに、不明瞭な祈りをするでしょうか。私たちは単純に赦しを受け取り、自分のものとし、信仰によって強められ、そうすることによって最も効果的に栄光を神に帰するのです。

【七】 多くの場合、癒しは失敗しているではないか。

パウロとその連れが最初の例です。パウロのお決まりの**とげ**は、疑うクリスチャンを苦しめるための貴重な遺物として大切に保存されています。トロピモ（第二テモテ四・二〇）とエパフロデト（ピリピ二・二五～二七）は、疑念の城という病院で自ら進んで病人でいようとする人たちを励ますために、病床に寝かされたまま引っぱり出されています。パウロのとげに関して私たちが言わなければならないのは、第一に、それが病気であるかどうかは極めて不確かだという点です。パウロを打っているのはサタンの使いと言われています。つまり、何か屈辱的なこと、たとえばどもりかもしれません。第二に、とげが何であるにせよ、それは癒されたばかりか、癒し以上のものとなりました。とげによってキリストの御力が力強く彼の上に宿り、彼はあらゆる働きと務めを豊かに果たせるようになり、祝福を呼び起こすそのようなきっかけをさらに望むほどになったのです。そして、この描写の中に弱り果てた病人が働きもできずに臥せっている姿を見る人は、霊的な斜視を患っています。第三に、病気が、パウロに与えられたように高慢にならないよう与えられた天の恵みであると主張する人々は、その前にパウロと同じように第三の天に引き上げられて人間が語ってはならない言葉を聞くという体験が必要なのではないでしょうか！第四に、パウロは他の箇所で癒しの体験を証言しています（第二コリント一・一〇）。これは誤解の余地なく、死人をよみがえらせてくださる神を信じる力強い信仰と祈りによるものです。

エパフロデトについては、彼は神のあわれみによって癒されました。トロピモも時間がかかったにせよ、疑いなく癒されました。信仰による癒しがいつも瞬間的に起こるとは限りません。癒しには「力あるわざ」と「いやしの賜物」があります。「力あるわざ」は瞬間的で並外れており、「いやしの賜物」は単純で徐々に起こることもありえます。病気であったことや信仰が遅かったなどトロピモに責むべき点があったことは驚きに値しません。最も驚くべきは、聖書に記載されている個人的エピソードの中でこのようなケースがたった二つだけであるという点です。

癒しの失敗は現在でも存在しますが、説明可能です。知識が欠けていたり、信仰がなかったり、ある点で神に従っていなかったり、みことばや御霊の教えに継続して従うことができていなかったり、あるいはより深い霊的修練のためかもしれません。霊的生活にも同じ（あるいは似たような）理由から失敗は存在します。それはいかなる意味でも神の約束の現実性やキリストの恵みの完全性に対する反証になりえません。「あらゆる人を偽り者としても、神を真実なものとすべきである」（ローマ三・四）。

【八】 もし神癒が正しいとしたら、人は死ななくなるはずではないか。

そうでしょうか。どうしてみことば以上のことを信じなければならないのでしょうか。みことばを超えるものはすべて僭越です。みことばは人間のいのちに限界を定めました。聖書的な信仰が主張しうるのは、その正当な限界の範囲内で私たちが生き、働くために十分な健康と強さを得られるということです。生涯は長いかもしれませんし、短いかもしれませんが、悪者の人生とは違って、私たちはおのが日の半ばも生きながらえずに絶える必要はありません。それは完全で、満足のいくものであるはずで、人生の働きが完了しないうちに途絶えるようなものではありません。生涯の終わりが来るときに、六月に病気のりんごが腐っておちるように、あるいは根が虫に食われて枯れるように、病気にかかって失意と痛みの中で死んでいく必要がどうしてあるのでしょうか。九月になってりんごが成熟し、甘くなり、無事に収穫者の手に落ちる準備が整ってから落ちるように、人生の終わりもそうなってはいけないのでしょうか。ヨブ記は正しい人の生涯の終わりを、こうたとえています。「あたかも麦束をその季節になって打ち場に運びあげるように」（ヨブ五・二六）。

【九】 神はこれらの手段（医薬）をすべてお造りになったのであり、私たちがそれを用いることを望んでおられるのではないか。また実際、私たちが自分で

できることをすべて行ったあとでなければ、神に何かしていただくのを期待するのは厚かましいのではないか。

私たちの答えはこうです。第一に、神は医学的治療をどこにも正式に定めておられないので、医薬が神の通常の治療法であると推測する権利を私たちは持っていません。医薬は、食物のように、必要なものとして、あるいは用いるよう命じられたものとして繰り返し言及されてはいません。反論の余地のない顕著な事実は、族長たちの歴史全体を通して、そのような手段を用いたという言及が一度もないという点です。ヨブの物語では微に入り細に入りさまざまな描写がされていますが、登場人物の中で医者だけが出てきませんし、被造物の中で医薬だけが出てきません。医者は付き添っていません。もしいたなら、あの部屋で必ずその姿がちらりと見えたはずです。ヨブが治ったのは完全に神の直接の御手によるものでした。ヨブ自身が神にへりくだり人を愛する本来の位置へと立ち戻ったときに神が癒したのでした。レビ記には人間生活のすみずみに渡った詳細な指示、禁止、おきてが記されていますが、らい病を含めあらゆる病気について、医者や薬局への言及はわずかにもありません。

聖書の中で最初に見つけられる明確な医療行為は、ソロモンの後の時代、疑いなくエジプトの神なき文化と科学が持ち込まれた後まで待たなければなりません。しかもその患者は死にました。不信仰と神からの離反という汚名を負って死んだのです（第二歴代一六・一二）。新約聖書でも、医療行為はほとんど褒められていません。キリストの衣のすそに触れた女性の箇所では、非難がましく言及されています。ルカが医者だったとすると、彼の巡回生活から推察するに、福音の働きのために医者を辞めたに違いありません。腰をすえて治療行為にあたれないからです。これ以上論じなくても、少なくとも以下の点は明らかです。第一に、神が医薬を命じられたことはありません。第二に、神が命じられたのは別の方法です。イエスの御名によって、贖いの中でそれが差し出されています。神はそれを覚えるようおきてを定め、また実際に行うよう命じておられます。第三に、恵みによるあらゆる備えは行いではなく信仰によります。医療行為は、たとえうまくいっても、たいてい人に栄光を与えるものです。神はそのようなことをなさいません。もし病気の癒しがキリストの贖いによって買い取られたものの一つであり、私たちの贖い主としてのキリストの特権の一つであるなら、主はそれをねたむほどに守られます。私たちもまたそうします。神癒が救いの計画の一部であるなら、その計画全体が「信仰の法則」（ローマ三・二七）に従って組み立てられていることを私たちは知っています。ヤコブのことばの中で神癒が命令されているのなら、人間的な医療行為とは相容れません。一人の医者を雇ったなら、同じ病気について同時に他の医療行為を受けるべきでないのと同じです。癒しに関して神の方法があるなら、他の方法は人間の方法であらざるをえず、後者のために前者を故意に否認することは危険です。医療行為が罪だとか、それがつねに間違っていると申しあげているのではありません。

信仰が働いていない場合は、今もこれからも数えきれないほどあるでしょう。自然の方法にも限られた価値があるなら――実際にありますが――そうした場合には、それを用いる余地が十分にあります。けれども、神に信頼し従う神の子供たちのためには、神のことばが明確に定めておられる遥かに素晴らしい方法があります。それによって神の御名がさらに高められ、私たちの霊的生活は新たにされ続けます。現代は不信仰な合理主義が勢力を持っているため、直接的な超自然的働きのあらゆる痕跡を宇宙から締め出そうと不断の努力を行っていて、あらゆるものを第二原因である自然現象として説明しようとしています。神は、まさにこの理由のために、私たちの信仰が神に機会を与える場所ならどこであっても、直接の働きを示したいと願っておられるのです。高等批評の勤勉な働きが聖書から奇跡を取り上げています。低められた規準のクリスチャン生活が、神から来るものをことごとく私たちの生活から取り上げています。生ける神を信じる人はみな、あざける世代に対して、「主はとこしえの神、地の果の創造者であって、弱ることなく、また疲れることなく」（イザヤ四〇・二八）みわざを行なわれていることを勇んで証明しようではありませんか。「われわれは神のうちに生き、動き、存在している」（使徒一七・二八）のですから、神には今もなお「できないことは、ひとつもありません」（エレミヤ三二・一七）。

【十】 神癒の思想は肉のいのちを不当に高く上げ、不死の魂に対する関心を失わせ、狂信的な信仰に陥らせ、さらには人を悪へと導くのではないか。

最後にこの反論にだけ触れておきます。同じ反論は、主の地上でのお働きの初めの数年間にも向けられたかもしれません。そのころ、からだの癒しは人々の魂に到達する手段として、またキリストの霊的な教えの証として用いられました。キリストの癒しの御力の教理は、聖性の必要性と霊的生活の真理と敬虔の深化に密接に結びついています。きよさと熱心さを著しく求めさせます。からだを癒す力は一般的に、ますます豊かな聖霊のバプテスマを心に授けます。この神のいのちと健康を保ち続けるには、絶えず神との親しい交わりを持ち、主にきよい奉仕を捧げることが要求されます。そのため、霊的な実りは一時的な実りをはるかに上回ります。それは、神癒を真にいただいた者の人生において、最も力強い歯止めであり原動力の一つです。癒しの乱用は一般に、無分別あるいは野心的な人が不敬虔な目的のために広げる、偽りの教えと非聖書的なこじつけに見出されます。主イエス・キリストによる真実な神癒の教えは、最も謙遜で、聖く、実践的です。人間を高く上げず、罪を助長せず、不従順な者には約束を与えず、世的な目的や放縦を奨励せず、イエスの御名を高め、神に栄光を捧げ、魂に信仰と力を吹き込み、自己否定と聖なる奉仕の生涯へと奮い立たせ、生ける神と再臨する主の厳粛なしるしによってまどろんでいる教会と不信仰の世界を目覚めさせます。逸脱、こじつけ、偽装が存在することを私たちは知っています。権威なく癒しの賜物を自称する者、自分をさも偉い者のように言いふらす報酬目当ての詐欺師、無知と無分別で真理に泥を塗るだけの人々による軽率で見境ない油注ぎ、透視の手かざしやスピリチュアリズムの術や動物磁気の実演のためにイエスの御名を求める羊の皮をかぶった狼どもが存在します。しかし、神の真理は人間の誤謬のそしりを受けません。偽物はしばしば本物に対する最高の証人となります。主イエスの奉仕者は、これらの悪に対して、聖霊の御力において、自分たちに与えられた賜物と職務を求め、実行することによって答えようではありませんか。神の人々は、この危急の時にあって、「義人と悪人、神に仕える者と、仕えない者」（マラキ三・一八）を見分けようではありませんか。

第四章　神癒の諸原理

癒しに関する聖書のすべての教えの根底には、いくつかの原理があります。よく理解し、整理することが大切です。正しく理解するなら、知性的な信仰のために非常に有益です。

【一】　病気と苦しみの**原因**は、はっきりと人間の堕落と罪の状態にさかのぼることができます。

もしも病気が自然の構成物の一部であるなら、私たちは自然の観点に立って、自然の方法に従って病気を扱うのがよいでしょう。けれども、もしも病気が罪による呪いの一部であるなら、贖いの中に本当の治療法があるに違いありません。病気が堕落の結果であり、罪の実の一つであることを疑う人はいません。私たちに伝えられているのは、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだということです。そして大は小を含みます。申命記にある、神がイスラエルの罪のために送るとされる数々の呪いの中で、病気はその一つに数えられています。また、病気はサタン自身の働きと明確に結びついています。サタンはヨブの苦しみに直接の原因を作った者です。また私たちの主は、ご自身の時代の病気を明らかにサタンの直接的な力に帰しています。病気の女性を十八年間も縛っていたのはサタンでした。主が解放した者たちの魂と肉体をつかんで押しつぶしていたのは、悪魔の影響でした。病気が悪しき霊の働きの結果であるとすれば、自然の治療ではなく、より高い霊的な力によって対抗し、処置しなければならないことは明らかです。さらにまた、病気を神の訓練やこらしめと仮定した場合にも、病気が取り除かれるのは医療機械によるのではなく、霊的な原因によるはずだということは、なおいっそう明らかです。御父の手にあるこらしめの杖を物理的な力や技術を駆使して人間の腕でもぎ取れると考えるのは、愚かでむなしいことです。神のこらしめを避ける唯一の方法は、悔いた魂を神のみこころの前に差し出し、へりくだりと信仰をもって神の赦しと苦しみからの解放を求めることです。

どちらの観点から病気を捉えても、病気の治療はただ神の中にのみ、ただ神の贖いの福音の中にのみ見出されなければならないのはますます明らかになります。

【二】　病気が堕落の結果であるなら、贖いの中に含まれていることを期待してよいし、福音に先立つ**準備的な経綸**の中に病気の癒しの暗示を求めることは自然です。

私たちは失望させられません。神の配慮と摂理が神の民の霊的必要とともにこの世での肉体的必要をも含んでいるという偉大な原理は、旧約全体を貫いています。モーセのすべての定めの中に、神癒のための明確な備えがあります。来たるべき解放者を描く預言は、栄光の王や恵みの救い主であるとともに、偉大な医者でもある姿を描いています。アビメレク、ミリアム、ヨブ、ナアマン、ヒゼキヤの癒し、らい病と青銅の蛇、マラでのおきて、ゲリジム山の祝福とエバル山ののろい、アサ王に対するきびしい叱責、詩篇百三篇、イザヤ書五十三章、それらが肉体の贖いが神の大権でありご計画であるという旧約聖書の証言を明白で明確にしています。

【三】　イエス・キリストご自身の働きは、これらの原理が展開していく次の重要な段階です。

キリストご自身の生涯は、キリスト教の完全な要約です。キリストのことばとみわざから、贖いの壮大な目的を確かに読み取ることができます。キリストのご生涯は肉体的な癒しに関してどんな証言をしているのでしょうか。キリストは町々を巡り歩いて、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをお癒しになりました。治療を要する人たちをみなお癒しになりました。それは、預言者イザヤによって「彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた」と言われた言葉が成就するためでした。さあ、思い出しましょう。このことはたまさか起きたのではなく、キリストの主要な働きでした。キリストはその働きを癒しで始め、地上の生涯の終わりまで継続なさいました。キリストは可能なかぎり

あらゆる機会をとらえ、さまざまな状況にあって癒しを行われました。真心から、ご自身の意志で、それがみこころであることに疑問の余地も残さずに。キリストは疑っているらい病人に「そうしてあげよう」とはっきり仰せられました。キリストが嘆いたのは、人々が彼に全幅の信頼を寄せなかったときだけでした。癒しのみわざにおいて、キリストはただ、偉大な贖いの本当の目的を繰り広げ、ご自身の変わらない愛とご人格を明らかにしておられたのです。キリストは、ご自身が今もなお「きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない」ことを明確に保証してくださいました。それを認識するとき、私たちは信仰の拠って立つ偉大な原理を得るのです。これは「とこしえの岩」（イザヤ二六・四）のように安全です。

【四】　贖いの中心は**イエス・キリストの十字架**です。神癒の根本的な原理もそこに求めるべきです。

神癒は主イエス・キリストの贖いの供え物に根拠があります。次のことは私たちが述べた第一の原理から必然的に導かれます。病気が堕落の結果であるなら、キリストの贖いに含まれている、ということです。贖いは「のろいのあるところ、どこまでも」及ぶのですから。しかしまた、すでに見たように、イザヤ書五十三章で最も明確に述べられていることですが、キリストは私たちの病を負い、私たちの痛みをになったと言われています。「負う」という単語は罪の贖いのために使われる単語と同じです。この単語は、贖罪のやぎが人々のもろもろの悪を負って去る箇所で使われ、またイザヤ書の同じ章で「多くの人の罪を負い」という節でも使われています。ですから、彼が私たちの罪を負ったのと同じ意味で、私たちの病気をも負ってくださったのです。ペテロもこう述べています。「十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。……その傷によって、あなたがたは、いやされたのである」（第一ペテロ二・二四）。罪のために私たちの肉体が負うべきものを、キリストはすべてご自身のからだに負ってくださいました。それで、私たちの肉体は自由になりました。キリストが受けたあのむごい一つの「傷」が――原語は単数形です――苦しんでいる世界のすべての痛みをその中に集約しています。キリストが完全に負ってくださったものについて、私たちはもう苦しむ必要がありません。神癒は素晴らしい贖いに含まれている権利となりました。ですから、私たちは十字架の血で買い取られた相続分として、神癒を単純に求めます。

【五】　けれども、十字架よりもさらに高いものがあります。私たちの主の**復活**です。

神癒の福音は、復活において深甚ないのちの源泉を見出します。キリストの死は病気の根である罪を滅ぼしますが、贖われた私たちの肉体に健康といのちの供給源を植えるのはキリストのいのちです。キリストのからだは、私たちのあらゆる生命力の生ける源泉です。キリストはヨセフの墓から出てこられ、復活の新しい肉体的いのちをもって、生と不死のために神の民のかしらとなられました。キリストが朽ちることのないいのちの力を受けたのは、ご自身のためだけではなく、私たちのいのちとなるためでした。神は、キリストを万物の上にかしらとして教会に与えられました。この教会はキリストのからだです。私たちはキリストのからだの肢体であり、キリストの肉、キリストの骨に連なっています。キリストの与える癒しとは、ご自身の新しい肉体的いのちを御心の奥底から私たちの肉体に注いで満たし、キリストご自身の最も深いところとの交わりに私たちを導き入れることにほかなりません。復活し天に昇った方が、強さといのちの源泉また基準となってくださいます。私たちはキリストの肉を食べ、キリストの血を飲みます。キリストは私たちのうちにおり、私たちもまたキリストのうちにおります。キリストが御父によって生きておられるように、キリストを食べる者もキリストによって生きるのです。これが、イエスの御名による、素晴らしく、力強く、かけがえのない肉体的癒しの原理です。私たちの死ぬべき肉体にイエスのいのちそのものが現れるのです。

【六】　このため、それはまったく**新しいいのち**でなければなりません。

イエス・キリストの死と復活は、贖われたいのちにとって過去と現在の間に決定的な分断をもたらしました。今や、だれでもキリストにあるならば、その人は**新しく造られた者**です。古いものは過ぎ去りました。**すべてが新しくなったのです**。イエスの死が私たちの古い自己をことごとく殺しました。イエスのいのちがあらゆる新しいいのちの泉です。このことは私たちの肉体のいのちについても真実です。古い自然の強さを回復させるのではありません。以前のような健康状態

に復帰するのではありません。それは、古い頼りをすべて手放すことです。しばしば、自然の強さがことごとく衰え尽きることでもあります。それは「弱いものが強くされる」強さです。すでに存在する何かをもとにして作り出すのではなく、創造のように無から出で、復活のように暗い墓から、あらゆる助けも希望もついえたところから出でる強さです。この原理は、神癒を実際に経験するうえで非常に大切です。古い自然のいのちの中に癒しを探すかぎり、必ず失望します。けれども、肉を頼みとするのをやめ、私たちの内側に宿って霊と肉の強さとなってくださるキリストとその超自然的ないのちを一心に見つめるなら、私たちを強くしてくださるキリストによって、何事でもすることができるということを発見します。

【七】 このため、キリストのもたらした肉体的な贖いは、**癒しにとどまらず、いのちそのものでもあります**。

それは、私たちのいのちを古い土台の上で調整し直し、その後は自然の水準で機械のようにひとりでに動くままに放置しておくのではなく、質的に新しいいのちと強さを注入することです。それゆえ健康な人にも病気の人にも平等に不足なく注がれます。端的に言えばそれは自然のいのちよりも質的に高いいのちであり、生命の水を神の天的なワインに変えるものです。そのため、キリストのうちに常にとどまり、キリストから継続して受け取る必要があります。それは一度預ければずっと残る預金のようなものではなく、日ごとに頼ることです。内なる人が日ごとに新しくされ、私たちの必要な分だけ強さが与えられ、キリストのうちに私たちがとどまる限り継続します。そのような**いのち**は非常に聖なるものです。まなざし、声の調子、ふるまい、器官、からだの動き一つひとつに固有の聖性を与えます。私たちは神のいのちを生きているので、神のように、神のために生きなければなりません。こうして神のいのちを吹き込まれたからだは魂とクリスチャン生活のあらゆる奉仕に十倍の力を加えます。この神の力において話されたことば、神のいのちを通じてなされた行いには、霊と同様に肉体も聖霊の宮であると感じさせずにはおかない確かな力が伴います。

【八】 この新しいいのちを私たちにもたらす偉大な仲介者が**聖霊**です。

イエスの贖いのみわざは、祝福された聖霊の働きなしには完成されません。ナザレのイエスは現在、目に見える肉体の顕現ではなく、霊的な顕現によって、病人や足の不自由な者や目の見えない者にお会いになります。古い肉体的な力はすべて保ったまま、苦しむ者にもたらす結果もすべて昔の時と同じですが、その方法は肉体的ではなく霊的です。その臨在は、私たちの意識にもたらされなければなりません。私たちの必要とキリストのいのちの接点は、聖霊を通じて生じます。このことを、マリヤは復活にまみえた最初の瞬間に学ばなければなりませんでした。「わたしにさわってはいけない。わたしは上って行く。」それ以降、マリヤはキリストを昇天のキリストとして知らなければなりませんでした。同じように、パウロもキリスト・イエスを肉によって知ることをやめました。同じように、イエスはカペナウムで弟子たちに注意を与えなければなりませんでした。生けるパン――癒しの供給源でもある――について話されたとき、こう付け加えました。「それでは、もし人の子が前にいた所に上るのを見たら、どうなるのか。人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない」（ヨハネ六・六二～六三）。多くの人が癒し主と出会うのが難しいのはこういうわけです。彼らは聖霊を知りません。神を霊的に知りません。天の太陽は、もし大気が熱と光を伝えず、世界に散乱させなければ、ただの冷たく輝く氷のボールにすぎません。キリストのいのちと愛も、媒介となる聖霊なしには私たちに届きません。聖霊こそが光であり大気であり、キリストのいのちと光を注ぎ、愛と臨在を私たちの内側にもたらす神の仲介者です。聖霊が、イエスのものを受けて、それを私たちに知らせ、イエスのいのちとからだの本質をとらえて、私たちの血管、神経、器官、機能のすみずみにまで優しく行き渡らせるのです。そうです、聖霊はいのちを与える方です。イエスが地上で悪霊を追い出したのは聖霊の御力によってでした。現在も同じです。「もし、イエスを死人の中からよみがえらせたかたの御霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリスト・イエスを死人の中からよみがえらせたかたは、あなたがたの内に宿っている御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも、生かしてくださるであろう」（ローマ八・一一）。

【九】 この新しいいのちは、キリストの贖いにあるどの祝福とも同じく、**わざによらない神の自由な恵みであり、人の功績による差別やえこひいきがありま**

せん。

キリストを通じて与えられるものはすべて恵みです。人を義とする信仰に、行いを混ぜることはできません。例外は、義とされた後に、その実として伴う行いだけです。それ以外の行いはすべて死んだわざであって、救いにとって致命的です。同じように、癒しも完全に神から出たものでなければなりません。そうでなければ、まったく恵みではありません。キリストがお癒しになるなら、ただおひとりでお癒しになります。この原理は、神癒の信仰と他の手段を組み合わせて使って良いのかという疑問を永遠に解決してくれます。亀と機関車を同時に走らせたり、大きな海底ケーブルを一部は鉄、一部は麻で作ったりするのがありえないように、自然のものと霊的なもの、地上的なものと天的なもの、人間のわざと神の恵みは、混合されえません。それらは協働できません。福音の賜物は、主権者の賜物です。神は私たちのために最も困難なことをおひとりでなさいます。しかし、自分の力に頼る私たちを助けて、最も簡単なことをさせることはおできになりません。ですから、望みのついえた状況は、私たちが自分で解決できると思っている状況に比べれば、はるかに望みがあります。私たちは「他の何ものも割り込む余地のないほどに、完全に神に賭ける」べきです。癒しが自然の方法で求められるべきものならば、あらゆる技と経験を駆使しましょう。けれども、癒しがイエスの御名を通して与えられるものであれば、ただ恵みのみによって得られます。同様に、癒しが福音の一部であり、キリストの賜物であるならば、福音の偉大な「誰にでも」という性質にのみ制約されて、必ず公平に与えられます。選り好みで差別されるような特別な賜物ではありません。誰にでも与えられる、信仰と従順の偉大な相続分です。「いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」（黙示録二二・一七）。来る者は従順の信仰という単純な条件を満たさなければならないことは真実ですが、その条件は人を分け隔てしない公平なもので、すべての人の手の届くところにあります。

【十】　この偉大な祝福の単純な条件は、福音に含まれる祝福すべてについて言えることですが、**見ずに信じる信仰**です。

わざによらない恵みと、見ずに信じる信仰は、栄光の福音における対をなす原理としていつも同伴します。神の恵みを受けようとする者に神が要求なさる一つのことは、神のことば以外に信頼できるものが何もないところで、神の単純なみことばを信頼するということです。本物の信頼でなければなりません。信じて疑わずにいなければなりません。神のことばがいやしくも真実であるなら、それは絶対的に、完全に真実なのです。たった一つの小さなからし種でも、芽をふいて生ける根を張り、大きな岩や山をも割きますが、欠けのないからし種でなければなりません。からし種は完全な状態で保たれていなければなりません。わずかな傷がその生命を殺します。一つの疑いが信仰の有効性を破壊します。それゆえ、魂の中から始め、神をそのみことばのとおりに単純にそのままに受け取る必要があります。しるしと証拠を見せてくれるのを待つような信仰は、強くなりません。初めから何かに寄りかかって育つ植物は、いつまでもひ弱で、支えが必要です。見てから信じる信仰は、信仰ではありません。見ないで信ずる者は、さいわいです。アブラハムは、実現しそうな兆しが何もないうちに、それどころか自然の兆候がことごとくそれを否定し、ばかげたことに見せていたときに、神を信じて、信仰と父であることを表す新しい名を受けなければなりませんでした。創世記十七章の美しい表現形式に着目しましょう。最初、アブラハムはこう言われました。「あなたは多くの国民の父となるであろう」。続いて、アブラハムの名が変えられます。それは彼の信仰の告白であり、あざわらう世界を前にして、神を信じていることを公に認めることでした。それから神の次のことばが続きました。なんと素晴らしいことでしょうか！　時制が完全に変わります。もはや約束ではなく、実現した事実です。「わたしは、あなたを立てて多くの国民の父**とした**。」完了したのです。信仰が未来を過去に変え、神がまだ存在しないものをすでに存在したもののように呼び出されます。同じように、私たちも信じて、イエスの癒しのいのちと福音のすべての祝福を受け取らなければなりません。

【十一】　からだの癒しについて信仰の**義務**に関する原理はあるのでしょうか。

どのように癒されるか、あるいは私たちが神を信頼するか人を見るかは、私たちが自由に選択できるのでしょうか。それとも「定めとおきて」であって、単純に従うべき事柄でしょうか。贖われた者たちの身体を神がどう取り扱うかは神の偉大な特権であって、人間が、それも聖められていない人間がそれをいじり回す

のは僭越であり、私たちが神の方法以外の道を選ぶのも同じく僭越なのでしょうか。救いの福音は約束であると同時に命令でもあるのでしょうか。そして、癒しの福音にも同じ権威があるのでしょうか。神はご自分の世界に入り込んだ疫病の取り扱い方を、みずから定めることを選ばれたのでしょうか。そうであれば、私たちに神の偉大な健康の法則に口を出す筋合いがあるのでしょうか。神は贖いの一部として神の子供たちに治療薬を提供するために膨大な犠牲を払い、神の愛する御子の名の誉れと権利とに対して妬むような熱情をお持ちなのでしょうか。神は子供たちのからだの所有者であることを主張し、その世話をする権利を主張なさるのでしょうか。神は私たちに一つの偉大な処方箋を残し、他のやり方は権威がなく、むしろ不従順で、私たち自身を危険にさらすものなのでしょうか。確かに、これらの質問はおのずと答えが出ます。単純で従順な神の子にはただ一つの道が残されます。

【十二】 神が私たちの魂とからだを取り扱われる秩序はある決まった原理に規定されています。

（一） 内側から外側へ。神はみわざを私たちの霊的性質から始められ、それからそのいのちと御力を私たちの物理的な肉体へと広げられます。多くの人が霊的生活に間違いと欠けを残したままで癒しを求めて神のもとに来ます。神は癒しを拒まれませんが、魂の深みから始めて、神のいのちを受け入れる準備ができてから、やっと肉体の癒しを始めることがおできになります。

（二） 魂とからだの状態には不変の並行関係があります。ヨハネはガイオに「あなたのたましいがいつも恵まれていると同じく、あなたがすべてのことに恵まれ、またすこやかであるように」（第三ヨハネ一・二）と祈りました。心に罪の小さな雲があると、それが脳と神経に影を落とし、全身を圧迫します。霊的な悪の邪悪な息吹が血液に毒を吹き込み、全身の組織を衰えさせます。また、快活で、落ち着いて、信頼のある霊は肉体のいのちに活力をもたらし、私たちの内で主ご自身のいのちが力強く満ちて脈打つ道を開きます。

（三） したがって、癒しはしばしば霊的生活の成長とキリストへの堅固な信仰が育つにつれて時間をかけて徐々に起こります。神のいのちの原理は、自然のいのちと同様に、「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」のです（マルコ四・二八）。常に多くの予備的な働きが必要です。種は植えられ、死ななければなりません。茎が伸びて、重たい実に耐えられるほど強く育つ必要があります。多くの人が、芽がまだ柔らかなうちに、実った麦の穂を望んでいます。それでは、その重みに押しつぶされてしまうだけです。より高い祝福を支えるためには深く静かな強さを持たなければなりません。時にはこの準備が前もってすべて完了していることもあります。そのようなときには神は直ちにそのみわざを行なわれます。けれども、いずれの場合にも、神は全人の成長に最もふさわしい秩序と過程を知っておられます。全人の成長こそ、私たちの中に行なわれるすべてのみわざにおける、神の変わらない偉大な目的です。

【十三】 癒しの限界もまたある原理によって定められています。

（一） それは不死のいのちではありません。キリストがいつも癒してくださるのなら、どうして人は死ぬのでしょうか。信仰が到達できるのは神の約束の範囲内までだからです。神は私たちがこの経綸の時代に死なくなることをどこにも約束しておられません。約束されているのは、自然のいのちの長さまで、私たちの生涯の働きがなされるまでの間、いのちと健康と強さが持続することです。私たちがいただいているのは復活のいのちであることは真実ですが、その全体ではなく、ただ初穂だけです。不死のいのちについて第二コリント五章で使徒が語っています。「わたしたちを、この事にかなう者にして下さったのは、神である。そして、神はその保証として御霊をわたしたちに賜わったのである」（第二コリント五・五）。すなわち、この保証、私たちがいただいた手付金は買い取られた農場そのものの土のひと握りですが、それはひと握りにすぎません。同じように神が御霊によって私たちに与えてくださった新しい肉体的いのちも、復活のいのちのひと握り分です。ひと握りだけが与えられていて、完全なものは主の来臨まで来ません。けれども、そのひと握りには、地上のすべての土と自然のいのちの百倍もの価値があります。

（二） もうひとつの限界は、私たちが現在の状態にあってこのいのちにどの程度期待できるかという点に関わっています。私たちはあらゆる種類の超自然的な功績をあげ、尋常ならざる力を発揮できるほどの強さをいただけるのでしょうか。私たちが持っているのは、神のみこころとキリストへの奉仕を行うのに十分

な強さをいただくという約束です。しかし、誇示するためだけの強さや、むやみに浪費したり自己中心や罪に費やすための力はありません。神に任じられた働きという限界はありますが、この限界は非常に広いものです。どんな自然の強さよりも広いです。その限界の内であれば、私たちは私たちを強くしてくださるキリストによって、何事でもすることができます。キリストがはっきりと私たちを導き、召しておられるところでは、野ざらしや弱さや健康に悪い気候、強さと時間を最も奪う要求に直面しても、あらゆる苦役、自己否定、困難を恐れずに引き受けることができます。私たちは神の守りの御力を得て、次の真実を見出します。

「神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである」（第二コリント九・八）。しかし、禁断の地に触れ、神のみこころの聖なる領域から出て、その強さを自己と罪のために費やしてみなさい。たちまちいのちがしおれてしまいます――ヨナのとうごまやサムソンの腕のように。そうです、次のことばが私たちのいのちにおいて真実とならなければなりません。どの部分も欠けることなく、すべてが真実と。「万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように、アーメン」（ローマ一一・三六）。

第五章　聖書の証言（その一）

この主題に関する証言の価値には疑念の余地がありません。証言というものはきわめて聖書的な概念です。証言はしばしば福音を個人的レベルにまで噛みくだき、苦しんでいる者の心にすっと入ります。そうしたことは抽象的な教えにはできません。とはいえ、証言はいつもシンプルで控えめで、できるかぎり個人色を抑え、原理原則の例示となるものであるべきです。これが聖書にある数々の証言の特徴です。その中からいくつか選んで、簡単に見ていきましょう。

ヨブの場合（ヨブ記一章、他）

ヨブの例は詳細に書かれた証言の中で聖書に登場する最初期のものです。

（一）　ヨブの病はサタンの手でもたらされました。病気にサタンが関わっているという事実は、私たちの主もはっきりと教えてくださっています。サタンの勢力は今も衰退していません。

（二）　ヨブの病は神に許可されたものでした。その目的は、ヨブを導いて自分の心を調べさせ、自分がどれほどきよめを必要としているかを悟らせることでした。

（三）　病それ自体がヨブをきよめたのではなく、自分の罪と自己義認をより深く表出するよう導いたにすぎません。病そのものは人をきよめませんが、聖性にあずかる必要性に目覚めさせ、神から聖性をいただくようにと教えてくれることがあります。

（四）　ヨブの病は、罪を認めて神に告白したときに除かれました。神がご自分を現されたときに、そうなりました。ヨブは声をあげました。「今はわたしの目であなたを拝見いたします。それでわたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います」（ヨブ四二・五～六）。そのときヨブは完全に義とされ、敵を赦し愛する霊をいただきました。ヨブが友のために祈ると、主はヨブ自身の繁栄をもとにかえされました。神との関係が正しくなれば、私たちは自分自身のためにあまり多く祈る必要がありません。他人のために祈るときにこそ、しばしば私たち自身の祝福が来るものです。ヨブの癒しはすべてを新しくし、すべての祝福が二倍になりました。霊的祝福があらゆる祝福の中で最も深遠なものであるのは言うまでもありません。

なんと示唆的なことでしょうか！　霊的教訓を学ぶ用意ができるまで魂は神の御手の中にあり、用意ができたなら、神ご自身の御手からいのちと復興を受け取るようになるのです。

傷ついたイスラエルと青銅の蛇（民数記二一章）

（一）　この病の由来は罪でした。イスラエルはつぶやいたので、神はイスラエルにつぶやきの種となるものを与えました。不満をこぼすという行為は深刻な問題です。それは必ず、私たちの恐れているものか、それよりも悪いものを招くからです。「わたしの恐れるものが、わたしに臨む」（ヨブ三・二五）。

（二）　この病の由来は蛇、つまりサタンでした。今でもサタンが私たちのいのちに噛みつき、血に毒を送ります。それは火の蛇でした。ヘブル語では「蛇、セラフィム」となっています。私たちの霊的な敵は地をはう虫とは限りません。多くの場合、高貴な姿をしていて、人知を超えた賢さをそなえています。

（三）　病の治療法は病そのものに似た形をしていました。つまり、毒を抜かれた蛇の形でした。蛇の形は、病に苦しむイスラエルの野営と、罪に打たれた世に向けて、鮮やかに示していました。サタンは毒牙を奪われ、病も罪も、かつて猛威をふるった姿の影にすぎなくなったということです。また私たちにとっては、青銅の蛇はイエスを思わせます。イエスは罪人の名前を引き受けて恥と屈辱を負い、神にさえ罪人に数えられ、人にも罪人として扱われました。まるで本当に犯罪人に――蛇に――なったかのようでした。こうしてイエスは私たちのために

に、サタンと罪と死から毒牙を抜き取り、高く掲げられた十字架に勝利の戦利品を掛けられたのです。

（四）青銅の蛇を見上げることによって、癒しが訪れました。見ることには言語を絶した力があります。悪を見ることは魂を凍りつかせます。純粋さと愛を見ることは魂を美しく形作ります。目は、見ているものを魂の中に運び込みます。太陽のほうを見れば、太陽が目の中に入ります。イエスを仰ぎ見ることは、私たちの存在そのものにイエスのいのちをもたらします。これは肉体的ないのちでした。私たちがイエスを仰ぎ見るなら、魂のためにも肉体のためにも、同じいのちが今でも十字架から流れ込むのです。

ナアマン（第二列王記五章）

（一）これは型としての意味をもつ病の例でした。らい病は、魂と肉体をともに滅ぼす罪の、特別な型です。罪の肉体的影響を示す固有のしるしです。

（二）この病を癒すために最初に用いられたのは、ヘブル人の少女でした。彼女が大きな貢献をした事実からわかるように、神はごく身分の低い使者や、何気ないひとことをも用いることがおできになります。じっさい、少しあとでナアマンのしもべたちが知恵に富んだ勧めを進言して、ナアマンが祝福を逃さずにすむようにしました。

（三）次に学ばなければならない教訓は、謙遜と従順の信仰です。肉体が神の御手に触れて癒される前に、ナアマンの高ぶった自己と我意が死ななければなりませんでした。そのため、エリシャはナアマンの華やかな威容に対して、静かに、こびることなく応じました。そして、ナアマンに謙遜を要求する単純な言葉を伝えました。ヨルダンへ行って七たび身を洗いなさい、そうすれば清くなる、という内容でした。病人は、私たちに一見冷たくあしらわれたように感じて、しばしば深く傷つくものです。けれども神はときに、このようにして病人にへりくだりの信仰を教え、病人の思いを自分自身や他人から引き離してくださいます。ナアマンも他の傲慢な罪人と同じように、はじめは十字架を拒み、あやうく祝福を逃しそうになります。そのとき、しもべたちの正直で率直な言葉がナアマンを我に返らせ、ヨルダン川に行かせました。

（四）ナアマンの信仰は、預言者の伝えたことをそのまま実行したという点がポイントです。ナアマンは無条件に神の方法に従い、祝福が来るまでそれをやめませんでした。もしかすると一度目も、二度目も、六度目も癒しの兆候は現れなかったかもしれません。それでも続けました。最後に驚くべき祝福が来ました。その肉は幼な子の肉のようになりました。こうしてナアマンは、自分の見いだした偉大なヤハウェを神と認め、ただこの方だけに礼拝を捧げるようになりました。

（五）ナアマンが癒された場所の土を持ち帰りたいと願ったことは、より大いなる将来の手付金として私たちもいただいている聖霊の、美しい予表です。手付金（earnest）という言葉には「ひと握りの土」という意味があります。ナアマンはカナンの大地からひと握りの土を持ち帰りました。私たちも癒しによって御霊の手付金をいただきます。それは地上で始まった天の一部分です。

（六）エリシャがナアマンを、ただ神にだけ寄りかかる者として去らせたことに目を留めるのは麗しいことです。ナアマンはリンモンの宮で身をかがめることについて尋ねましたが、エリシャは直接的には答えず、ナアマンを神おひとりにゆだね、安んじて行きなさいとだけ答えました。ここには人間がほとんど現れません！　そして神はなんと単純で、栄光に富んだお方でしょうか！

（七）しかし、サタンもここに一枚かまずにはいられません。サタンはたいてい、ゲハジのような欲得ずくの悪だくみの中にその手の内を見せます。現在でも、サタンに属するスピリチュアリズムやその系統の技術が、神のものを商売の種にしようとします。けれども、近づいてよく見れば、その手も顔も、らい病で雪のように白くなっているのが見えます。

ヒゼキヤ（第二列王記二〇章）

（一）ヒゼキヤは望みが絶たれていました。治療法がヒゼキヤの治癒にどんな役割を果たしたのか、人はあれこれ論じます。けれども、その議論は次の事実

で決着がつくはずです。ヒゼキヤはどんな治療も届かない状態にありました。神ご自身が、ヒゼキヤは死ぬ、生きながらえることはできないと言われていたからです。ですから、人も手段もヒゼキヤの治癒には関わりようがありませんでした。それはまったく神のわざでした。

（二）　ヒゼキヤはへりくだって神のほうを向きました。人からの助けは得ようともしませんでした。万策尽きて自分自身を主のあわれみに委ねました。ヒゼキヤの祈りは必ずしも信頼に満ちたものではありませんでしたが、それでも神はその無力な祈りを聞き入れ、ヒゼキヤを救われました。

（三）　ヒゼキヤの祈りに対する答えは明白でした。よわいを十五年増す、という神ご自身からのお答えでした。イザヤが遣わされてそのことを伝えました。ヒゼキヤはすぐに信じて、賛美し始めました。

（四）　二つのしるしが伴いました。ひとつは日時計の影が十五度戻ること、もうひとつはいちじくの湿布です。両方とも「しるし」と呼ばれています。いちじくは薬として用いられたのではありません。どんな薬も効かなかったからです。いちじくは象徴でした。そのため、いちじくをヒゼキヤに貼ったのは医者ではなく預言者でした。

（五）　癒された後のヒゼキヤの生き方は、とうてい癒しに値するものではありませんでした。ヒゼキヤは「その受けた恵みに報いることをせず、その心が高ぶ」りました（第二歴代三二・二五）。その罪と愚かさの苦い実は、長い年月の後まで残りました。それは、神の偉大なあわれみを受けることがいかに厳粛なことであるか、また贖われたいのちをどれほど聖なるものとして神のために使わなければならないかを、示し続けたのです。人々はいつもこう尋ねます。「ヒゼキヤの話は、医療を用いることが正しいことを証明しているのではありませんか」。いいえ、ヒゼキヤの話が示しているのは、癒しに関しては神が仰せられたことをその通りに実行するのが正しいということです。神はナアマンにはヨルダンで身を洗うよう命じました。ほかのことをすれば不従順だったでしょう。ヒゼキヤにはいちじくを使うように命じました。ほかのことをすれば不従順だったでしょう。神がいちじくを使いなさいと仰せになるなら、他のどんなものを使っても不従順です。では、神が現代の私たちには塗油と信仰の祈りを使うよう命じておられるにもかかわらず、他のものを使うのは、本当に従順といえるのでしょうか。

身分の高い役人の息子（ヨハネ四章）

これはキリストが最初に行われた癒しの奇跡です。私たちの生きる時代にあって、特に参考になります。

（一）　この箇所が教えてくれるのは、イエスが私たちをお癒しになるのにイエスが物理的に目の前におられる必要はないということです。イエスはこの病気の子供から遠く離れた場所におられ、力あるみことばをひとことお話しになっただけでしたが、全能の御力は地理的隔たりを超えて届きました。ですから今も、御力は天から地へと隔たりを超えて届きます。「ああ、イエスがここにいてくださったらいいのに！」と言う人がいます。けれども、イエスの最初の大いなる奇跡は、地と天の隔たりにも匹敵するかもしれないほどの距離を超えて行われたのです。

（二）　これは信仰による奇跡でした。目に見えるしるしの伴わない、単純でそのまま受け入れる信仰です。主イエスは他のすべてを退けてこの信仰に集中させるため、こう言われました。「あなたがたは、しるしと奇跡とを見ない限り、決して信じないだろう」（ヨハネ四・四八）。それから彼の信仰を試してこう言われました。「お帰りなさい。あなたのむすこは助かるのだ」（ヨハネ四・五〇）。男はこの難しい課題を受け入れ、そのまま信じました。すると子供は全快していました。彼は主に来てくださいと頼み込むのをやめ、静かに帰ることによって、自分の信仰を示しました。

（三）　この話ではある瞬間から癒しが始まり、少しずつ静かに進行しました。多くの人が今もそのように癒されています。「彼は、そのなおりはじめた時刻を尋ねてみた」（ヨハネ四・五二）。すると答えは、ある瞬間から熱が引いたというものでした。子供はすでに回復中でした。現在でも主はご自分を信頼する者すべてのために働いてくださいます。信仰には瞬間的なものと時間のかかるものがあります。その両方を受け入れなければなりません。信じた瞬間に病に致命的

な一撃が加えられたとみなし、そのあとは、癒しの祝福が段階を追って実現していくのに従っていくのです。

ペテロのしゅうとめの癒し（マルコ一章）

二番目に記録されているキリストの癒しの奇跡です。キリストは会堂から出てきたところでした。そこでは人々が唖然とする中で、悪霊を追い出されたのです。ペテロの妻の母が熱病で伏せっていました。つまり、これはごく普通の病気の例でした。しかし私たちの主は、熱病の背後に別のものがあることをはっきりと認識しておられました。「熱をしかりつけ」（ルカ四・三九）たとありますが、これは熱病を引き起こしている何らかの悪い人格的な存在がいることを示しています。単なる自然の法則をしかったりすることはありません。人格的な意志のないところに、非難すべき点はないからです。この熱はまさに悪霊の焼けつく手が触れたことによるものでした。それを主はしかりつけられたのです。次のステップとして、彼女は、主がまくらもとに立って与えようとしておられる癒しの力を、自分から積極的につかみ取る必要がありました。主は彼女の手をとって起こされました。彼女は立ち上がりました。そこにはもちろん主の力強い御手と全能の助けがありましたが、彼女の協働もありました。主の伸ばした御手をつかみ、病気による無気力と疲労を振り払い、起き上がろうと力を込め、立ち上がったことです。私たちも神の助けと力をいただくためにこのようにしなければなりません。そして彼女は、その新しい力を用いて主と人々に仕えました。これこそ癒しの最良の証明であり、最良の活用でもありました。私たちは新しいいのちをいただいたなら、それをいつも神に捧げ、このいのちをもって他人に仕え、自分自身を忘れなければなりません。そうすれば新しい力が自分の中に湧いてくるのを感じるはずです。自分のいのちを与えるとき、それを救います。他者に仕えるとき、主が私たちの必要をすべて満たしてくださいます。私たちのすることは、ただ主のために生きることだけです。主のなさることも、私たちのために生き、私たちのすべての必要を満たすという、ただ一つのことだけです。これを知るのは、責任と心配の幸いな交換です。

大勢の人の癒し（マタイ八章）

キリストのご生涯から次の例を引きましょう。ペテロのしゅうとめをお癒しになった安息日の夕方に、誰もかれもが来て癒されたという箇所です。大勢の人が集まって、安息日が終わるまで待っていました。六時になるとすぐに、皆がイエスのもとに殺到しました。さまざまな人が押し寄せましたが、イエスは全員を癒されました。さて、この箇所から学ぶ最初の教訓は、民衆が安息日の終わるのを待っていたという事実と大いに関係あります。この事実が示すとおり、当時蔓延していた癒しについての考え方は、私たち自身の世俗的な時代の不敬虔な考え方とよく似ています。民衆は、肉体とそれにまつわるあらゆるものは純粋に世俗的なものであると考えていました。そのため、肉体の癒しは世俗的な仕事にすぎず、聖なる安息日にはふさわしくない働きと見なされていました。これはまさに現代の不信仰がキリスト教国の教会に教えていることではないでしょうか。肉体の治療は自然法則と医学に関する問題であって、世俗の医者がほかの仕事と同じように世俗的な利益のために研究し取り扱うべきものであるのだから、魂の救いと養育に並ぶような神聖さはない、と。この時には私たちの主は民衆の考え方に合わせてくださいましたが、しばらくもしないうちに主が明白な意図をもって安息日の癒しを行う日が来ました。この愚かで不敬虔な考え方を主は破り捨て、踏みつけました。そうすることで、人々に次のことを教えられました。肉体は魂と同等に神聖であるということ、肉体の回復も神の贖いの一部分であること、肉体は専門家だけに取り扱いを任された対象ではないということ、肉体の癒しは主自身の特権的な務めであるということ、さらに、肉体の癒しは神殿での礼拝や人の魂の救いと同じように安息日にも行われるべき神聖なわざであるということです。この箇所が教えてくれる次なる教訓は、主の癒しの普遍性です。主は癒しを必要とする者を全員癒されました。癒しは使徒のしゅうとめのような特別な場合にだけ行われるものではなく、貧しい者、罪人、苦しむ者、主を信頼するなら誰にでも与えられるということを、主は示そうと願われたのです。そして、最も重要で有用な教訓は、この出来事がイザヤの預言と結び付けられているということです。イザヤはメシヤの本質を、病とわずらいを負う者と表現しました。ですか

ら、主がここで苦しむ者を癒したのは偶然ではありません。特別に、例外的に神の御子としての御力を示したのでもありません。そうではなく、メシヤが何のために来られるのか、本当の目的を明らかにするためでした。ですから、すべての時代の人が主のもとに来て、主に重荷と痛みをお委ねすることができるのです。なんと深遠で完全なみことばでしょうか。「彼はみずから、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた」。ご自身が――ご自身と医者とではなく、ご自身おひとりが。ご自身が――ご自身と私たちとではなく、ご自身がいっさいの重荷を負い、私たちを完全に自由にしてくださるのです。ご自身が――ですから、主ご自身を得ることなしに癒しを得ることはできません。主ご自身の中にあらゆるものが詰まっています。私たちのうちにある主のいのちが、主の内住が、主のからだが、主の肉が、主の骨が。主ご自身が一度だけでなく永遠に、身に受け、負い、持ち上げ、保持し、永遠に運んでくださいます！　素晴らしい癒し！　素晴らしい癒し主よ！

らい病人（マルコ一章）

これはその少しあと、キリストがガリラヤを巡回しておられたときに起こりました。

（一）この男の嘆願は、平均的なクリスチャンに見られる心の状態の良い見本です。キリストが癒す力をお持ちであることは確信していましたが、癒しがキリストのみこころにかなっているかどうかに自信がありませんでした。たとえば友人がどうしても私を疑うのだとしましょう。「君には私を助ける力があることは知っているけど、助けたい気持ちがあるかどうかは自信がないんだ」と言われるよりは、「もし可能なら、私を助けてくれると確信しているよ」と言ってもらうほうが、私にはずっとましです。神のみこころについてのこの気安く人のよさそうな言い方が、最も巧妙で侮辱的な不信を含んでいることに、人々はいつになったら気づくのでしょうか。

（二）キリストの答えは単純明快で、真摯に信頼する者を癒すことはみこころにかなっているかという疑問に解決を与えるものでした。「そうしてあげよう、きよくなれ」。遠回しな表現やあいまいな言い方ではなく、躊躇も留保もありませんでした。頼もしく、きっぱりとした、堂々たる答えでした。すべての時代の人がこのみことばを聞くことができます。私たちにも語られています。

（三）キリストが触れてくださったことは、らい病人にとって大きな意味がありました。長い間、愛の手で彼に触れる者がありませんでした。冷たい、事務的な触れ方ではありませんでした。主は深くあわれまれました。主の愛の心といのちそのものがその中にありました。そうです。主が私たちを助けてくださるのは、約束のゆえに強いられてではなく、あふれる愛と限りないへりくだりによるのです。主はご自分のいのちで私たちの不滅のいのちに触れ、ご自分の新鮮で温かい血をもって私たちのらい病人の心を脈打たせてくださいます。

（四）癒されてから男は、エルサレムの祭司のところに行き、適切な手続きと証言を行い、国の宗教的権威の前で証をしなければなりませんでした。それまで他の場所で証することは控えていなければなりませんでした。私たちも同じです。私たちのうちになされた主の力あるわざを証しなければなりません。それも、主の望まれる場所で証しなければなりません。そこは私たちにとって最も困難な場所かもしれませんし、宗教的な高慢と反対のただ中かもしれません。ガリラヤからエルサレムへの旅は長い道のりでした。私たちの証にも、主のために同じほど大きな犠牲が求められるとしたらどうでしょうか。主の愛には、それだけの価値があるのではないでしょうか。

第五章　聖書の証言（その二）

中風の人（マルコ二章）

（一）　これはキリストの癒しの奇跡の中で最も注目すべきもののひとつです。ここで初めて主は罪と病気を結びつけて教え、ご自分が罪を赦す権威を持っておられることを明かされたからです。この時以降、キリストは神の冒瀆者と見なされるようになりました。この哀れな男は癒しを求めて来ましたが、主はもっと深い必要が先に満たされるべきであるということを知っておられました。男の霊的ないのちが肉体的ないのちに先行しなければなりません。そのため、最初に話されたのは赦しのことばでした。「子よ、あなたの罪はゆるされた」。私たちも同じように始める必要があります。いったいどれだけの人が、自分の癒しの必要を通じて自分の救いの必要に気づくよう導かれてきたことでしょうか！

（二）　その後で肉体的癒しがありました。しかしこの癒しも、大胆な従順の信仰を自ら実行することによって起きたものでした。男は床に伏したままで癒されたのではありません。自分で起き上がり、床を取り上げ、自分の足で歩き出さねばなりませんでした。キリストがあなたを癒されるとき、床に伏したままで癒されるのではありません。あなたはキリストの力により頼んで、自分で立ち上がり、自分の足で踏み出さなければなりません。

（三）　男が癒されたのは、イエスのもとに運んできた人たちの信仰のおかげであると一般には思われていますが、そうではなく男自身の信仰によるのです。周りの人たちの信仰が男をイエスの足元に置き、罪を赦すあわれみのみことばを聞けるところにまで運んだことは確かです。けれども、癒しを自分のものにするためには本人の信仰が必要でした。しかも、群衆の前で立ち上がり床を抱えて歩くには、本物の信仰でなければなりません。他人の信仰は、私たち自身の信仰に加わるなら大いに助けになりますが、信じない心のままでは主から何もいただけません。

（四）　赦しの証として、またキリストの救いの御力のしるしとして、癒しの占める位置は非常に厳粛なものです。主がこの男を癒されたのは、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、人々にわかるためでした。主は現在も、癒しの奇跡によってご自分の福音が現実であることを世に知らしめたいと願っておられます。私たちの人生に臨む肉体的な悪に対して、主がそれを凌駕する十分な力を現されないとすれば、主の霊的な賜物が現実のものであることをどうして人に信じてもらうことができるでしょうか。実生活で起きるさまざまな現実的な困難に立ち向かう十分な力が信仰にないとすれば、その宗教が本物であるとどうして確信することができるでしょうか。

ベテスダの動けない病人（ヨハネ五章）

（一）　この奇跡は主の働きの中期ごろにエルサレムで起こりました。安息日に公然と意図的に癒しを行った最初の例です。この奇跡は、病気と癒しは世俗的なものであるという人々の愚かな考えに真っ向から否を突きつけるために行なわれました。また病気の癒しは安息日に行なうにふさわしい神聖なものであって、主の霊的働きの一部であることを示すためでもありました。現在でも多くの人が、肉体の重要性を不当に高めてしまうことを恐れています。キリストが肉体に触れるときにはいつも、肉体は聖なるいのちと祝福の通る経路となり、またそれを入れる器となりますが、その事実を人々は忘れてしまっています。

（二）　次なる重要な教訓は、人は癒しのためにいかに空疎なものを頼りにしているかです。この男は癒されるためにベテスダの池で待機していました。時おり池の水が動いて癒しの力を帯びるという迷信めいた考えを抱いていました。ある時期になると御使いが降りてくるという一節がありますが、これは後世の付加でまったく愚かな嘘にすぎません。癒しのために地上的なものに希望を見出すことは、非常に馬鹿げていると同時に間違いでもあります。ベテスダとその偽りの

言い伝えのように、失望に終わるか、消え去ってしまいます。主が男を癒すとき、ベテスダや他の手段にはいっさい目もくれず、ただひとこと力あることばを話され、男に神の力を受けて歩み出すよう命じただけでした。

（三）　いつか誰かが助けてくれるという漠然とした希望をもって待っていても、希望が叶えられず墓へと向かっていく人がいますが、そういう人にも教訓があります。イエスは男を癒されるとき、夢見がちな未来を一掃し、今この時に決断するという実践的で堅固な足場に男を連れていきました。希望というものはしばしば信仰と取り違えられます。信仰であるかどうかを見分けるしるしは、それがいつも現在のものであり、今この時に祝福をいただくということです。

（四）　もうひとつの重要な教訓は、他人に頼ることがいかに愚かで無益であるかです。「主よ、わたしを池の中に入れてくれる人がいません」という言葉は、他人の助けによって癒しを期待している何百人もの人々の無気力な依存心を代弁しています。彼らは他の人の信仰と祈りばかりに目を向けているため、自分で信じる力が麻痺しています。私たちが自分でしっかりと信じるのでないかぎり、他人の助けは役立ちません。もし他人にしがみつくなら、私たちの手が相手を縛り、妨げてしまいます。溺れる人が救助人にしがみつくように、両方とも沈んでしまうかもしれません。けれども、私たちが自分でキリストをはっきりとつかむなら、キリストは友人たちにも、私たちのために、また私たちとともに、同じようにキリストをつかませてくださいます。

（五）　また、「なおりたいのか」という問いかけは、力ある信仰にとって本当に必要な要素を表しています。力ある信仰は揺るがぬ確固たる意志によって働きます。信仰はただの意志の力ではありませんが、信仰の台座と領域は意志にあります。これは神が人間に与えた最も力強い恵みであって、誰であれ揺るがぬ確固たる選択を避けて神から多くをいただくことはできません。私たちを健康にすることが神のみこころであることを最初に知らなければなりません。そのうえで、自分の全存在の力をあげて、強く粘り強く、それを自分のものとして求めなければなりません。

（六）　この哀れな病人が教えてくれるまたひとつの教訓があります。「もう罪を犯してはいけない。何かもっと悪いことが、あなたの身に起るかも知れないから」（一四節）。常にではありませんが、しばしばこうした長く苦しむ病気が、ある罪の習慣の直接的な結果である場合があります。今日でも多くの人が、若い日の隠れた罪が原因で病に倒れています。ですから、あらゆる罪をはっきりと認識し、告白し、断ち切らなければなりません。主の聖なるいのちを保ちたいなら、贖われたいのちはきよく、よく目を覚ましていなければなりません。それぞれの心と良心が、自分で答えを出さなければなりません。完全に従うために知りたいと願うすべての者に、神の御霊がそれをはっきりと示してくださいます。しかし、このキリストのいのちほど心を探る試金石となってくれるものは他にありませんし、「わたしは主であって、あなたをいやすものである」（出エジプト一五・二六）というみことばほど魂を聖なる祭壇にきよく結びつけてくれる紐は他にありません。この奇跡は、このあとに続く、キリストが与えるために来られた**いのち**についての説教と切り離すべきではありません。この奇跡は、まさにその幸いないのちを例示するものでした。キリストの癒しは、キリストご自身の神のいのちを私たちに吹き込み、私たちの無力な魂と体を生き返らせ、永遠のいのちを今始めること以上でもそれ以下でもありません。これはまさしく主がここで教えておられることです。「子もまた、そのこころにかなう人々に命を与える」（二一節）。「死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生きるであろう」（二五節）。

片手のなえた人（マタイ一二・一〇）

この奇跡は、ベテスダの池で病人を癒したエルサレムでの出来事に続いて、安息日の癒しについての大胆な教えをガリラヤでも繰り返したものです。この二つの話は、安息日の自由、肉体の聖性、また肉体の癒しの神聖さという偉大な原理を強調している点で共通しています。また、キリストの癒しの力を受け取るためには能動的で積極的な信仰が必要であるという偉大な教えについても共通しています。この人もまた病におかされた手をどうすることもできませんでした。自分では手を持ち上げる力がありませんでした。にもかかわらず、男は強い意志をもって力ある行動に出なければなりませんでした。結果はともあれ試すというの

ではなく、現実に成し遂げるのだという良き信仰と期待をもって行動しなければなりません。そうして手を伸ばしたとき、神の力が静かに人の従順と協働し、強さと勝利をもたらしました。このように信仰は、行う力がないうちに行うことを要求しますが、行動に出るなら新しい力がやってくるのです。足を深みにむかって踏み出さなければなりません。前に踏み出すと冷たい水に触れるかもしれませんが、神は裏切りません。受け身の姿勢で待っているだけでは神からいのちも力もいただけません。カナンの地に足を踏み入れなければなりません。手を伸ばしていのちの木から取って食べ、永久に生きるのです。「やもりは手でつかまって、王の宮殿におる」（箴言三〇・二八）。手を伸ばさないクリスチャンがあまりにたくさんいます。手を握りしめる力もなく、意志も弱く、信仰に力がありません。うなだれた方々よ、主の御声を聞いてください。「**手を伸ばしなさい**」。パリサイ人との議論の中で、イエスは癒しが神のみこころと結びついているとお考えになっていることに疑問の余地を残しませんでした。主は、安息日に病人を癒すことに反感を持っている人々の誤解をあざけり、この人の癒しを行う正当性を擁護しました。第一に単純な人道的観点から、穴に落ちた牛や羊ならだれであれ助けるだろう、という点で。第二に正しさの観点から、癒しを行うのは「善を行う」こと、「命を救う」ことであり、行わないのは「悪を行う」こと、「殺す」ことであるという点で。これは病気を素晴らしい賜物とみなす考え方とは相容れません。ところがこのようないつくしみと恵みに満ちた教えは、その場にいた悪人を怒らせるだけでした。神の力が主の教えの正しさを証明するのを見てもなお、またこの人が目の前ですっかり癒されて立っているのを見てもなお、彼らは激しく怒って、なんとかしてイエスを殺そうと相談しました。同じように現在でも、誤った考えが神の愛と真理を見る目を覆っています。教義的な整合性のためにキリストの癒しの働きに反対する人がいるのは、今日でも同じです。

病気の霊につかれた女（ルカ一三・一〇〜二〇）

この美しい出来事はしばらく後に起こりました。これはキリストの安息日の奇跡のひとつで、先に挙げた話と同じ一般的な類型に分類できます。この話も同じ原理を補強します。ここで紹介しましょう。

（一） 女の病はどういうものだったのでしょうか。体の変形と麻痺でした。かがんだままで、からだを伸ばすことが全くできませんでした。しかも長い間ずっとそうでした。十八年間、この状態が続いていました。ですから、偉大な癒し主のもとに持ち込まれうる慢性の病としては、これ以上ないほど難しいものでした。

（二） 病の原因は何でしょうか。この箇所で、驚くほど明るい閃光が投げかけられています。彼女個人の場合にとどまらず、病気一般の原因は何であるかが説明されています。主はこの問題が自然の原因から起きたのではなく、ある人格的存在に直接的な原因があることを明確に指摘しておられます。その原因とは悪霊であり、彼女の体はまさしく**病気の霊**に縛られていたというのです。主は、この女が「十八年間も**サタンに縛られていた**」と宣言しておられます。主はこれを神の訓練とはみなさず、悪魔の手が肉体に直接働きかけた結果とみていました。言い逃れの余地も曖昧さもありません。汚れた悪魔をまるで天使のように大事に世話していたとしたら、それは身震いするような恐ろしいことです。

（三） 神のみこころに関する疑問も驚くほど明確になっています。クリスチャン倫理において「すべき」ほど強い言葉はありません。それは良心の、律法の、永遠の義の言葉です。それは神と人との両方を縛り付けておく綱です。神がすべきと言われるなら、不服申し立ても、妥協も、代替手段もありえません。絶対的に従う以外にありません。できるとか、しても良いとか、するかもしれないという意味ではありません。必ず行う必要があり、それを行なわないのは**間違っています**。そして、神のなさけ深いみこころと被造物の幸福よりも、つまらない偏見を優先させるこの悪人たちに対して、キリストはこう言われました。「**この女を、その束縛から解いてやるべきではなかったか**」。この言葉によって、神が私たちの癒しをどう考えておられるかについての疑問に決着をつけるべきです。

（四） もうひとつ、とりわけ重要な原理があります。この原理がこの「すべき」を含めたあらゆるものに条件と限界を設けます。それはこの女の信仰です。主は彼女をはっきりと信仰の子と呼びました。「アブラハムの娘」という表現はまさにこういう意味です。これこそが彼女の癒しを「すべき」ものとしていま

す。「アブラハムの娘であるこの女を、その束縛から解いてやるべきではなかったか」。すべての人を癒すことが神のみこころでしょうか。信じる者すべてを癒すことが神のみこころです。「アブラハムの娘」にはただの信仰以上の意味があります。非常に堅固な信仰、アブラハムのような、見ることなしに信じ、不可能と思えることであっても信じる信仰です。女がそのような信仰を持っていた証拠があるのでしょうか。あります。イエスが女を呼び寄せ、こう言われました。「女よ、あなたの病気はなおった」。（英欽定訳の）改訂版では「イエスは女を呼びよせ」とあります。イエスは女に、まず主のもとに来るよう求めたことを意味しています。それには超自然的な力と信仰が必要だったはずです。ですから、女はイエスに触れていただく前に、イエスのもとに来ようと試みたに違いありません。それから、女が近づくと、イエスはみわざがなされたことを宣言しました。「女よ、あなたの病気はなおった」。イエスは女に手を置き、みわざは完了しました。けれども、まず女の信仰のほうから動き出さなければなりませんでした。アブラハムのように行く先を知らないまま、ただ神の召しと力だけを頼りに踏み出さなければならなかったのです。そのときにみわざは完了したと見なされました。「あなたの病気はなおった」。このときに完全な結果が伴い始めました。

百人隊長のしもべ（マタイ八・五）

（一） この話で最初に特筆すべきは、異邦人であり異教徒でもある百人隊長の信仰をキリストが褒めておられることです。異邦人である百人隊長は神を知る機会も神の光を享受する機会もほとんど与えられなかったにもかかわらず、です。聖書全巻を通じて信仰についての最も厳粛な教えは、ほとんど光を受けていない者に最も力強い信仰が育ち、最も恵まれた立場にある者がたいてい最も不合理な不信仰を示したということです。今持っている光をすぐに用いない者は、さらに多くの光を与えられても、それをうまく用いることはないでしょう。百人隊長は、軍人という自分の職業から学んだことと、聞きかじった程度のユダヤ人の教えしか知らず、ほとんど光を受けていない者でした。それでも、自分の知るかぎりの義務には忠実で、神の民を愛し、ユダヤの会衆を大切にし、ユダヤ人の会堂まで自分の費用で建ててやったほどでした。

（二） 百人隊長が堅固な信仰を持っていたことは次の事実からわかります。第一に、百人隊長は自分がよく訓練された兵士を率いているように、キリストが宇宙万物を絶対的な権威で治めておられることを認識していました。第二に、百人隊長は、キリストがひと言おことばを話せばそれだけで病気がたちどころにやむことを認識していました。百人隊長は天と地の主からただひと言だけいただくことを願って、それ以上は願いませんでした。キリストのひと言をまるでカエサルの命令のように究極のものとして受け止めました。キリストのことばの権威を認めていたからです。キリストのことばは、まるで逆らいようのない偉大な法令のように宇宙を駆け抜けます。小さな子供の手にあっても、そのことばはキリストご自身の全能と同じ力を持っています。法の強制力は何と恐ろしいものでしょうか！ 法廷でただひとりの人の声が判決を言い渡せば、どんなに富と影響力があっても、その人が牢獄に入れられるのを止めることはできません。キリストが私たちに話されたことばは、法のことばです。信仰がそれを主張するとき、地獄の力も地上の力もどんなものも抵抗できません。その至上のことばを受け取り、病と罪の勢力に対してその権威を行使することは、信仰の管轄です。

（三） 百人隊長には信仰とともに美しい謙遜がありました。彼は自分がキリストにわざわざ来ていただく価値のない者だと感じていました。プライドの高いローマ人が自分のことをわざわざお越しいただく価値のない者だと表現するのはそうそうあることでありませんが、百人隊長は自分がお会いしているのがローマ皇帝よりも偉大な方であると感じていました。だから、百人隊長は霊的にへりくだり、ひざまずき、敬意を示し、礼拝していました。私たちにはさらに近づくことが許されています。私たちの屋根の下に来ていただけるだけでなく、私たちの心に永遠に住んでいただけるのです。

悪霊につかれたガダラ人たち（マタイ八・二八）

この出来事は非常に重要な事例です。狂気と心の病気を扱っているからです。この種の病はキリストの時代には悪霊つきの事例として扱われましたが、現在でもその性質と原因が変わっていないことは疑う理由がありません。私たちの主によると、この病の原因はサタンの使いのわざでした。この男に入っていた力は三千頭の豚を殺すほど強力なものでした。人の心にとりつく力は何と恐ろしいものでしょうか！　悪霊が男の体に及ぼした力は、人の手でどんな鎖をかけても断ち切れるほどでした。そこから、霊的存在が善にも悪にも肉体にどれほど影響を及ぼしうるかを、いくらかうかがい知ることができます。およそ肉体的な力には、その原因に霊的なものがあります。この惨めな男は自分の中に二つの原理があることに気づいているようでした。ひとつは自分自身の意志であり、弱々しくも自由を求めてもがいており、もうひとつは男を支配する悪霊で、彼の意志を押しつぶしていました。このようなやむをえず支配されている状態と、自分からサタンに売り渡すのとでは天地の差があります。主は深くあわれみました。主は男を抵抗しえない力の犠牲者と見ておられ、命令のことばによって自由にしてやりました。ただちに男の様子がすっかり変わりました。荒ぶれたおぞましい狂人が、着物を着て、正気になってイエスの足もとにすわっています。男についていた力がいかに恐ろしいものだったかは、まもなく豚の群れが滅びたことで明らかになりました。男は自分を解放してくださった主にしがみつき、主について行くことを願いました。しかし、イエスは男を告白と奉仕の修練に押し出す必要があることを知っておられたので、すぐに彼を独り立ちさせ、故郷に知らせを広めに行かせました。新しい進歩が新しい保証と強さを与えます。まもなくデカポリス全域に男の証言が知れ渡り、そのことが主が後に訪れてみわざを行う備えの道となりました。そこでのみわざは四千人の給食で締めくくられます。私たちも、若い弟子を信頼して最も大胆で困難な奉仕を任せ、独り立ちさせなければならないことがしばしばあります。精神病のケアは信仰という主題に関わる最も大切な問題のひとつです。真実な治療法はキリストの力です。非常に難しい問題であることは疑いようがありません。多くの場合、長く険しい信仰の試練となります。病人が世間から距離を置き、安全にクリスチャンの教えと信仰を受けることのできる静かな居場所が必要です。こうした試みはわずかながらに行なわれていますが、その結果から、聖なる知恵と勇敢な信仰によってどれほど多くのことがなされうるかがわかります。

キリストの衣に触れた女（ルカ八・四八）

（一）　この奇跡に関する最も美しい事実は、これがさらに偉大な奇跡、ヤイロの娘の復活を伝える記事の真ん中に挿入されていることです。まるでこの二つの奇跡によって主は一つの決定的な教えを書こうとしておられるかのようです。二つの原理がそれぞれに的確に説明されています。一方は神の絶対的な力が死しか残されていないような場所でさえ働くということ、もう一方は信仰の絶対的な力が神からあらゆるものをいただくということです。この二つの奇跡は、キリストが互いに結びつけられた二つの素晴らしい全能を強調しています。「神はなんでもできる」。「信ずる者には、どんな事でもできる」。

（二）　この病に対してなすすべがないこと、また人間の医者には治せなかったことが平易な文章で書かれています。医者をかばおうとする言葉はなく、あらゆる治療を試したけれどもますます悪くなるだけだったと率直に書かれています。この切れ味のよい描写をしたのが他ならぬ医者ルカだったことは注目に値します。

（三）　信仰と癒しのプロセスは非常に印象的です。三つの段階があります。まず、女は自分が癒されることを信じました。「み衣にさわりさえすれば、なおしていただけるだろう」と言っていました。次に、女は来て、触りました。行動に出たのです。信仰の人格的な生きた要素がここで鮮やかに表されています。信仰はただ信じる以上のものです。信仰は生ける救い主との生きた交流です。信仰は私たちの中にある必要に気づいて手を伸ばし、神に触れて供給をいただくことです。ただの外的な接近でも、ただの心的な接近でもありません。数百人の群衆がイエスに近づいていましたが、イエスに**触れた**のはただひとりでした。三番目ですが、そのまま信じ、実際に来て、それから意識的に受け取ることが必要で

す。すぐに血の元がかわきました。女は病気がなおったことを、その身に感じました。癒されるのを感じてから信じたのではなく、信じたのちに癒されるのを感じたのです。

（四）　けれども、彼女の祝福は公に告白されねばなりませんでした。キリストは賜物を公にせずに保持しておくことをお許しになりません。私たちはこっそりと賜物を長く保ち、楽しむことはできません。賜物は植物のように日の光を必要としています。女らしい奥ゆかしさは脇におかなければならず、恐れいりながらも主の足元で、すべての人の聞いている前で祝福を公言しなければなりませんでした。私たちは恥ずかしさと沈黙によってなんと多くの祝福を逃していることでしょうか！

（五）　またどれだけ多くのものを女は告白によって得たことでしょうか！「娘よ、しっかりしなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。平和のうちに行きなさい」。娘は、慰められ、癒されて、今や平和のうちに送り出されました。神の御手に触れていただくことによる深い神聖な休息は、信仰によって相続する恵みのうち最も豊かな部分です。平和が彼女に訪れただけではありませんでした。彼女は平和の中へ入って行くのです。それはあまりに広く実り豊かな土地なので、彼女がその果てに行き着くことも、その貴重な資源を使い尽くすこともありません。自分の体のために行った小さな信仰の行動がこの深い霊的祝福をもたらしたのでしょうか。そうです。主の癒しに伴ういちばん尊い祝福は、心身をまるごと癒して、私たちを神との交わりに招き入れることです。その祝福の素晴らしさは人間としての生き生きした「接触」があって初めて知りうるものです。じっさい聖書を調べると、神の民に与えられた素晴らしい霊的祝福、体験、神の啓示はほとんどの場合いわゆるこの世の祝福から始まったことがわかります。アブラハムはひとりの息子を求めて神を信じることによって信仰の父となりました。ヤコブはこの世での解放を求めることによってイスラエルの王子となりました。ダニエルは捕囚からの解放を求めるうちにイエスの到来を見ました。スロ・フェニキヤの女は苦しむ子供のために癒しを求めた結果、卓越した勝利を得ました。現在でも同じです。取るに足りないありふれたこと、たとえば時計のホイールにはめこまれている小さな宝石の心棒のようなものが、最も素晴らしい霊的経験を支えて回す軸そのものなのです。頭痛であれ一ドル札であれ、信頼して神に願うなら、満ち満ちた恵みときよさを求めて神に信頼するということを学ぶことになるかもしれません。

第五章　聖書の証言（その三）

二人の盲人（マタイ九・二七）

この短い話はいくつもの大切な原理を説明しています。

（一）　祈るだけで病気が癒されるのではありません。この二人の盲人はヤイロの家からイエスについて来て「わたしたちをあわれんでください」と叫びました。けれども、返事はありませんでした。「私は四十年間癒しを求めて祈っていますが、いっこうによくなりません」と言う人がいます。それも無理はありません。もし信仰によって祈っていたなら、そんなに長く祈り続けることはなかったはずです。

（二）　キリストの御前に出さえすれば癒されるというわけではありません。二人は家までついて行きましたが、まだ癒されませんでした。集会に行って霊的影響を受ければ、それだけでもう祝福をいただけると思い込んでいる人がいます。主の御前に出るだけでなく、助けと癒しを求めてさえいるかもしれませんが、それだけでも治りません。

（三）　この話の最後にその理由が明かされています。自分が求めているものを主が必ず与えてくださると信じない限り、こうしたことはどれも役に立ちません。「わたしにそれができると信じるか」と主は尋ねられました。続けて、私たち一人ひとりがいただく祝福の大きさを決める、偉大な信仰の法則を述べられます。「あなたがたの信仰どおり、あなたがたの身になるように」。それから主が触れると、二人は癒され、見えるようになりました。二人は輝かしい太陽の光を見られるようになりました。どんなものにも秘密があります。金庫には、それを開けるための秘密のばねや番号があります。嘆願書を政府に届けるための秘密の経路があります。自然の強力な力を制御して利用するための秘密があります。そして、天を開き、御座のあらゆる力と資源を意のままにする秘密があります。それは苦しみもだえる祈りではありません。労力のかかるものではありません。シンプルにこういうことです。「あなたがたの信仰どおり、あなたがたの身になるように」。

スロ・フェニキヤの女（マタイ一五・二一）

（一）　これもまた、光も機会もほとんどない中での信仰の例です。この女がこれまで聖書のみことばや約束を聞いたことがあったとか、霊感を受けた教師に教えられたとかというのは考えにくいことです。女は異邦の、のろわれた民族に属していて、何もかもが女に不利でした。イエスのところに来たとき、イエスまでも女に背を向けておられるように見えました。哀れに助けを求めて叫んでも、ひと言もお答えになりませんでした。弟子たちは女を帰したがっていました。それは女の願いを聞き入れて追い払ってほしいという意味でしたが、イエスのお答えは、女をあわれみを受ける権利から完全に除外していると思えるものでした。女がついにイエスの足元にまで来て懇願したとき、イエスがお答えになったことばはひどく冷淡で、追い払うようなものでした。もう一度近づけば、自分から侮辱を招きに行くようなものだと思えるほどでした。主は女を「犬」とまで呼びました。犬は東洋世界では仲間にふさわしくない汚れたものの象徴でした。それでも女の信仰はますます強くなり、ついには主の拒絶そのものから、祝福を求める論拠を引き出しました。本物の信仰は困難にくじけません。困難とは信仰を育てる栄養です。

（二）　ここから、主が私たちを取り扱い、ときには拒んでおられるように見えることの意図がわかります。その奮闘のあいだずっと、主は女を知り、愛しておられ、拒まれても引き下がらない信頼を見ておられました。ただ、その信頼が完全に現れるのを待っておられたのです。拒絶しているのではなく、信仰が試練に耐え、最後には金のように出て来ることを知っておられるがために、信仰を試しているだけなのです。主は私たちを足元で待機させ、私たちの嘆願を拒んでい

るようにさえ思えることがありますが、それは私たちの深い信仰と熱心を呼び覚ますためです。また、このときには別の目的がありました。主は女を、自我に死に、罪を自覚するところへと導いておられました。そして、ついに主の裁きを自分から受け入れ、自分をあわれな価値のない罪人、祝福に値しない者と認めたとき、女はすべてを受け取ることができました。信仰は上に昇ることであると同時に下にくだることでもあり、いのちであると同時に死でもあります。

（三） 女の信仰の素晴らしいところに、最後までしつこく願い続けた粘り強さがありますが、それだけではありません。祝福を願い求め、自分のものにするための根拠を見出すために知恵を絞りました。信仰は論理的なプロセスです。神の前で自分の言い分を論じ、根拠となるものをつねに探します。女の心ははじめ、本能的にそれとなく感じ取って、主の愛と恵みにより頼んでいるようでした。その穏やかな優しい顔立ちが彼女を拒絶するはずがない、と感じていたのでしょう。しかし、いまだ主からおことばをいただけません。ほんのひとこと、ささやき、かすかな配慮さえいただければもう十分でした。けれども、主が語られたのは、動かしがたい冷淡な排除のことばだけでした。その排除は、主がこの世に来られたことの大原則と制約に基づくものでした。その原則からすると、主が女を助けるのは筋違いであると思われました。やっと主がおことばをくださったと思ったら、永遠に扉が閉め切られたかのようでした。異邦人どころか、犬とまで言われて。「よろしくない」というのです。どこに突破口を見出せるでしょうか。不思議なものです！　これがまさしくヨルダン川を渡る橋となったのです。犬――ここに入り込む隙間がありました。そうです、犬にさえいくらかの権利があります。女はパンくずという自分の権利を求めました。女が求めたものは、主にとってパンくずに過ぎません。主はあまりに偉大なので、力と愛の大いなるみわざも、主の指からはパンのかけらのようにこぼれ落ちるのです。けれども、ああ、女にとってはなんと大きなものでしょうか！　主よ、私は受け入れます。あなたの足元に、あなたの子供たちの足元に身を置きます。子供たちの食事は求めません。ただ残り物をください。子供たちの食べる分は減りません。向こうのガリラヤでは、子供たちが今でももう飽きるほどいただいて、これ以上は要らないと断ったほどのものです。これを私は、へりくだって自分と娘のために求めます。あなたは拒むことができません。

（四） そうです、主は拒むことがおできになりませんでした。愛と驚きに満ちて、こう答えられました。「女よ、あなたの信仰は見あげたものである。あなたの願いどおりになるように」（マタイ一五・二八）。このとき、力ある御業がなされました。「あなたの願い（意志）どおりに」。ここでも、決意、確固たる意志という要素が、強い信仰と行動の本質として示されています。さかのぼること十六世紀前のペニエルで、同じ意志が、否定形の「去らせません」ではありますが、勝利をもたらしました（訳注：創世記三二・二六でのヤコブの格闘）。この二つの事例は、どちらもこの世での解放を求めたものですが、勝利する信仰を描いた一対の絵です。

悪霊につかれた子供（マタイ一七・一四）

山でキリストが変貌なさった出来事のすぐあとに、イエスはサタンの勢力と直接対決することになりました。それは悪霊つきでしたが、弟子たちには手に負えませんでした。弟子たちの失敗の原因は、不信仰でした。不信仰の原因は、弟子たちが個人的な野心から言い争いをしていたことでした。イエスが群集のところに来られたとき、不信仰になっている人々をお叱りになり、父親と子供を呼び寄せました。父親はこの難病について話し始めたとたん、激しい落胆に襲われて叫びました。「できますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」（マルコ九・二二）。けれども、主の答えはただちに父親の目を開かせました。これはキリストの力の問題ではなく、父親自身の信仰の問題だったのです。「もしできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる」（マルコ九・二三）。父親はすぐにこの状況における自分の重大な責任を認め、それを果たしました。「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」（マルコ九・二四）。この二つの言葉――主が父親に言われた言葉と、父親が主に話した言葉――は、信仰についての聖書の教えの中で最も価値あるもののひとつです。第一の言葉は、信仰にできることを教えてくれます。信仰にはどんなことでもできます。神ご自身の全能の

力と対等です。どんなことでもできる方は、神おひとりのほかにおられないからです。信仰はじっさい、神ご自身の全能を拝借して、行使します。第二の言葉は、信仰を持つことの可能性、つまり私たちがどこまで信じることができるのかを明らかにします。ところで、多くの人が自分は信じることができるだろうかと迷っているうちに一生を終えてしまいます。他のもう少し賢い人は、この父親のように、まず努力して手を伸ばし、それから自分自身を神に投げ出して、その中で支え、運んでいただきます。もしも父親が「主よ、不信仰なわたしを、お助けください」とだけ言って「主よ、信じます」と言わなかったとしたら、無駄だったでしょう。「主よ、信じます」と言ってそこで止まっていたら、同じように無駄だったでしょう。というのも、それでは彼自身の意志の力にすぎないからです。意志を発揮して、それからキリストのちからにより頼みました。これが信仰です。信仰はただキリストから来ます。事実、信仰とは私たちの内にあるキリストご自身の信仰です。しかし、私たちが自分で信仰を受け取り、しっかりと堅い手で行使しなければなりません。癒しの力は今来ますが、はじめは悪化しているように見えます。サタンが死にものぐるいで抵抗するため、闘争の中で見物人からは子供が死んだように見えました。ですから、よくあることですが、神が私たちをお癒しになり始めるとき、私たちは症状が悪化するように見え、世が私たちに私たちが自滅したと言います。けれども、死がいのちに先立たねばなりません。破滅が刷新に先立たねばなりません。恐れずに全知の神に信頼し、すべてがよくなることを信じようではありませんか。キリストは子供の手を取って起こし、悪霊は永遠に去ったのです。

ベツサイダの盲人（マルコ八・二二）

（一）　キリストが最初になさったことは、この男の手を取って町の外に連れ出すことでした。群衆から離れたところでひとり考える時間を与え、キリストと共に歩くこと、暗闇の中でキリストを信頼することを教えるためでした。私たちについても同じで、最初にキリストはご自分と二人きりになるところに連れ出します。そうして長い時間が経ってから、私たちはキリストの御顔を仰ぎ見、キリストが私たちを導いてくださったことを知るようになります。

（二）　次にキリストは、しるしとして簡素な油注ぎをし、男の目の上に御手を置いて、癒しのみわざを始められました。その結果、部分的に癒されましたが、まだ視界はぼやけていて不十分でした。この出来事によって主が教えてくださっているのは、私たちの癒しが部分的で、少しずつ段階的に進んでいくことが時々あるということです。この最初の段階から先に進めない人がたくさんいます。

（三）　三番目の段階として、完全に見えるようになりました。ひとつの理由があります。それはイエスを見ることです。「人が見えます」と男は最初言いました。そして人をただ見ているあいだは、何もはっきり見えませんでした。けれども二度目に、主が彼に「見上げ」させると、はっきり見えるようになりました。おぼろげな目でもイエスをひと目見たことで、あらゆるものがはっきりと完全に見えるようになったのです。

エルサレムの盲人（ヨハネ九章）

（一）　病気は罪によって起こるのかという問題を考えるにあたって、この出来事によって重要な限定が加えられます。キリストが弟子たちに教えたとおり、誰でも犯すような罪のほか特別に罪を犯したわけではないのに病気になることがあります。そのような苦しみが許されているのは、神が回復させることによってご自分の愛と力を現す機会とするためです。

（二）　この男の癒しにおいても、主は単純なしるしを用いました。主は油注ぎとして、つばきと泥を男の目に塗りました。医療行為として生まれつき目の見えない人を治療するためにこういうことをしたとは誰も言いますまい。これは主が触れてくださるという単純なしるしです。それから男にシロアムの池で洗うように言い、そのとおりにすると、見えるようになりました。もしかすると泥そのものに効力があったと考える人もいるかもしれませんが、シロアムの池で泥を洗い落とすまで視力が回復することはなかったという事実を付け加えておきましょ

う。池は、キリストと聖霊の型です。シロアムはシロと同じですが、「遣わされた者」という意味です。水は、御父と御子から遣わされた聖霊を意味します。

（三）癒された後の男の証言は栄光に富んでいます。男は律法学者とパリサイ人の矛盾を鋭く皮肉りました。律法学者たちは男に会いに来て、キリストをやり込める証拠を引き出そうとしました。キリストはこの癒しの行為によって安息日を破ったからです。けれども、この謙虚な農夫は律法学者たちに言いくるめられません。それどころか律法学者と行なわれた議論は切れ味がよく興味深いものでした。ついに律法学者たちは力ずくの手段に出て、男を会堂から追放しました。しかし、男は忠実な受難者です。すぐあとでイエスがまた会いに来られ、ご自分の本当の姿と栄光を現されました。男はこうして主を愛する弟子のひとりになりました。

盲人バルテマイとその連れ（ルカ一八章）

（一）バルテマイの叫びには深い洞察があります。「ダビデの子よ」。この時イエスはご自分の王座に就く権利を主張しようとしておられました。そのときイエスが呼ばれるべき称号が、まさに「ダビデの子」でした。ご自分の民がキリストの主張に盲目である一方で、みすぼらしい盲目な老人がいち早くそのことを知っていたのは、奇妙に思えます。しかし、現在でも同じです。賢い者が盲目であり、盲目な者が見えています。

（二）男には粘り強い信仰がありました。大声で叫びました。人々がしかると、ますます激しく叫びつづけました。男は叫び、衣服も脱ぎ捨てました。まるで私たちに、邪魔なものはすべて取り除かなければならないと教えてくれているようです。男の望みはただひとつ。熱烈な信仰が次の言葉に要約されています。「主よ、目が見えるようになることです」。強い望みがなければ強い信仰は生まれません。漫然とした祈りには神に届く推進力がありません。

（三）男の癒しは単純で、栄光に富んだものでした。立ち止まり、呼びかけ、質問すると、熱烈な返事がありました。みことばを話すと、みわざは終わりました。男は美しい風景と、自分を取り囲む人々と、主の御顔を見ました。それからすぐに大声で神を賛美し、イエスについていきました。

いちじくの木を枯らす（マルコ一一・二〇）

これはキリストが行なわれた唯一の裁きの奇跡ですが、この話から信仰の励ましや慰めを得るのは一見難しそうに思われます。けれども、キリストはこれを、信仰についての最も崇高な教えを伝える機会となさいました。じっさい、これは最も深遠で優しい恵みの働きを指し示す象徴的な出来事です。聖書の教える最も偉大な原理は、破滅を通じた救い、死を通じたいのちです。世のいのちとは、サタンと罪と死を滅ぼすことです。魂の聖化とは自然のいのちを枯らすことです。肉体の癒しとは悪い病気の根に死の一撃を加えることです。神の火と神の聖性を必要とするものがあるのです。私たちは、あわれみや優しさ以上のものを求める時があります。私たちのいのちときよさを押しつぶしている汚れたものを、鋭い剣で完全に断ち切っていただきたいと、霊のすべてが切に願うのです。ああ、そのようなとき、焼きつくす生ける神の聖性は、なんと栄光に富んでいることでしょうか。これが枯れたいちじくの木の意味です。「このいちじくにあったようなことが、できる」と主は弟子たちに仰せになりました。そうです、私たちは信仰の力あることばを話すことができます。すると見よ、肉が枯れて死にます。私たちがまた話すと、見よ、病気の毒の木が枯れ、根から枯れ上がります。葉と枝がしばらくの間その形と色を保っているとしても、根に死の一撃が加えられている以上、本当の仕事は終わったことを私たちは知っています。秘訣はこうです。「神の信仰を持ちなさい」。天が地よりも高いように、欄外の読みは本文よりもはるかに高いものです。神の信仰と神を信じる信仰との違いは、キリストの信仰と、悪霊につかれた子供に手を焼いていた弟子たちの信仰との違いと同じです。イエスがはっきり教えようとしておられるのは、ご自分の信仰と同じほどの信仰でなければこうしたことはできないということです。そして私たちはその信仰を持つことができますし、受け取らなければなりません。

美しの門の足のなえた男（使徒三・一〇）

キリストの昇天後、聖霊によるいちばん初めの奇跡は、それを行なう力の源はただイエスの御名だけであることを、きわめて強く認めています。そして、そこに人間の力や栄光が関わることを、はっきりと否定しています。使徒たちがこの男に語りかけた第一声がその御名でした。それから人々が群がっても、支配者が裁判の場に呼び出しても、使徒たちは自分たちがこの奇跡に関わっていることを何度も否定しました。自分たちはただ、目の前の人々が十字架につけた方の力ある御名と力を代わりに表しただけだ、というのです。今は主がその場におられるのではありません。地上を去られた主を、主に仕える者たちと主の御名とが代わりに表しています。またここでも、奇跡がそれによって行なわれ、受け取られたところの信仰は、いかなる意味でも使徒たち自身の意志の力でも、この男の意志の力でもない、と明確に否定されています。使徒たちはきっぱりと言いました。「そうです、イエスによる信仰が、彼をあなたがた一同の前で、このとおり完全にいやしたのである」。ですから、信仰も力も、ひとえに私たちの内で働き、信じておられるイエスご自身なのです。また、奇跡そのものはイエスを証するものとしての価値しかありません。主のことばを広く効果的に宣べ伝える機会とするためです。使徒たちは奇跡をもてはやして立ち止まったりしません。奇跡に注意を奪われることもありません。そうではなく、さらに偉大な働きである福音宣教を粛々と進めます。病人の癒しは福音という大きな働き全体に付随するものにすぎません。いつでも福音と結びついていなければなりません。けれども、足のなえた男は若き教会にとって否定しようのない福音の論拠となり、教会の壁の支えとなりました。「足のなえていた者がペテロとヨハネのそばに立っているのを見ては、まったく返す言葉がなかった」。見事なものです。現在でもそのような証が必要です。世も、不信者も、悪魔も反論できません。みすぼらしい女性が来て、自分をよく知る人々の前で、いかに神が病気を癒してくださったかを堂々と話すと、最もプライドの高い不信者が恥じ入るといったことを、私たちはたびたび見てきました。

ルダのアイネヤ（使徒九・三四）

この奇跡はペテロの手によるもので、先の例と同じ特徴があります。まず、ペテロは主の力と御名だけを見つめさせるよう細心の注意を払いました。「アイネヤよ、イエス・キリストがあなたをいやしてくださるのだ」。ペテロ自身は視界の外に出ていました。そうでなければなりません。また、奇跡の効果は人が神に向かうことです。人々を驚かせるのではなく、悔い改めさせることが目的です。ルダとサロンに住む人たちは、みなそれを見て、主に帰依しました。十全な福音による超自然的な力と権威がもたらす本当の効果というものはいつでも、霊的な結果、つまり人の救いです。このような力あるしるしと不思議を通じて、ヨエルが預言したように、終わりの日に御霊があふれんばかりに世に注がれ、主の再臨の前に人々の覚醒が起こります。

ルステラでの足のなえた男（使徒一四・一〇）

これは聖書にある癒しの事例の中で最も示唆に富むもののひとつです。

（一）群衆は異邦人ばかりでした。彼らには固定観念や先入観がありませんでした。

（二）パウロは「福音」を宣べ伝えました。疑いなくイエスの癒しと贖いのみわざを伝えたはずです。

（三）パウロが宣べ伝えると、群衆に混じっていた無力なひとりの人に信仰といのちの光が注がれ、顔が照りかがやくのがわかりました。私たちはこういうことを人々の中に見ることができます。神は霊的な心に、見分ける直感を与えてくださっています。

（四）はっきり読み取れるとおり、パウロは慎重でした。この男が「いやされるほどの信仰」を持っているとわかるまで、次に進みませんでした。触れる手を持たざる者をキリストのもとに押し出しても仕方ありません。男を癒すのはパウロの信仰ではなく、本人の信仰なのですから。

（五）しかし、信仰を行動にするためには援助が必要でした。「自分の足で立ちなさい」とパウロは大声で言いました。男が起き上がり、ぎこちなくためらい

がちに立とうとすると、パウロは「**まっすぐに**」と言いました。原語にはこの意味が込められているのです（ヤング訳参照）。ためらいや半信半疑があってはなりません。このような大胆な一歩は、思い切ってやり通さなければなりません。見よ！　男は勇気あることばに応え、今や立ち上がっただけでなく、飛び跳ねて歩き出します。行いによって信仰が全うされました。

（六）　奇跡とパウロの謙遜な霊によってどんな波紋が起きたかについては、何も付け加える必要がありません。神がたたえられ、パウロは神に栄光を返しました。

パウロ自身の癒しの経験（使徒一四・一九、第二コリント一章、四章）

まもなく偉大な使徒に自身の信仰を証明する機会が巡ってきました。最初はパウロを崇めていた人々が、ユダヤ人の煽動によって暴徒となり、パウロを石打ちにし、町の外に引きずり出しました。パウロは死んだように取り残され、ほんの数人の弟子が取り囲むばかりでした。けれども、パウロは死んだのでしょうか。いいえ。「弟子たちがパウロを取り囲んでいる間に、彼は起きあがって町にはいって行った。そして翌日には、バルナバと一緒にデルベにむかって出かけた。その町で福音を伝え」（使徒一四・二〇～二一）ました。これ以上に簡潔かつ高潔なものがあるでしょうか。饒舌に説明するでもなく、驚きの声すらあげず、痛み、弱さ、死そのものを淡々と無視し、主の強さによって使徒の働きを続行しました。コリント人への第二の手紙の第四章で、パウロは強さの秘訣を語っています。「わたしたち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されているのである」。これがルステラで起きたことです。「それはイエスのいのちが、わたしたちの死ぬべき肉体に現れるためである」（第二コリント四・一一）。これこそが、ルステラでの不可思議な回復の秘密でした。後の節でこう繰り返しています。「だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく」（第二コリント四・一六）。コリント人への第二の手紙の第一章で、また別の癒しの例をあげています。パウロはアジヤで非常な苦しみにあい、極度に、耐えられないほど圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました。じっさい、自分の状況を見ても、感覚的にも、死ぬしかないような状態でした。けれども、その闇の時にあってさえ、パウロはひとつの自信、キリストのいのち、「死人をよみがえらせてくださる神」を持っていました。この信頼は無駄になりませんでした。神は死から救い出してくださいました。その後も絶えず使徒たちを救い出してくださいました。最後まで救い出してくださると、パウロは確信していました。それからコリントの人たちが祈ってくれたことについて、助けと励ましになったと簡単に感謝を付け加えています。その祈りによって、パウロのためにさらに多くの人が感謝をささげることになり、神の恵みと栄光が現されたのです。

私たちの救い主が経験なさった神にある肉体のいのち（マタイ四章）

イエスご自身もまた、肉体の生を自然の強さと支えによって生きるのではなく、神のいのちによって生きるという偉大な教訓を学び、残さねばなりませんでした。これこそが、荒野での最初の誘惑の意味するところでした。それはイエスの肉体に直接向けられました。断食によって弱り、ふらふらになっているところに、誘惑者が近寄り、体を養い力をつけるいつもの手段に頼って、地上的なパンを作ればよいとささやきました。主はこう答えられました。試練と断食を行った理由がまさしく、人のいのちは地上的なパンがなくとも神ご自身のいのちとみことばによって養われうることを示すためであったと。そこで語られたことばは、申命記からの引用であることを思い出しますと、深い意義があります。はじめにいにしえの神の民に語られ、主が民に仰せになったとおり、同じ教訓を教えようとされたのでした。「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」（マタイ四・四）。ですから、神の力の特別な証拠としてこのように生きえたことは、人の子の特権ではなく、私たち人間のための教訓です。私たちはキリストと共に学ばなければなりません。魂のためと同様、肉体のためのいのちを受け取ることを。パンを除外するという意味ではなく、

「パン**だけ**で生きるものではなく」神のことばによって生きることを。これがまさに私たちの救い主が言わんとしたことです。二年後、カペナウムの会堂でこう言われました。「生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう」（ヨハネ六・五七）。私たちの主は肉体についての教訓を学びました。悪魔のパンを拒絶し、肉体において私たちのために試練を克服しました。次に続く二つの誘惑は、魂と霊に関係があります。同じようにそれも克服しました。このように主は私たちのために信仰の導き手であり完成者となってくださいました。以上が、その証人たちの一部です。「こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか」（ヘブル一二・一～二）。

第六章　個人的な証

この六年間、主が私自身の人生にも家族にもまた私の働きの中でも癒しを経験させてくださったことに感謝していますが、この小品を終えるにあたって個人的な証を手短にお話しするのは場違いではないでしょう。

私が神癒について知っている全知識とここまでに書いてきた内容はすべて、私自身の人生を通じて学んだことで、主ご自身が教えてくださらなければわからないことでした。この主題について、私は主のみことば以外のものを読むことを許されませんでした。ほかのものを読んだのは、自分で主を信頼することを学び、それどころかこの小品の多くを書き上げてから、ずっと後のことです。

私は二十年間以上もいろいろな肉体的苦痛や病気に苦しんできました。十四歳で激しい勉学の生活を始めた私は、大学進学の準備をしているときに神経衰弱を起こし、すっかり倒れてしまいました。何ヶ月ものあいだ、医者には本を見ることさえ禁止されました。この時には死の寸前まで行き、永遠の淵に立って、私はついに自分を神に捧げました。大学を卒業してから、二十一歳で一念発起して大きな町の教会の牧師になりました。この時も仕事に没頭しすぎて、一年たらずで心臓病で倒れました。何ヶ月も休養のために離れなければならず、ようやく戻ってきたときには、当時の私には死ぬために帰ってきたように思えました。けれども、少しずつ回復し持ち直してきました。その後数年間は、薬を常に持ち歩いて予防を心がけながら仕事をしました。いつもポケットにアンモニアのびんを入れていました。びんを持たなければ不安で発作を起こしたにちがいありません。なだらかな坂道や階段を登るときにも窒息しそうなつらい息切れをたびたび起こしましたが、最後の手段にびんがあると考えることで落ち着くのでした。ヨーロッパにいた頃、スイスのリギ山の頂上まで思い切って鉄道で登ったときのことをよく覚えています。フローレンス市内の高い鐘塔に登ろうとしたのですが、途中で急に発作が起きて窒息しそうになりました。二度とこういう危険な場所には行かないと心に決めました。神がご存知ですが、働き始めた頃の私には何百回とこういうことがありました。壇上で説教していると礼拝の最中に倒れそうになるし、墓地で奉仕をしていると開いた墓に落ちそうになったものです。

それから数年後、さらに二回、健康を崩して倒れました。どちらも長く続きました。この恐ろしい時期には、いのちの最後の水滴が流れ出ていくように思えたことが何度もありました。か細い糸一本が、生命の綱が永遠に切れてしまうのをかろうじて引き留めているかのようでした。

たいていは懸命に働いて仕事をやり通していたので、周りからは真面目で立派な働き者と思われていましたが、いつも「デリケートな人」と気にかけてもらっていて、会う人ごとに同情されていたので、すっかり嫌気がさしていました。私が訪問をおろそかにしても、善良な信徒たちは、私が「体が強くない」からと、何度も代わりに言い訳をしてくれました。紆余曲折のすえに、主を私の癒し主として受け入れたときのことを覚えています。いつもそんなふうに同情されるのに疲れ切っていた私は、この体を治してくださいと主にお願いしました。私に関わる人たちがもう二度と私をあわれまずに済むように、そればかりか、神の強さと支えによって、私が彼らにとって絶えず驚きの的となるようにと祈りました。主はこの祈りを聞いてくださったと思います。周りの人たちはその後六、七年にわたって現在まで、私が主の御名によって働くことが許されていることにしばしば驚いているからです。

それまでは安息日礼拝が終わると水曜日までは疲労困憊で動けず、木曜日ごろから次回の礼拝の用意をし始めるのが普通でした。神に感謝します。癒されてからの三年間、私は千回以上説教をし、時には週に二十回以上集会を開くこともありましたが、一度も疲労困憊した記憶がありません。

キリストを私の癒し主として受け入れるより数ヶ月前のことですが、ニューヨークの著名な医師が私の健康を診断してくれました。医師によると、私は体質的に弱く、余命数ヶ月しか残されていないとのことでした。いのちと働きを保つ

ために、ただちに処置を講ずるよう求められました。その夏、私はサラトガ・スプリングズに行きました。そこである安息日の午後に、ふらふらとインディアンキャンプ場におもむくと、そこで宣教集会が開かれていて、黒人霊歌の合唱隊が歌を導いていました。そのときの私は深く落胆していて、人生が真っ暗で枯れ果ててしまったように感じられました。歩いていると突然、コーラスが耳に飛び込んできました。

私のイエスは主の主
誰もこの方のような御業はできない

コーラスは何度も何度も繰り返されました。低音と高音が調和していて、天に届きそうな歌声でした。

誰もこの方のような御業はできない
誰もこの方のような御業はできない

それは魔法のように私をとらえました。心が釘付けになりました。天から声が聞こえているようでした。その声が私のすべてを捉えました。私はイエスを主の主として、私のために御業を行なってくださる方として受け入れました。それがどういう意味なのか、まだよくわかっていませんでしたが、暗闇の中でキリストを必死につかみました。その上品とは言えない流行遅れの集会から出てきたとき、ほかのことは何も覚えていませんでした。ただ、不思議なことに、それ以来ずっと私の心は引き上げられたのです。

数週間後、家族を連れてメイン州のオールドオーチャードビーチに行きました。おもな目的は、あらゆる海辺の中でもとびきり美しいそのビーチの、素晴らしい空気を満喫することでした。滞在中は海岸のすぐそばで過ごし、ときたまキャンプ場の集会に顔を出しましたが、集会に加わったのはほんの一度か二度だけでした。そのときまで、神癒の真理や体験に本当の意味で自分をゆだねたことはありませんでした。

とはいえ何年も関心だけは持ち続けていました。その数年前、私は主に献身し、自分の内住の義としてこの方を受け入れました。そのころ、私が牧会する信徒のあいだでめざましい癒しが起きて、深く印象づけられました。呼ばれて訪問したお宅に、医者たちにみな見放された、死にかけている人がいました。何日も話さず食べずの状態だそうでした。麻痺と脳の軟化がきわめて重くなった症例でした。のちの彼の回復はあまりにも驚くべきものと見なされたため、医学の顕著なケースのひとつとして医療雑誌に掲載されました。

彼の母親は熱心なクリスチャンでした。彼自身も幼少の時に回心していたのですが、この何年ものあいだ俳優をしていて、主から離れてしまっているのではないかと母親は恐れていました。私は祈ってくれるよう母親にお願いされました。そこで祈ると、こう祈るよう導かれました。病人の癒しではなく、彼が救われていることを母親に知らせられるだけのあいだ、彼が意識を取り戻しますように、と。私はひざまずいていた姿勢から立ち上がり、去ろうとしました。私たちがあまりにしばしばそうするように、早くも祈りを忘却の彼方に置こうとしていたのです。ちょうどそこへ数人の信徒が訪ねてきたので、信徒たちを母親に紹介するために数分引き留められました。

ちょうどそのときです。何の気なしにベッドに近づくと、若者が目を開いて話し始めるではありませんか。私は驚きを隠せませんでした。老いた母親は私よりも驚いていました。さらに尋ねてみると、彼がイエスに単純な信頼を持っていることが歴然とわかりました。恥ずかしいことに、私たちはみな驚きと喜びに圧倒されてしまいました。その時から彼は急速に回復し、何年も生存しました。のちに彼と会う機会がありましたが、あの癒しは神の力の奇跡だと思っている、と彼は言っていました。この事件の印象は心をとらえて離れませんでした。それからすぐに、私は主を自分の癒し主として受け入れてみることにしました。しばらく私が主に信頼しているあいだは、主は私を不思議な方法で保ってくださいました。が、時間が経つと、何の教えも受けておらず、敬虔なクリスチャン医師にそれは思い上がりだと忠告されたので、私はただ神おひとりに信頼するという単純な立場を放棄してしまい、何年もふらふらして自分の立ち位置がわからなくなりました。けれども、ときおり個々の癒しの事例を耳にすると、それを疑ったり、神がときにはそのように癒されることを疑問視したりすることは決してありませんでした。とはいえ自分自身に関しては、この真理は本当の意味で実際的な力も効力も持ちませんでした。といいますのも、必要が生じたときに自分を主にゆだ

ねてよいという明確な根拠が自分にあるとは、どうしても感じられなかったからです。

しかし、先ほどお話しした夏に戻りますが、キリストのことばに単純に信頼することによって癒されたという証を大勢から聞きました。救いのときと同じように、体の癒しに関してもそうだという証でした。それが私を聖書に向かわせました。じっさいのところはどうなのかを自分で確かめようと決心しました。あのとき人間に向かわなくてよかったと思います。

主の足元で、ひとりで、聖書を開き、人の助けや導きなしで探求していくうちに、ついに、神癒が罪と苦しみの世のためのキリストの栄光の福音の一部であり、キリストのことばを信じ受け入れるすべての人のために、祝福された十字架によって買い取られたものであることを確信しました。それで十分でした。これを信じておきながら、自分のために受け取ることを拒むことはできませんでした。神のことばの中にある真理を机上の空論のままでとどめておくことも、個人的に自分で証明していないことを他人に教えることも、私にはとてもできないと感じたからです。

ある金曜日の午後三時のことです。ひとりで静かな松林の中に分け入り、その場所をはっきりと覚えているのですが、そこで右手を天に向かって上げ、裁きの日を前にして、まるで目の前に神を見て顔と顔を合わせているかのように、次の三つの重大な永遠の誓約を神に捧げました。

一、かの日にあなたにお会いする者として、この真理をあなたのことばの一部分として、またキリストの福音の一部分として厳粛に受け入れます。神の助けによって、かの場所であなたに見えるまで私は決してこれを疑いません。

二、かの日にあなたにお会いする者として、私は主イエスを自分の肉体のいのちとして、私の生涯の仕事が完了するまでの肉体のあらゆる必要のために受け入れます。神の助けによって、私は決して疑いません。主がこの瞬間から確かに私のいのちと力となってくださることを。そして主の祝福された来臨の時まで、また私に関する主のみこころが完全になされるまで、あらゆる状況のもとで私を保っていてくださることを。

三、かの日にあなたにお会いする者として、私はこの祝福を神の栄光のために用い、人のために用いることに厳粛に同意いたします。今後、神が私を召し出し、人が私を必要とするどんな方法ででも、それについて話し、それに関する奉仕をすることに同意いたします。

私は立ち上がりました。ほんの数分のことでしたが、何かがなされたことを私は知っていました。魂のすみずみに至るまで神の臨在を感じていました。肉体が良くなった感じがしたかどうかはわかりません。気にもしませんでしたし、感じたいとも思いませんでした。ただ単純に信じること、そしてこれからは肉体に関することが神の御手の中にあると知ることが、あまりにも栄光に満ちていたのです。

その後、信仰のテストがきました。その場所を立ち去る直前に、最初の試みがありました。こういうささやき声が聞こえました。「今あなたは神を癒し主として受け入れると決めたのだから、カリス博士のコテージを訪ねて行って、一緒に祈ってもらってはどうか」。私は何気なしにそれを聞いていて、気に留めていませんでした。次の瞬間、頭が強く打たれたように感じました。あまりに突然のことで数秒間頭の中が真っ白になりました。私はよろめき、叫びました。「主よ、私は何をしてしまったのでしょうか」。何か大きな危険の中にいるような気がしました。その瞬間、ある思いがすばやく頭に入ってきました。「誓約をする前ならそれもよかっただろう。だが、お前はたった今この問題に永遠の決着をつけたのだ。それがなされたことを決して疑わないと神に告げたではないか」。

それは稲妻のようにひらめきました。その瞬間、私は信仰の意味を悟りました。そして、神との約束を一歩も譲らず、寸分たがわず守り通すことが、どれほど厳粛で恐ろしいことであるかを悟りました。頭を打たれたようなあのときの衝撃を、私はたびたび神に感謝してきました。神との間で何かが決着したなら、それは決してくつがえしてはならないということを理解しました。いったんなされたなら、それを取り消したり、やり直したりしてはなりません。そうすることは、すでになされた委ねが最終のものであることを疑うことになるからです。

のちに神は私を信仰の働きへと召してくださいましたが、その初めのころ、私を助けたのは神の臨在や約束がもたらす喜びや恍惚だけではありませんでした。

神を疑うことへの聖なる恐れも、それと同じくらい私を助けたと思います。聖書の中で、次の短いみことばがしばしば生きた火のように輝いていました。「もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」（ヘブル一〇・三八）。敵が望んでいたのは、たった今済ませた取り決めが確かで完全なものであることに、わずかでも疑いを差し込むことでした。神はあわれみによって、私をそこから引き留めてくださいました。

翌日、私はニューハンプシャーの山地へ向かいました。次のテストは、その次の安息日に来ました。癒しを自分のものとして受け取ってから、ちょうど二日後のことです。私は会衆派の教会で説教を頼まれました。聖霊が特別な証をするよう私に迫っておられるのを感じました。けれども私は、自分で選んだ立派な説教をしようとしました。聖霊についての説教で、それまでたびたび祝福されてきたものでした。しかし、それがその時のための聖霊のことばでなかったことは確かです。聖霊は、ご自分が私に示してこられたことを人々に話してほしかったのです。けれども私は型どおりに、体裁よくふるまおうとして、ひどい目にあいました。あごは鉛のかたまりのように重く、唇はほとんど動きませんでした。私はできるだけ早く説教を切り上げ、隣の野原に逃げ込みました。そこで主の前にひれ伏し、この重苦しさは何を意味するのかを教えてください、そして私を赦してください、と願いました。主はこの上なく恵み深く、そのとおりにしてくださいました。そして、主のために証をして主の栄光を現す機会を、もう一度与えてくださいました。その夜、泊まっていたホテルで集会があり、私はふたたび話すことを許されました。今度は、神がしてくださったことをはっきりと話しました。多くを語ったわけではありません。たどたどしいながらも忠実であろうとしました。最近、主イエスとその祝福された福音を、からだの癒し主として、より深く豊かに見るようになったこと。主を自分の癒し主として受け入れたこと。主が真実で、すべてに足りる方であると知っていること。それを人々に話しました。神が私に求められたのは、自分の感覚や体験の証ではなく、イエスとその真実さについての証でした。主はご自分に信頼するすべての人に、その祝福を余すところなく体験する前に証をするよう求めておられると確信しています。もし癒されたと感じるまで待っていたら、私は癒しを失っていたと思います。

それ以来、まさにこの点でつまずく人を何百人も見てきました。神は私を豊かに祝福してくださる前に、まず私をご自身とその癒しの契約とに捧げさせられたのです。ある親しい牧師の兄弟がいます。今では福音と神癒の福音のために大いに用いられている人です。彼はからだに神の力のすばらしい現れを受けたのに、自分の教会に帰ってもそのことを何も話さず、それが続くかどうか様子を見ていました。数週間すると、前よりも悪くなってしまいました。次に会ったとき、彼はこれ以上ないほど沈んだ顔をしていました。私が彼の誤りを指摘すると、彼はたちまちすべてを悟りました。家に帰ると、神がしてくださったことについて神に栄光を帰しました。まもなく彼の教会は恵みと癒しの祝福された働きの中心となり、その働きは遠く広く及びました。彼自身も、イエスの満ちあふれる豊かさを喜んでいました。

あの安息日の夜の証は、ほかの誰よりも私自身のためになったと確信しています。もしあの証をしないでいたら、私は今こうして『神癒の福音』を書いてはいなかったと思います。さて、その翌日、三つ目のテストが来ました。

近くに標高九百メートルほどの山があり、私はそこに登る小さな一行に加わらないかと誘われました。私はすぐにしりごみしました。私はいつも高い所への恐怖につきまとわれてきました。スイスとフローレンスで恐れおののき、二度とこんなことはするまいと決心したことも覚えていました。ふつうの階段でさえ私を疲れさせ、弱い心臓を苦しめることも知っていました。

そのとき、厳粛な、心を探るような思いがわいてきました。「もしお前が恐れて行かないとしたら、それは神がお前を癒してくださったと信じていないからだ。神を自分の力として受け入れたのなら、神が召されることを何であれ恐れる必要があるだろうか」。

私はそれが神の思いだと感じました。この場合、私の恐れは不信仰そのものだと感じました。そこで私は、神の力によって行きますと神に申し上げました。

ここでひとこと言っておきたいのですが、自分がどれほど強いかを見せるためだけに、あるいは本当の必要もないのに何かをすべきだと言うつもりはありません。神の子供たちが、頼まれたからというだけで、むやみに山に登ったり何マイルも歩いたりすることを神が望んでおられるとは思いません。けれどもこの場

合、私はいつか一歩踏み出して、勝利を自分のものとして受け取る必要がありました。そして、これが神の定めた時と方法だったのです。どの人の経験にも、こういう場面はあるものです。神は一人ひとりを召し、それぞれに示してくださいます。そして私たちが恐れからしりごみしているときには、その恐れに打ち勝つためにまさに必要なことへと、神は私たちを召されることが多いのです。

こうして私はその山に登りました。初めは、最後の息まで使い果たしてしまいそうに思えました。昔の弱さも、肉体の恐れも、すべて感じました。自分の中には、以前より少しも多くの力がないこともわかりました。けれども、私の弱さと苦しみの向こう側に、もうひとつの臨在があることに気づきました。神の力が私に差し伸べられていました。私がそれを望み、受け取り、自分のものとし、しっかり握り、その中にとどまり続けるなら、その力は私のものでした。一方からは死の重みがのしかかってくるようでした。もう一方には無限のいのちがありました。私がしりごみするか進むか、恐れるか信頼するかによって、一方に押しつぶされ、あるいはもう一方に引き上げられました。私はその二つの間を歩いているようで、私が触れたほうが私をとらえました。狼と羊飼いが両側を歩いていましたが、祝福された羊飼いは、私が離れていくことを許されませんでした。私はさらに、さらに、さらに羊飼いの胸に近く身を寄せました。一歩ごとに力が増していくようでした。そして山頂に着いたとき、私は天の門にいるかのようでした。弱さと恐れの世界は、私の足もとに横たわっていました。神に感謝します。その時から、この胸には新しい心臓が宿っています。霊的な意味だけでなく、文字どおりの意味でもそうなのです。そしてキリストがその栄光あるいのちとなっておられます。

数週間後、私はこの町での働きに戻りました。神に深く感謝しつつ、何百人もの人を証人として、偽りなくこう言うことができます。この七年近く、夏の暑さの中でも冬の寒さの中でも、愛する主のために働くことを許されてきました。途中で中断することもなく、長い休養をとることも一度もなく、しかも慰めと力と喜びは増すばかりでした。生きることには張り合いがあり、働くことには爽快さがありました。子供時代のいちばん元気な日々にも知らなかったものです。主は、このテストをたいへん厳しいものとすることを許されました。癒されてから数ヶ月後、主は私を特別な牧会と伝道と文書の働きに召されました。それ以来、私の時間と力はこの働きに注がれてきましたが、正直に言って、それまでの人生のどの時期よりも四倍もの労力を要するものでした。この期間のほとんどにわたって、教会での伝道と牧会の働きがあり、毎週いくつもの説教をしてきました。それに加えて、次のような働きがありました。月刊誌の編集の全責任と、その執筆の多く。いくつかのトラクトと書籍の準備。出版事業全体の監督と、多くの通信への責任。ベラカ・ホームの管理。そこでは毎週多くの訪問者や相談者を迎え、いくつかの集会も開きます。宣教師訓練学校では、年に七ヶ月のあいだ毎日一つか二つの講義をしますが、これには最も入念で注意深い思索を要します。そして、各地での神の愛する子供たちとの多くの集会や大会。これらの働きの多くは夜にしなければなりませんでした。二十四時間のうち十二時間から十六時間、時には十八時間も働く、長く続く奮闘によってです。それでも私は、キリストの誉れと栄光のために、こう証を記しておきたいのです。それは絶えざる喜びであり、重荷や疲れを感じることはめったにありませんでした。以前のはるかに軽い仕事と比べても、あらゆる点でずっと、ずっと楽でした。けれども私は、自分の生まれつきの力を使っているのではないことを、いつも意識していました。肉体的には、以前より少しでも頑丈になったとは思いません。今している仕事を、自分の体力だけで一週間でもやろうとはとても思えません。息をするたびに、私は直接に超自然的な源から活力を引き出しているのだと強く意識しています。そしてその活力は、働きの求めと必要に歩調を合わせて与えられるのです。ですから、二倍働いた日の終わりには、しばしば二倍の活力を感じます。もう一度最初からやり直したい気分になり、それどころか、眠りさえもがこの喜ばしい奉仕の特権をそっと止めてしまうことを惜しく思うほどです。しかも、これは一時の興奮の発作で、あとで反動が来るというものではありません。翌日も同じようにすがすがしく迎えられるからです。こうしたことが七年近く続いてきました。それも、すり減った体と二十年にわたる苦しみのすぐあとにです。私はこのことに気づきました。今の私の仕事は以前より楽で、私の生命力をあまり消耗しないようです。今は働きの中で自分のいのちを使い果たしているのではなく、別の源から与えられる有り余る活力によって働いているように思えます。それはま

さに「キリストのいのちが私の死ぬべき肉体に現れる」ことにほかならないと信じ、確信しています。主を私の力として受け入れてから、一、二度、あまりにも不思議なほど元気だったので、神が与えてくださった力そのものを喜び、それに頼り始めたことがあったと思います。するとたちまち、その力が尽きかけているのを感じました。そして主はすぐに、ご自身を私の絶えざる力として仰ぐように、すでに与えてくださった力にさえ頼らないように、私を強いられました。ほかにも多くの愛する友人たちが、この教訓を学ばざるをえなくなり、すっかり学ぶまで苦しんだのを見てきました。それは、霊的にだけでなく肉体的にも、絶えずキリストに頼る生活です。とりわけ覚えているのはある夜のことです。遠くの町から遅い時刻に帰ると、朝までに片づけなければならないらしい、何時間もかかる夜の仕事が机の上にありました。その時の私には、肉体的にそれをする力はないと感じられました。それを見ると、心臓も頭も震えるようでした。けれども私は神を仰ぎ、それが神の働きであり、それを今するのが神のみこころであると、すっかり確信しました。ペンを取ると、数時間で喜びのうちに終わりました。終わってみると、疲れ果てているどころか、朝起きたときよりもすがすがしく、落ち着いた神経で横になり、子供のように安らかに眠ることができました。

愛する主イエスのいのちが私のからだに分け与えられているのでなければ、これを説明するすべを私は知りません。私はこのような栄誉と特権にまったくふさわしくない者です。けれども、主は大いなるへりくだりによって、私たちのからだとご自身を結び合わせることを喜んでくださると信じています。そして、完全に人間であり実在する主のからだが、何らかの方法でその生命の要素を私たちの肉体の生命と分かち合い、主の生きた心臓と内に住まわれる御霊によって私たちを生かしてくださるのだと確信しています。サムソンの肉体の力が「主の霊」によるものであったこと、またパウロが、イエスのために絶えず死に渡されていながら、キリストのいのちそのものが自分のからだに現れていると言っていることから、私は多くを学んできました。「からだは……主のためであり、主はからだのためである」こと、「わたしたちのからだはキリストの肢体である」こと、そして「わたしたちは、キリストのからだの肢体」であり、その肉と骨の一部であることを、私は聖書に見いだします。議論を挑むつもりはありません。ただ、素朴でささやかな証をしているのです。私にとってそれはまったく現実のことであり、まったく不思議なことです。「主である」と私は知っています。同じ祝福された体験に入った兄弟たちを、私は大勢知っています。私はただ、この体験を捧げて、ますます主のために用いたいと願っています。それがどれほど聖なる、尊い預かりものであるかを感じています。そして、疲れ果て、打ちひしがれ、重荷を負いすぎた兄弟たちが、そのこの上ない喜びと、すべてに足りる力をただ味わうことができたらと切に願っています。

牧師である兄弟たちのために付け加えたいのですが、私はからだと同じように、知性と頭脳のためにも神の助けを見いだしました。書くことも話すことも多いので、私は自分のペンと舌をキリストに捧げ、キリストが所有して用いてくださるようにしました。するとキリストは私をよく助けてくださり、文筆の働きが苦労になったことは一度もありません。以前よりもはるかに速く考え、はるかに多くの仕事を、ずっと楽に成し遂げられるようにしてくださいました。それはまったく素朴でつつましい働きです。けれども、それがどんなものであれ、すべてキリストによるものです。そして、ただキリストのためであることを願っています。また、その素朴さにもかかわらず、それ以前の疲れ果てた年月の入念な準備と苦労のすべてよりも、主の子供たちを助け、主の御名をあがめるために用いられてきたと信じています。すべての誉れが主にありますように。

第七章　働きの証

この町で神癒に関わる働きがどのように始まったのか、また私が知っている癒しの事例のいくつかについて、少し付け加えたいと思います。

前の章ですでにお話ししたように、私が自分の癒しに関して主に立てた誓約の一つは、この真理とその体験を、主が求め導かれるとおりに、人々のために用いるということでした。

それは私にとって小さなことではありませんでした。私には保守的な世間体や、教会での評判へのこだわりがたくさんあり、それに死ななければならなかったからです。この事柄にどこまでも忠実であろうとすれば、どれほどの犠牲を払うことになるかは直感的にわかっていました。同時に、ほかの誰かと一緒に癒しを求めて祈らなければならないと考えるだけで、言いようもなく尻込みしました。実現しないかもしれないことを自分のものとして求めて、神の御名をはずかしめることになるのを非常に恐れていたのです。この事柄で自分が直接奉仕しなくても済むようにと、半ば願っていました。神がすでにこの働きのためにほかの兄弟たちを起こしておられることを心から喜び、その人たちの手を喜んで強めようと思っていました。

この真理について私がこの町で初めて公に証をしたのは、私の教会の人々への説教の中でした。当時の私の教会はニューヨークの長老派教会でしたが、反対はほとんど、あるいはまったく起きませんでした。数週間後、私はフルトン街祈祷会の記念集会で話すよう頼まれました。ガーフィールド大統領の葬儀の日でした。主は私が率直に話すよう導かれ、私は、主イエスの御名によって直接に病人の癒しを祈るという、聖書の正しい祈りの方法に触れました。話し終えたとき、私に応えてくれたのはひとりだけでした。メソジスト監督教会の年老いた立派な長老司で、この方はその後天に召されました。彼は私に心から感謝し、あなたの言ったことを一言残らず信じますと言ってくれました。

まもなく、私の家庭にテストが来ました。幼い娘が突然ジフテリアにかかり、重い病状になりました。娘の母親である妻は、当時は私のようにはまったく信じておらず、医者を呼ぶよう強く求めました。私がただ娘を神のもとに連れて行き、主イエスの御名によって癒しを自分のものとして求めたので、妻はひどく心を痛めました。その夜、幼い病人は、のどが雪のように白くなり、ひどい熱に苦しみながら、私のそばに横たわっていました。付き添っていたのは私ひとりでした。もし翌日まで病気が続けば、家庭に危機が訪れ、私が責任を問われることはわかっていました。愛する主もそれをご存知でした。私は震える手で娘の額に油を塗りました。私が油を塗ったのは、これが一人目か二人目でした。そしてイエスの御名の力を自分のものとして求めました。真夜中ごろ、私の心は深い重荷を負いました。私は速やかな救いを神に叫び求めました。朝になると、娘ののどは治っていました。妻が病気の娘を見に来て、潰瘍が消え、娘が起きて遊びに行こうとしているのを見たとき、私に向けたまなざしを私は決して忘れないでしょう。その時から、家で医者を呼ぶよう求められたことは二度とありません。そして神は子供たちを不思議に守ってくださいました。子供たちは病気をほとんど知らずに育ちました。病気が来ても、そのたびに主ご自身が取り去ってくださいました。ただ、何かの教訓を学ぶべきときは別でした。そのときも、真の悔い改めの場に立つと、必ず回復と救いがもたらされました。

そのころ、主は私を導いて、それ以来生涯を捧げてきた特別な信仰の働きを始めさせてくださいました。それは決して神癒を教えるためではなく、公開の伝道集会や無料の集会によって、顧みられずにいる大衆に福音を宣べ伝えるためでした。数年間、これらの集会では、からだの癒しについて一言も語られませんでした。私たちの最大の目的は人々をキリストに導くことであって、脇道の問題で人々に先入観を与えたくなかったのです。けれども、私自身の癒しと娘の癒しについての事実が、私の小さな群れの中にひそかに広まりました。一人、また一人

と、私のところにそのことを尋ねに来て、自分たちも癒されないものかと聞くのでした。私は、私がしたように信じるなら癒されますと答え、家に帰って自分で神のことばを読み、よく考えて祈るよう勧めました。その最初の人は親しい姉妹で、当時キリスト教の働きで広く知られていた人でした。この方はのちに私たちのホームの執事になりました。二十年間、心臓病に苦しんできた人でした。一ヶ月ほどかけてこの事柄をよく考え、それから落ち着いた、きっぱりとした態度で、自分の病を神の前に差し出してもらいに来ました。彼女はたちまち癒され、その後数年間たゆまず働き、疲れというものをほとんど知りませんでした。やがて彼女は働きを終え、大きな平安と祝福の中で眠りにつきました。そのうちに、一人、また一人と、このことを尋ねに来る人が増えました。そしてついに、金曜集会が生まれました。この特別な主題に関心のある人が誰でも、決まった時と場所に集まって教えを受け、互いの証によって力づけ合えるようにするためです。この集会は今では、あらゆる福音派の教会や多くのさまざまな家庭から数百人が集まるまでに成長しました。

この数年のあいだに私が見てきた癒しの事例は、何冊もの本を満たすほどです。それは社会のあらゆる階層、あらゆる宗教的見解、あらゆる職業や仕事、あらゆる種類の病気に及んでいます。スピリチュアリズムの信奉者が来たこともあります。サタンに仕えてついに心身を壊し、苦しみからの救いを求めて来たのです。しかし、この恐るべきわなを完全に捨てないかぎり、そのような人と一緒に祈ってよいとさえ思えたことは一度もありません。このわながもたらす害悪について、悲しく恥ずべき打ち明け話を聞いたこともあります。ローマ・カトリックの人が、何か迷信的な儀式を受けに来るかのように来たこともあります。そういう人も、忍耐強く教えを受けて真の救い主に導かれ、癒されるのを見たことがあります。自分や愛する人が祈りによって治るなら大金を出すと申し出た人もいました。しかし私は、そういう人にあえて手を出そうとはしませんでした。ただ、まっすぐキリストのもとに行かせ、こう告げるだけでした。キリストの足もとで真に悔い改め、信頼するときにだけ、救いを期待できるのです、と。哀れな罪人が癒しを求めて来て、救いを見いだして帰って行ったこともあります。病気から逃れたいという願いがきっかけでキリストに導かれた人は大勢います。私は、相手がまずイエスを救い主として受け入れるまでは、その人の癒しを求めることはできないと感じてきました。けれども、魂が救われ、からだが癒されるのを同じ時に見たことも何度かあります。私は誰にも私を癒し手として仰ぐことを許しませんでした。その人が私自身や私の祈りに少しでも頼っているあいだは、その人のために祈ってよいと思えませんでした。キリストの功績と約束と執り成しのほかに、何かに頼っているあいだも同じです。

私のいちばん大切な仕事は、たいてい、私自身と私の影を人々の前からどけて、イエスを人々の目にはっきり見えるようにすることでした。ごくつつましい、読み書きもろくにできないクリスチャンが、突然、栄光に満ちて癒され、驚くほどの信仰に満たされるのを見てきました。一方で、優れた知性の持ち主や大きな名声のあるクリスチャンが、主の衣のふさにさえ触れられないのも見てきました。たいていの場合、彼らはそうするほど低くなることができなかったのです。あるとき、優秀な医師が集会で立ち上がり、このことについて学識豊かな演説をしました。そしてその隣で、ひとりのつつましい娘が癒されるのを見ました。初めて会ったとき、この考えを理解する力もないように見えた娘でしたが、最も重い段階の肺結核から癒され、短かった脚が一瞬のうちに五センチ伸びたのです。キリストのこの祝福された賜物が、多くの貧しい人々の家に安らぎと言いようのない祝福をもたらすのを、私は見てきました。疲れ果てて働く女性たちから、エジプトの鉄の炉のような束縛を取り去るのも見てきました。また、洗練された人、教養ある人、裕福な人の多くの家庭にもそれが入っていくのを見てきました。その人たちは恥じることなく良い告白をし、完全な救い主であるキリストについて立派な証をしました。神学者が神癒をこのうえなく論理的に攻撃したあとで、自分の教会の人が癒されるのを、私はたびたび見てきました。それは、彼が反論も説明もできない形での答えでした。ときには、こうして癒された素朴な人のひとりを、大口をたたく不信仰者のところに連れて行き、彼女自身の素朴な話をしてもらったこともあります。すると彼は圧倒され、黙り込み、時には深く心を動かされて帰って行きました。この町で最も優秀な弁護士の一人が、ごく最近、私に語ってくれました。私たちの良き友人ジョン・エルシーが癒され、その後献身の生活を送っているのを見て、キリスト教が真理であることを完全に確信

したというのです。世俗の女性たちが深い罪の自覚に打ちひしがれ、金曜集会のありのままの素朴な証によって、深く真実な信仰生活を求めるようになったことも、たびたびありました。多くの愛する牧師たちが、魂とからだのために主イエスをその満ちあふれる豊かさのままに受け入れるのを見てきました。この町で最も献身的で著名なキリストのしもべの中にも、主を自分の癒し主として認めることを誇りとしている人々がいます。けれども私は、教会の拘束衣こそが何よりもきつい足かせであり、保守派や教会の意見への恐れこそが何よりも容赦のない束縛であることにも気づきました。最高の地位にある愛する医師の中にも、イエスを自分の癒し主として受け入れ、患者の準備ができていれば、喜んで主の手にゆだねるよう導いている人が少なくありません。そうした医師の何人かは私たちの金曜集会で見かけますし、ほかの町にも大勢います。最も献身的なクリスチャンの働き人や都市宣教師の多くが、この尊い真理を見いだしました。中には、自分の教会や団体で偏見と反対という苦い試練に直面しなければならなかった人もいます。しかし、彼らが賢明で、真実で、忠実であったところでは、神は最後には彼らの正しさを明らかにしてくださいました。さまざまな教会の中で最も霊的な思いを持つ男女が、たいていこの真理を見て受け入れるよう導かれることに、私は気づきました。キリストが魂の中に内住される人格的な現実となられると、その方をからだから締め出しておくのは難しいのです。医療行為の問題を扱うことについて、私は深刻な実際上の困難を感じたことはありません。医療行為に何らかの価値を置いている人や、医療行為をやめるよう主にはっきり導かれていない人に、それをやめるよう勧めたことは一度もありません。キリストへの本当の信仰なしに医療行為をやめても無益です。そして、本当に自分の病をキリストにゆだね、キリストが引き受けてくださったと信じる人は、ふつう、ほかの手に触れてほしいとは思いません。ほかに何かが必要だとも思わないのです。キリストの超自然的な助けを本当に信じている人は、医療行為を求めません。そしてこの信仰がない人に対して、得られるかぎり最善の助けを受けることを妨げようとしたことは一度もありません。私は、誰かに神癒を受け入れるよう強く勧めるよう召されていると感じたことはありません。真理を示して、神に導いていただくほうがよいとわかりました。十分に確信していないならやってみないようにと、強く勧めたこともたびたびあります。するとかえって、その人はいっそう強く駆り立てられ、本当の信仰を持っていることが示されました。私は、神癒を福音そのものとみなすべきだと感じたことはありません。それは福音の一部ですが、私たちは人々の魂の救いと聖化のために、はるかに熱心に働いています。センセーショナルな話題を好む世俗の新聞は、この教理を私たちの一部が特に入れ込んでいる道楽のように描こうとしてきました。しかし実際には、このための集会は週に一回だけで、霊的な教えと祝福のための集会は七回あります。

癒しの事例はまことにさまざまです。初期のころの最も驚くべき事例の一つは、八年間関節を曲げたことのない女性でした。私たちの集会では松葉杖をついて立ったままで、礼拝のあいだ一度も座ることができませんでした。八年間座ったことがなかったのです。彼女は一瞬のうちに、羽根で触れられたかのように癒され、その場にいた全員が驚嘆しました。脊椎湾曲症が治った人もいます。非常に多くの人が線維腫から解放され、悪性で不治のがんから救われた人も少しいます。外科の助けなしに骨折が治った例も二つあります。最も重い心臓病の例も多く、肺結核の例もいくつかあり、ヘルニアの絶望的な例もいくつかあります。もしキリストが支えてくださらなかったら、彼らのように歩き出すことは死を意味したでしょう。麻痺と脳軟化、てんかんと舞踏病も、はっきりと治りました。危険な精神錯乱の例もいくつか、信仰の祈りによって回復しました。このような事例の数は数千に達するでしょう。そのいくつかでも詳しく述べることは不可能です。私たちにとって何よりの喜びは、こうして滅びから贖い出され、神の働きと人々の必要のために捧げられた生涯に、まことに祝福された栄光ある実が結ばれていることです。そうした愛する人々のひとりは、数百人がキリストに導かれている伝道所を任されています。ほかのひとりは、病気のために宣教団体から派遣を断られましたが、主によって癒され、今は再び夫と共にインドにいて、異教徒にキリストを宣べ伝えています。日本にいる人も、アフリカにいる人も、南アメリカにいる人も、イギリスにいる人もいます。この町の大通りや路地で、またこの国で最も熱心な働きに携わっている人も大勢います。彼らが受けた祝福と、彼ら自身が人々にとっての祝福となったことを、神に感謝します。

この数年間、神は私たちのホームを開いてくださり、その中で何百人もの神の愛する子供たちに会い、彼らが力と祝福のうちに出て行くのを見させてくださいました。ほかにもホームがこの国とほかの国々に散らばっています。そしてすでに、この国とほかの国々の大勢の群衆が手を取り合い、ともに歌いながら家路をたどっています。

「わがたましいよ、主をほめよ。そのすべてのめぐみを心にとめよ。わがたましいよ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なるみ名をほめよ。主はあなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを墓からあがないいだし、いつくしみと、あわれみとをあなたにこうむらせ、あなたの生きながらえるかぎり、良き物をもってあなたを飽き足らせられる。こうしてあなたは若返って、わしのように新たになる」（詩篇一〇三・一～五）。

付録　いわゆるクリスチャン・サイエンス

多くの人が、この奇妙な反キリスト教的な誤りを、不思議なことに神癒と混同しています。また、よくわかっているはずの多くの人が、それが配布するおびただしい数の浅薄なトラクトや出版物によって、知らず知らずのうちにそのわなに引き込まれています。それらの出版物は、その本当の教えや不信仰の哲学には一切触れず、症状を無視することなど、簡単で一見無害な指示をいくつか載せているだけなのです。そこで私たちは、私たち自身の本やほかの本から、その本当の性格を注意深く述べた文章をいくつか、またその権威ある書物からの直接の引用を、ここに付け加えます。この哲学は、イエス・キリストが肉体をとって来られたことを否定します。キリストのからだの実在を否定します。ですから、その教えは反キリスト的です。これは神癒ではありません。両者のあいだには何の交わりもありません。これは、偽って科学と呼ばれているものの惑わしの一つです。これはキリスト教を根底から崩すでしょう。これは最も致命的な不信仰です。これは贖いを完全に無にしてしまいます。罪がないのなら、贖いもありえないからです。こんな偽りによって癒されるくらいなら、私は一生あらゆる肉体の苦しみを味わいながら病んでいるほうがましです。

その多くは漠然としていてわかりにくいものですが、教理や原理がはっきり述べられているところでは、どこでも聖書とまったく相いれません。ある人がすでに言っているように、それは少し仏教に似ていますが、それ以上に、イギリスの理神論と観念論にドイツの汎神論を合わせたものによく似ています。それは、物質の存在、神による物質的宇宙の創造、イエス・キリストの贖い、そしてキリスト教体系に特有の教理を、はっきりと否定しています。それは一連の原理を掲げていますが、そのいくつかをエディ夫人の標準的な書物から引用します。

クリスチャン・サイエンティストの綱領

一、人格的な神も、人格的な悪魔も、人格的な人間も存在しない。

二、神は人格ではなく原理であり、物質ではなく心である。この原理は、聖書が宣言しているもの、すなわちいのち、真理、愛である。

三、完全な心、すなわち原理である神は、完全な観念を含み、それだけが実在するもの、永遠なるものである。

五、霊が唯一の実体である。まさに「望んでいる事がらの実体、まだ見ていない事実の証拠」である。霊的なもの、永遠なものは実体であり、物質的なもの、一時的なものは実体ではない。

十、人間は神の観念、心の概念であったし、今もそうである。この観念は心と共存し、心と共に永遠である。それゆえ、人間は永遠に心の中にあったが、心が人間の中にあったことは一度もない。物質的な観念や人格的な人間は存在したことがない。すべては心であり、物質は存在しない。すべては調和であり、不調和は存在しない。すべてはいのちであり、死は存在しない。すべては善であり、悪は存在しない。すべては神とその観念である。

十一、科学は、物質すなわち死ぬべき肉体が、信念と幻想にすぎないと判定する。存在についてのこの科学的理解をもって病や罪や死を包囲するなら、神と人間についての私たちの言明が真実であるとわかるであろう。また、それと反対の言明こそ、真理が追い出す誤りと不調和であることもわかるであろう。……異教ローマの神話が神についてのより霊的な観念に道を譲ったように、私たちの物質的な神学、すなわち教理的な宗教も、物質的な人間が示すよりも霊的な神の観念に道を譲るであろう。そしてついには、あらゆる物質性が思考の中で消え去り、有限なものは無限なものに場を譲るであろう。非人格的で、限りなく、誤ることのない観念と、その観念の非人格的で、限りない、すなわち無限の原理が現れるであろう。そして「御国が天にあるとおり地にも」実現するであろう。

十三、霊すなわち神はただ一つである。それゆえ、霊たちや神々は存在せず、悪霊も存在しない。霊は神だからである。人格的な神、人格的な人間、人格的な

悪魔、悪霊と善霊は、神学の作り話であり、最終的には神と人間についての反対の科学に道を譲らなければならない単なる信念にすぎない。

十八、いのち、真理、愛が三位一体、すなわち三一の原理であり、三つにして一つ、働きにおいても実体においても同じであって、これらが唯一の神である。聖霊は神の科学であり、この三一の原理を啓示し説明し、すべての真理に導く。キリストは神の別名にすぎず、イエスは一人の人間の名であった。イエスの受胎は霊的なものであった。マリアの霊性は、不死の心が真理と愛のよりよい似姿、すなわち善にして純粋なイエスのうちに映し出されるための透明な媒体であった。マリアの神の観念と人間の概念には、男性的な、すなわち感覚的な思考の要素が入り込んで、その観念を汚すことはなかった。こうしてイエスは、真理と誤り、魂と感覚のあいだに立つ仲介の観念となった。それは神に逆らうことなく、病人を癒し、感覚の幻想、すなわち物質の中にいのちと知性があるという信念を払いのけた。そして非人格的な真理を明らかにした。すなわち、魂と神は一つであり、「わたし」すなわち父であるという真理である。

十九、私たちの教会はキリストの上に建てられている。そのキリストとは人格ではなく、キリストが「道であり、真理であり、命である」と言われた原理である。クリスチャン・サイエンスこそがその道であり、その土台は永遠である。

ボストンのゴードン博士は、その教えを次のように要約しています。クリスチャン・サイエンスは自らを「神についての理解」と呼んでいますが、これはギリシャ語の「テオソフィア（神智学）」を訳したものにすぎません。神智学の根本的な公理の一つは、次の文に示されています。「人格的な悪魔は存在しない。神秘的に悪魔と呼ばれるものは、神の否定であり反対である。そして神は『わたしは有る』、すなわち肯定的な存在であるが、悪魔は有るものではない」。その綱領は、「人格的な神も、人格的な悪魔も、人格的な人間も存在しない」という驚くべき宣言で始まっています。

神のことばに明らかに矛盾していることに加えて、それが私たちの敬虔な思いに与える衝撃についても告白しなければなりません。イエスが絶えず形而上学者、クリスチャン・サイエンスの実証者として語られ、「地上を歩んだ人の中で最も科学的な人」と呼ばれるのを聞かされるのです。園での苦悶の原因は、イエスが「物質の中にいのちがあると信じるというまったくの誤り」に触れられたことだと言われます。十字架の上では、この世に「神の科学の模範と証明」を示しておられたのだと言われます。イエスのキリスト教が「罪と病と死を滅ぼしたのは、それが形而上学であったからであり、人格的な感覚が十字架を負い、完全な原理の右に達した」のだと言われるのです。

これまで述べてきたことからすれば、クリスチャン・サイエンスを、聖書で「病んでいる人を救う」と言われている「信仰による祈」と区別する必要はほとんどないでしょう。私たちの知るかぎり、この約束を信じ、それを用いる人で、その成就が心による心への作用にかかっていると考えた人はいません。「信仰治療」と時に呼ばれるものを信じる人はみな、それが苦しむ人のからだに対する神の直接的で超自然的な働きの結果であると考えています。クリスチャン・サイエンスは、病人の回復のための祈りの効力をはっきりと否定しています。こう言っています。

「神に病人を癒してくださいと願っても、愛の耳に届くという点では、その常なる臨在以上の効果はない。それがもたらす唯一の有益な効果は、より強い信仰を通して心がからだに作用し、からだを癒すことである。しかしこれは、一つの信念が別の信念を追い出しているのである。人格的な神への信念が病気への信念を追い出しているにすぎず、癒しをもたらす原理の理解を与えるものではない」（『科学と健康』一七一ページ）。

ここでは、異なる二つのものの対立があまりにもはっきりしているので、それに注意を促すだけで十分です。

シカゴのグリーン・ウッド牧師は、次のような力強いことばを付け加えています。「この科学の隅のかしら石は、次の公準である。すなわち、いのちの不死の基礎は魂であってからだではなく、いのちであって死ではない」。つまり、いのちの不死の基礎はいのちである、言い換えれば、いのちはそれ自身の基礎だというのです。もう十分でしょう。これは、升の中でネズミが自分のしっぽを追いかけてぐるぐる走り回っているのにそっくりです。これは土台のない幻の建物ではないでしょうか。

これこそ、イスラエルの王サウルがそれに頼ったために王国といのちを失った、あの口寄せではないでしょうか。神政のもとでは死をもって罰せられたものではないでしょうか。これこそ、私たちの主イエス・キリストのからだは神話である、あるいは今言われているように観念であると主張した、一世紀のグノーシス主義の神秘思想ではないでしょうか。このグノーシス主義の神秘思想に対抗するために、ヨハネは第一の手紙を書きました。その中で彼は、神の権威によって、人間イエスは神話ではなく、「観念」でもなく、まことの人格、実在の人間であったことを示しています。第一ヨハネ四章二、三節を見てください。「あなたがたは、こうして神の霊を知るのである。すなわち、イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白する霊は、すべて神から出ているものであり、イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白しない霊は、すべて神から出ているものではない。これは、反キリストの霊である。あなたがたは、それが来るとかねて聞いていたが、今やすでに世にきている」。また五章では、イエスは神の子であると言われています（第一ヨハネ五・五）。そして「子たちよ。気をつけて、偶像を避けなさい」（第一ヨハネ五・二一）とあります。終わりの時については、こう書かれています。「にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、しるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。だから、気をつけていなさい。いっさいの事を、あなたがたに前もって言っておく」（マルコ一三・二二～二三）。すべての人は警戒してください。この鬼火を追いかけた結果、自分が選民ではなく、仏教とグノーシス主義の神秘思想にだまされた者であると明らかになることのないように。それは十九世紀のキリスト教国アメリカに、「クリスチャン・サイエンス」の装いのもとで、ひそかに、まがい物として押しつけられたものなのです！

神癒の福音

2026年11月23日版
著者　A・B・シンプソン
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/gospel-of-healing/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/gospel-of-healing
第六章の途中から付録までは、原文（The Gospel of Healing）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC BY-SA 4.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。